

古市澄胤
奈良番匠
下河内ニ

番匠下行
物ナキニ
依リ奈良
澄胤番匠
ノ在所シ
破壞セシ

文明十一年十月二日

七二二

〔大乘院寺社雜事記〕

七十 九月十五日

一河内より奈良番匠共令申古市召之、五十人分明日可下向云々、

廿一日、

一河内國へ番匠共重而下向、詰番歟云々、

閏九月十七日、雨下、

一河内下向公事番匠、先日自古市召下之處、下行物無之間、八九人分罷上了、

屋形腹立云々、仍今日彼番匠共在所自古市進發了、不便中々無是非次第

也、寺座共如今者、不可有正躰歟、

〔大乘院寺社雜事記〕

七十 十月四日、雨下、

一去二日、河内新造之屋形移住云々、至今日三ケ日也、明日ハ當國事可披露

歟云々、

筒井順尊、兵ヲ率キテ、古市澄胤ノ兵ヲ、大和西方院山ニ破リ、明日、同國

紀寺ニ戰ヒテ、稗田莊等ヲ火ク、尋テ復、澄胤ト西方院山西御門ニ戰ヒ

テ敗走ス、

〔大乘院寺社雜事記〕

七十 十月二日、晦日ヨリ

西方院山
城自燒

盜福智院
松谷等ノ
郷ニ亂入

順尊福住
城ニ入ル
椿尾ヲ燒

成身院順
宣等賀世
山般若寺
重衡櫻邊
順尊柿本
上宮ニ陣

順尊椿尾
住ニ出テ
住ニ還ル

古市勢山
村藤原ヲ
守ル

古市合力
衆

一西方院山城自燒、古市矢負小々新宮邊ニ相殘之間、筒井方矢負責來テ追

拂之了、其次福智院郷、松谷郷等物取亂入、以外次第也、筒井大將自北責入

衆成身院手者并蓮花院坊主定寛賢舜房聖延云々、轉害門邊ニ居歟云々、

大安寺東在家少々燒了、

筒井入福住了、山田迎參云々、五ケ庄入衆燒拂椿尾云々、

三日、

一成身院賀世山ニ出帳云々、榎二荷一種遣之、畏入云々、蓮花院般若寺邊ニ

出張、榎一荷一種遣之、畏入云々、法來手者重衡櫻邊ニ出陣、悉皆三十人云

々、兩方二百計勢也、眞實ハ八十計可有、歟云々、筒井柿本上宮ニ陣取云々、

今日於紀寺口足輕矢運在之、無殊儀者也、

四日、雨下、

一筒井ハ昨日椿尾ニ出張、夕部福住ニ引退了云々、昨日稗田并白土之出垣

内在家十間計燒了、山村、藤原兩所大事也、自古市持之、筒井方勢五百計可

有歟云々、古市方大勢ナリ、

万歳岡、飯高番條、白土、佐川、山田、窪城、高田、椿尾、俱之以下、其外申通方合

文明十一年十月二日

七二三

戒重下十市ノ戦

山城攝津等所在大將等足輕大將退散ス

文明十一年十月二日

七二六

一去二日、於鉢伏山箸尾辰巳矢田若黨三橋兄弟二人被打死了、御方沙汰也、筒井足輕之所爲也、希代不運不吉事云々、

一去三日、古市知行輝田庄大略焼拂、白土之出垣内在家焼之、近日戒重與十市合戦、兩方手負死人在之、十市郷年貢共、十市方ニ責取分在之、近所放火等在之、

八日、

一筒井方相語、山城攝州以下之惡黨足輕大將共、悉以令退散了、不可成事取立條、以外由申之腹立了云々、夜前殊更物忿之間、武具共捨置奔出云々、今日古市方足輕共、行向般若寺邊取之、希有次第、以外事也、成身蓮花院成敗、京都之屋形所存如何、

九日、

一古市合力ニ窪城佐川者悉皆不入云々、小南同前、但次郎丸居古市云々、山田合力事不可叶之由古市申、宗藝五師令下向、色々申合子細在之故、鹿野園方請取之云々、一所詮敵方輩濟々在之、申通之間、今市大將堤勘解由左衛門尉榮重ハ令隔

心云々、色々古市西雖申述、自他不可合力之由申切歟云々、是用心也、

〔後法興院政家記〕

四

十月三日、卯、晴、勸修寺中納言來、此間數日在南、近日

上洛云々、委相尋處、昨日筒井可責入之由、有沙汰云々、

○順尊等澄胤ト轉害ニ戰フコト、閏九月十一日ノ條ニ、又郡山及ビ中城ヲ攻メテ民家ヲ火クコト、本月十二日ノ條ニ見ユ、

三日、卯、大内政弘、和藿家守ヲシテ、其屋敷地料ヲ周防興隆寺ニ辨償セシム、

〔興隆寺文書〕

○四 周防

和藿藏人家守申、屋敷貳段半、近田熊事有限至地料錢者、嚴重可令辨償之由被仰付畢、聊有無沙汰者、自領主堅固可被加催促、其時若及異儀者、子細令言上、如元可被還付條勿論之由、所被仰出也、仍執達如件、

文明十一年十月三日

平武明 在判

右衛門尉弘康 在判

氷上山大坊

五日、卯、中院通秀ヲ權大納言ニ還任ス、

文明十一年十月三日 五日

七二七

通秀ヲ選
任セラレ
ントシ之
ヲ請ハシ

口宣案到
來

宣旨

〔公卿補任〕

三四十

前權大納言正二位源通秀

五

十月五日還任、○諸家傳同シ

〔十輪院內府記〕

十月三日早天以民部卿被仰云、亞相事可還任、於拜賀事者、

雖非早速、其段可有御心得、以吉曜可申入云々、旁存旨有之、別テ斟酌申入之、由談合之處、勅定之處可申入子細之由、可惡之旨入魂、仍畏入之由申入了、

六日、還任事、昨夕被仰付頭中將云々、伯民部卿告之、以次惠蜜甘、

八日、晴、○中略今日被除前大納言、中院大納言之由也、

十二日、天晴、○中略還任口宣到來、去五日付也、□任參賀武家、□按

察卿意見、又新宰等、□令斟酌如此義、傍例如何之間、尋問者也、

十一月十五日、大外記師富朝臣持參還任宣旨、披見之處、

正三位行權中納言藤原朝臣廣光宣奉勅、件人如舊宜爲權大納言者、

文明十一年十月五日、掃部頭兼大外記造酒正博士中原朝臣師富奉

此宣紙○旨不普通、仍尋上卿之處、舊例如此云々、仍守下知之旨歟、余□誠其事也、如予所存者、前權大納言通秀□可爲此分也、答其事候、敍留之時如此、□可入之事也云々、

義政經堂
ヲ修造ス
布施物少
キニ依リ
讀經僧ヲ
減ズ

北野社萬部經會再興シ、義政父子之二詣ス、尋テ、尊敦親王モ亦臨マル、

〔長興宿禰記〕

中

十月五日、巳晴、今日北野万部法華經○麻ラシ之亂中無沙汰、經堂

破損之間爲室町御沙汰、自去頃被付用脚千餘貫、被修造、今日有興行、經衆僧

呂千餘人、先規也、雖然布施物依難事行、人數減三百餘人、上洛讀誦之、室町殿

渡御有御聽聞、將軍同有御詣、渡御松梅院坊如先規云々、

十一日、亥晴、今日予異跡、詣北野万部經、布施下野守、清和泉守、杉原伊賀守、同

安藝守等相伴、還向招引之間、向所司代浦上美作守旅店○北野社僧坊也、爲有

朝食、終日酒宴、入夜歸宅、

〔親長卿記〕

十

十月五日、晴、北野千部經再興、但人數三百三十人云々、

十一日、陰、參北野千部經、

〔晴富宿禰記〕

十月五日、巳晴、○中略內野御經開白也、室町殿、同上様御聽聞、官

領、○山左衛門督長、細川九郎、一色等參仕云々、侍所赤松兵部少輔、所司代浦上警固云々、應仁亂世以來無之處、當年御再興、誠可然事也、但人數三百人云々、經堂被加修理者也、

九日、酉晴、○中略北野御經、今日不讀之云々、

尊親王
參詣セウ
ル
二條政嗣
酒饌ヲ獻
妙法納豆
三條西實
隆蜜柑ヲ
獻ズ
實相院増
運參詣

供料下行
ナキ爲メ
十三日讀
經ナシ

奈良町民
逐電ス
興福東大
兩寺社頭
參詣者ナ
シ

木津邊ニ
於テ足輕
歸テ人
剝テ要シ
テ
成身院順
宣東北院
課ニ料足
ス

文明十一年十月五日

七三〇

〔京都御所東山御文庫記錄〕

○甲二十一 御湯殿上日記 十月八日、けさ二

の宮の御ウ、御きやうへ御万いり、めてふさこて、(政則)二てう殿御てうし万い
らせらるゝ、めうやう院の宮に御うたよりいとひた万いる、新宰相中將(三條西實隆)み
つうん万いらるゝ、

〔後法興院政家記〕

四 十月十二日、甲晴、略中申剋實門被歸宅、次被參詣北
野御經云々、

〔大乘院日記目錄〕

三 十月六日、北野御經三百口計也、兩度御成在之、

〔大乘院寺社雜事記〕

一七 十月六日、

一自今日北野御經在之云々、
廿九日、

一松殿下向、夜部宿木津云々、京都事條々相語、

一自六日北野御經有之、經衆三百人計、守護共ニ被仰付之、被召上云々、供
料無下行之間、十三日ハ無御經云々、繼經一日御臺供料無下行、一日梅
之酒屋松梅院へ兩度御成盡事云々、

〔武家年代記〕

下書 文明十一年十月十五日、北野經、自應仁二至文明十亂中、(忠)轉當

年己再興、依不事調、經衆三百人、侍所赤松兵部少輔政則、所司代浦上美作守則宗、

六日、戊午古市澄胤、軍資ヲ奈良ニ課ス、尋テ、筒井順尊モ亦、町錢ヲ徴ス、

〔大乘院寺社雜事記〕一七 十月六日、

一奈良中月別、今日自古市以勢令催促、如毎月、其外用錢酒以下群(俗)勢用申懸
之云々、又筒井方色々事申懸之、大略奈良在家逐電、京衆在家之者ハ、悉以
令上洛云々、兩寺社頭參詣者一人も無之、田舎又合戰在之、長谷寺、吉野等
參詣輩一切無之云々、福智院郷西方ハ大略移他所云々、

九日、
一自筒井方、奈良中町錢催促之、嚴密之間各出之、猶以邪法事在之、
廿一日、

一奈良中物、忿迷惑之間、此間在奈良京衆先日八十人計歸京、此一兩日間十
七八人歸京之處、於木津邊、足輕衆共剝取之云々、相次足輕共罷上之處、於
道如此致其沙汰、誠以惡黨其所爲也、

廿八日、

一自中川方東北院ニ料足百貫分申懸之云々、同待法師河内殿ニ先日二十

文明十一年十月六日

七三一

澄胤奈良
ニ有德錢
ヲ順宣奈良
ニ棟別錢
課ス

大和幸郷
課ス夫ヲ
兩門衆領
民ヲ衆中
召仕トナ
スコトナ
井順永ニ
初マレニ
郷錢相撲
課ス

文明十一年十月六日

七三二

貫分申付之、高矢北小路各申懸之、自門跡内々被仰之間、高矢ハ無爲歟云々、各雜説也、但近日事ハ不可有法量歟、

十一月廿八日、

一昨日自古市、奈良中有德錢事相催之了、云郷錢、云有德錢、珍事次第也、又中川足輕共、奈良中棟別錢懸之云々、十匹宛云々、兩方沙汰惡行不及是非者歟、

〔大乘院寺社雜事記〕

三十七 文明十二年四月五日、雨下、

一古市奈良中有德錢懸之、甲乙人迷惑、如此日々夜々懸錢可爲如何哉云々、

〔大乘院寺社雜事記〕

四十 八月廿日、

一幸郷民等歎申、自古市方人夫共申懸、於于今者可逐電云々、此子細仰遣古市、惣而兩門領知爲衆中召仕事、故筒井律師順永之時ヨリ、爲慶忍專當奉行召仕初了、以此例又古市召仕、剩郷錢相舞錢等相懸之、於領主者、一向令見所體也、珍事々々、如今者奈良中大略可滅亡云々、

○澄胤、十二年ニ、又有德錢ヲ奈良ニ課シ、人夫ヲ大和幸郷ニ課スルコト、便宜合斂ス、又順尊、段錢ヲ奈良ニ課スルコト、本年六月十八日ノ條

ニ見ユ、

〔參考〕

〔大和志料〕

添上郡 幸 上下アリ、正長ノ間別帳ニ幸、三十一又尋尊僧正長

四年間九記ニ幸郷ト即此坊目考ニ、往昔幸德井家住居於今井在之、即幸德

井ト號スト見ユ、幸德井氏ハ本姓賀茂氏ニシテ、世々ト篋ヲ掌ル、明應五年

八月、長谷寺觀音像刀始勘文ニ、幸德三位朝臣友延ノ署名アリ、即チ當郷ノ

住人ナリ、

八日、庚申葉室光忠ヲ右中辨ニ任ズ、

〔親長卿記〕

十 十月八日、晴、(當代)光忠右中辨事勅許、

〔辨官補任〕

下 文明十二年庚子 右中辨從五位上藤光忠、廿十九任、元前右少辨、

自敵陣、三七五正五下、

十一日、癸亥亥子御祝、義政ニ餘饌ヲ賜フ、

〔京都御所東山御文庫記錄〕

甲二十一 御湯殿上日記 十月十一日、御斗

のこむろまらごのへは御まいりきり、日野の玄(政考)、う御つうひよて申さるゝ、ああたこあたへはごし、これごし、せんやうしよりのせまいる、

文明十一年十月八日 十一日

七三三

幸郷

勅使日野
政資寺
善法野
ナリ上ル
ナリ上ル
餅

中院通秀
餘饌ヲ賜
ハラシ
トテ請フ

廿三日、御ゐのこ、十一日よおかし、

〔十輪院内府記〕十月十一日、旬如恒、般藏主來、入夜亥子也、○中今夜嚴重可
申沙汰之由、命新宰相中將、

十二日、天晴、自新宰御食切到來、又自入江殿武家□到來、

山城平野社杉樹火ヲ發ス、藏人坊城俊名、官務ヲシテ、先例ヲ勘進セシム、

〔長興宿禰記〕中 十月十一日、亥、晴、是日平野森大杉火自出燃、告遣之間、即

小親雅入
先例ヲ注
進ス

神主吉田三位兼
俱卿兼帶之、馳參、所燒杉切顛、注進之間、藏人右少辨於兩局務被尋先例、
官務雅久宿禰注進、文永八年九月、當社杉自火燃、被行御卜、有祈謝宣下、

〔親長卿記〕十 十月十二日、晴、平野社怪異、社解到來、神宮寺□杉大木自木
内煙出、驚見之處、炎上云々、希代事歟、

十三日、晴、平野社怪異付、勾當内侍奏聞、勅答可尋先例之由、可仰俊名云々、即
仰遣了、

十六日、晴、平野怪異兩局勘例到來、急可被申室町殿之由申入了、□可申之由
有仰、

兩局先例
ヲ勘進ス
吉田兼俱
幕府ニ告
ケンコト
ヲ奏ス

廿三日、晴、侍從三位兼俱吉田
田神主、平野事可被申室町殿由、可奏聞云々、仰々之趣了、

〔晴富宿禰記〕十月十四日、寅、晴、藏人右少辨俊名奉書、平野社杉大木去十一

日、火煙出來、社司等注進被下之、祈禱等先例可注申云々、

十五日、丁、晴、平野杉火出來事、文永八年十月卅日有其例、今注進之、

幕府、吉川經基ニ命ジテ、朝夕兼友ノ衣料ヲ納メシム、

〔吉川文書原題吉川
家什書〕 二

朝夕三郎左衛門尉兼友衣料五貫文事、任例嚴密可被致其沙汰之由、所被仰
下也、仍執達如件、

文明十一年十月十一日

〔松田長秀〕
左衛門尉判

〔藤方貞通〕
信濃守判

〔朝基〕
吉川殿

十二日、甲子、筒井順尊、大和郡山及比中城ヲ攻メテ、民家ヲ火ク、古市澄胤等
ノ兵、擊チテ之ヲ却ク、

〔大乘院寺社雜事記〕一七十 十月十二日、

一自福住筒井大勢令發向郡山中城、在家共燒拂、自今市堤手者後責ニ罷出、
古市勢同馳向追拂之了、小南再筒井へ引入云々、此一兩日中、筒井内者共

文明十一年十月十五日

七三六

二百人計筒井郷ニ在之云々、兩合力勢歸陣了、中城無爲、引田城衆以下合力云々、筒井勢少々損了、

十四日、
一西忍來、古市事相語之、今分ハ雖敵方責來、城中儀不可有殊儀云々、古市山村、藤原、長井、鹿野、藪分ニ甲六百餘在之、

郡山今市引田以下総而千餘甲也、きこ不可成事云々、

一自昨日學侶集會在之、今度止集會之由一決、依何事有之哉、諸人不審也、就中自越智方申送云、越智引汲之坊舍事、自筒井方、自然致沙汰事有之者、爲返報沙汰筒井奇頼之坊舍可破却之由云々、寺門難義無是非事共在之、

十一月廿八日、

一今日筒井勢以下在々所々放火云々、田舎路次每事不通也云々、

○畠山義就ノ部下市若某、大和ニ入り、順尊ノ兵ト戰フコト、本月二十三日ノ條ニ見ユ、

十五日、大内政弘、周防松崎天滿宮ニ劔ヲ寄進ス、

〔長防風土記〕

六十七 三田尻宰判
佐波郡三十四

奉寄進

周防國佐波郡佐波令松崎酒垂山天滿宮御寶前

御劔 一腰、文明十一年八月一日、
白將軍家拜領

右寄進之意趣者、去十三日社頭并邊地經歷之時、於後門御井中白蛇出現、其端的之當意、成奇瑞之思、則温先例之處、於當社奉崇敬事、往昔以來、于今嚴重云々者、寄附之願望、所表敬神之旨也、仍狀如件、

文明十一年十月十五日 左京大夫從四位下多々良朝臣政弘敬白

筒井順尊、部下ヲ遣シテ、越智家榮ノ軍糧ヲ奪ハシム、

〔大乘院寺社雜事記〕 七十 十月十五日、

一筒井自身ハ雖居福住、足輕以下出之、筒井郷分大略知行之、自越智方納置八木寺社領押留分、悉以取納福住云々、十市郷事ハ、東よりハ大略十市知行同前云々、所詮筒井十市方足輕以下國中ニ滿々也、隨而古市合力万歳、高田以下兵糧運送事不叶也、珍事之由及其沙汰、河内森口衆此間長井邊ニ取陣、同兵糧難義也、依之奈良中在々所々申懸兵糧米、今日中市郷責之、六方以下色々及計略云々、古市足輕相加之間、令申古市云々、地下人等既

文明十一年十月十五日

七三七

文明十一年十月十七日

七三八

以及合戰了、近日自六方、筒井、古市兩所へ榎濟々遣之云々、

十一月三日、

一傳聞、古市被^(德)官人於辰市惡行之間、森口衆致沙汰了、嚴密之掟法置之云々、古市失面目歟、總而近日號森口衆沙汰、古市、鹿野、蘭者共惡行事在之、森口衆聞之、令腹立如此云々、

十九日、

一高田庄御米并給之米事、今度亂ニ、近所野垣内以下所々ニ預置之處、其在所被發向之間、御米等紛失云々、於高田者、在所無爲也、則古市御給分切田方ハ、致其沙汰云々、然上者、御米以下、依何事可無沙汰哉、

十七日、^(己)幕府、小嶋又次郎ノ伊勢衛司職ヲ違亂スルヲ停メテ、安正松千代ニ之ヲ安堵セシム、

〔晴富宿禰記〕十月廿九日、^(巳)晴、^(辛)略、^(中)伊勢衛士安正安堵之旨、奉書等持參之、

仍寫置之者也、

安正松千代申、伊勢國衛司職事、申給問狀奉書被及違亂云々、太不可然、所詮不日可被止其妨之由、被仰出候也、仍執達如件、

奉書

森口衆古市部下ノ惡行者ヲ罰ス

文明十一年十月十七日

英基判

小嶋又次郎殿

貞康判

安堵狀

伊勢國衛司職事當知行無相違之處、小嶋又次郎申給問狀奉書^(及)^(違)^(亂)^(云)^(々)
謂、早退^(其)^(妨)^(可)^(被)^(仰)^(出)^(候)^(也)^(仍)^(執)^(達)^(如)^(件)

文明十一年十月十七日

英基判

貞康判

安正松千代殿

十八日、^(庚)讚岐志度寺火夕、

〔半陶文集〕一 讚岐志度寺東閣魔堂幹緣疏 有序

讚州路志度道場熾盛光院、乃海岸孤絕之處、觀音靈感之地也、推古天皇三十七年、補陀大士變身爲工來、自造聖像、桓武帝延曆元年、瑛羅國王託人以建梵宇、故山號補陀落、俗傳爲瑛羅氏香火矣、爾來一千餘歲、寺廢燬者數矣、按寺故事、其將起廢也、必先有人、暴死入冥中見王、命之以寺事、蘇生之後、募財十方、

文明十一年十月十八日

七三九

以復舊觀也。大率以爲常矣。寺之東西架兩堂。以安王像。取義雙王者耶。昔有苾芻尼稱阿。不知何許人。結草寺側而居。堅持毘尼。專念彌陀。人皆異之。一夕無病氣絕。信宿而蘇曰。吾到冥府。王見喜曰。汝命未盡。當返本國。爲我於志度道場。東偏。規地構堂。而刻等我長之像。安之。是我所望汝也。仍自以手量其身。示稱阿。々々拜而受命。於是如夢寤而蘇矣。輒傾赤心。戶告家募。見者聞者靡不樂施。堂成于旦夕。如王言焉。所謂東閣魔堂是也。堂中安王及地藏薩埵。泰山府君。俱生神等也。教中以琰羅爲觀音應化者有焉。爲地藏應化者有焉。可并按。蓋三卽一。豈異身乎。又琰羅在當來爲三界導師。號普王如來。孰不歸敬哉。文明十一年十月十八日。畢方爲祟。碧瓦朱甍二十餘宇。食頃灰燼矣。東堂其一也。凡草創以來。火于寺者六。而東堂罹災者三于茲矣。經曰。閻羅宮殿百寶莊嚴。一日之中三變炎熾。由是觀之。今東堂三火。抑亦有以哉。蓋示衆生界成壞有數也。夫本寺之宜先者琰羅堂。而堂之宜先者東堂爲最也。雖然。寺無恒產。費用居多。爲之奈何。小比丘朝吽謹持短疏。遍扣大小檀門。庶幾各戮力。以成就勝緣。則一滴々錢變成現。在福海。未來佛果海者也。詞曰。

創立以來
火災六度

東堂三度
火々

朝吽募財

來十地十身。拜琰羅老於御史臺。活棒飛雨。署泰山君於尙書令。判筆生風。佛後誤問宣室鬼神。人間坐致冥府官爵。梁武設六道之祭。人趣黃珠天趣白珠。歐公入十王之宮。善事金簿。惡事鐵簿。既見俱生神傳命。其奈孔方兄絕交。涅槃失猛方等。失寬檀越七世。迦葉從貧善現。從富布施三輪。

文明十四年三月吉辰

幹緣比丘朝吽稽首

二十日、壬子御誕辰、

〔京都御所東山御文庫記錄〕

○甲二十一日

御湯殿上日記

十月廿日、宮の御

うゝ御さんしやう日此御さう月方いる、皇子御誕生ノコト、寛正五年十月二十日ノ條ニ見ユ、

二十一日、西癸赤松政則、播磨二歸ル、

〔後法興院政家記〕

四

十月廿二日、

甲晴、略

中

去曉赤松

兵部少輔

下向播州

云々、

〔晴富宿禰記〕

十月廿二日、

甲晴、略

中

今曉赤松

兵部少輔

下向播磨國

依

物忝

不申御暇、俄下向云々、

〔大乘院日記目錄〕

三

十月廿二日、

赤松在國

手者相殘云々、

〔大乘院寺社雜事記〕

七十

九月廿七日、

暇ヲ請ハ
ズシテ俄
ニ下國ス

一 權中納言光臨京都物語共在之、赤松近日必々可下向之由、在其沙汰云々、

〔大乘院寺社雜事記〕一七十月廿九日、

一 松殿下向、夜部宿木津云々、京都事條々相語、略中

一 廿二日、赤松在國、自身罷下、内者根本衆八人于今在京云々、所詮不及覺

悟體也云々、

〔大乘院寺社雜事記〕

○七十一 文明十一年十二月三十日裏文書

其方事其後不承候、何とく御座候やらん種々申候間、其御心ち計候、暮々

一 さとあき候家者、やすく候計候、一族共とりかへ候のんする在増候とて

下候哉、色々申候へ共不實候、只はや皆々在國までこて候、義思一色近日可下國

内々分候、如今候者、公武二人ならてのこり候ましく候、珍事く、越前道

自朝倉きりふさた候、北國への音信候ましく候、我らも北の信をこそ待候

へひまあき候、四日コノ條十一月内裏還行いづとも候のす候、月七日ノ條十二月

收、江州の事むさくつめて候、豊後不可有正體候歟、委細可參仰候、

十月廿七日

隨心院殿
寶書狀

一色義直
下國ノ風
聞

二十三日、乙亥是ヨリ先、河内守護畠山義就ノ足輕市若某、兵ヲ率キテ大和
ニ入り、筒井順尊ト戰フ、是日、市若某、成身院順宣ト、善勝寺橋南ニ戰ヒ
テ之ヲ破ル、

〔大乘院寺社雜事記〕一七十月十二日、

一 河内勢二百計、出陣竹内邊云々、事實歟、

十八日、

一 十六日、成身院ハ自加世山移中川寺云々、

廿一日、

一 今日河内守護手足輕市若、越當國近日出帳之、筒井方者共、悉以追拂了、其

次標本正法寺燒歟云々、所々迷惑、御方標本鳥居城ニ亂入了、

一夜前窪城自中川責落了、

廿三日、

一 今日於善勝寺之橋之南、中川衆與市若之合戰、聰延賢房以下八人被打了、

頭共取之、於大鳥居前古市以下實檢了、寺僧分者、他國他所足輕ニ被取頭

事初歟、不思議々々、寺僧共惡行、近來作法珍事、

順宣賀世
山ヨリ中
川寺ニ移

正法寺燒
筒井勢鳥
居城ニ亂
入ス

古市澄嵐
聰延等ノ
首ヲ實檢

寺僧等所
持品ヲ割
キ取ラレ

文明十一年十月二十三日

七四四

一 近日寺僧共、於在々所々被打剝之由實説云々、白晝又此邊打剝在之云々、
松林院僧正細々光臨、可有用心之由申遣之者也、敵御方惡黨其外盜人共、
道路ニ滿々、

廿五日、

順尊等尾
爲國等ト
福住ニ會
ス

一 成身院蓮花院兩人方ニ遣書狀、賢舜事不便之由仰了、夜部蓮花院陣屋燒
亡云々、兩人返事畏入云々、中川寺陣ニハ佐川父子、頭塔辻子、蓮花院、成身
院、舜行房、狛下司等在之、木津執行ハ加世山ニ引退了、所存不得其意之旨、
成身院申云々、一昨日ハ於福住、筒井、箸尾、十市、蓮花院會合云々、巨細何事
哉、河内勢出陣條迷惑之談合歟、定而各可退散者歟、○下略、義尙判始ノコ
トニカ、ル、十一月二
條ニ收ム、

〔大乘院寺社雜事記〕

○七十一 後附裏文書

澄胤義就
部下ノ奈
長ニ入ル
ヲ止ム

河州足輕事蒙仰候、奈良中へ亂入候て、可爲珍事候間、色々廻計略申留候
處、無承引押而罷上候間、不及料簡候、□明日も若逗留仕候者、尙々涯分々々
可申候、此方儀不用候間、何共無方角候由、可有御披露候、恐惶謹言、

十月廿一日

澄胤(花押)

竹内殿 御報

古市胤榮
義就足輕
ノ奈良侵
ヲ入ノ次
ヲ入ノ次
ヲ入ノ次
ヲ入ノ次

河内之足輕奈良へ入候事、此方より色々劬勞仕候て、入候の由様よと申候
へ共、無承引候間、迷惑無申計候、御門跡様へ云せん亂入候者、上意、此方よ
り人を進候ても、更ニ承引申ましく候、いかゞ可仕候哉、更こくわんたいに
て候へす候、されのとて存候北野山辻坊候哉、其より可被仰合候由、能々
御披露所仰候、恐々謹言、

□月廿八日

胤榮(花押)

御中

〔大乘院寺社雜事記〕

一七十一 十二月九日、

一 大安寺向ハ、當門跡坊人給分勾田庄夫賃八貫文也、豐田の一族也、然而故
因幡房入滅以來、一向筒井成披官人了、彼夫賃ハ因幡存生之時より、又召
放珍寶院ニ給之了、内々因幡房と申合子細在之由申故也、今度筒井沒落
ニ同沒落了、五智光院與公事在之故歟、豐田色々問答之聞、以咄文如元々
豐田之成披官人了、無相違歸宅安堵了、去十月、善勝寺合戰ニ負手了、爲筒

文明十一年十月二十三日

七四五

大安寺向
筒井ト共
ニ沒落ス

井方也、仍近日堤方向方悉以令闕所云々、己心寺方披官人十四人在之、可相除之由、仰山村方了、堤方ニ可申届之由、仰付之、奉書良通房ニ遣之了、

〔大乘院日記目錄〕

三 十月廿三日、於善勝寺橋、賢舜房被打了、

〔後法興院政家記〕

四 十月十三日、北小路自南都俊宣朝臣、慶順等上洛、南都

之式、近日體、毎日濫妨物、忿無是非云々、

廿九日、巳晴陰不定、略中、南都物忿以外云々、去廿三日、有大合戰云々、筒井方

打負引退云々、越智勢、古市衆、右衛門佐方足輕等、四五百人打出、筒井衆陣取

在所、般若寺前在家等、悉令放火云々、

○順尊及ビ十市遠相等、義就竝ニ伊勢國司北畠政郷大和ニ亂入スト

聞キ、各其營ヲ護ルコト、十一月三日ノ條ニ見ユ、

義政、近衛政家ノ子某ヲ猶子トシ、實相院增運ノ附弟ト爲ス、

〔後法興院政家記〕

四 十月廿三日、亥晴、略中、實相院芝坊來、彼門跡附弟事、

家門若公治定之處、自武家可被相計問、不可相定、由被仰出云々、門下面々迷

惑之處、昨日可爲家門若公、由被仰出之間、祝著之由、相語之、則武家猶子事申

入處、不可有相違云々、祝著之至也、

幕府實相院附弟ノコトヲ定ム

勅使正親町三條實興、改曆宣下ノ可否ヲ近衛政家ニ諮ハセラル

小槻雅久ノ勘文

延曆三年始テ朔旦冬至ノ儀ヲ行フ、實德元年ハ亂ニ依リテハ、應仁二年ハ、臨時朔旦、曆ヲ改進セシム

○增運、政家ノ息ヲシテ、義政ノ猶子タラシメンコトヲ請フコト、十年七月二十四日ノ條ニ見ユ、

二十四日、丙十一月朔旦冬至、依リテ、改曆ノ宣旨ヲ下シ、曆博士賀茂在通ヲシテ、之ヲ上ラシム、

〔後法興院政家記〕

四 十月廿三日、乙晴、略中、入夜頭中將實興朝臣爲勅使

來、今年相當朔旦冬至、雖然去應仁二年爲章歲、然者年爲臨時歟、改曆宣下可

有如何哉、可計申趣也、勘文加一見、重申所存之由、令返答、

兩局勘文如此、

一朔旦冬至、當時如平座、猶以難被行、雖爲幽玄儀、可有改曆宣旨哉、一向不及

御沙汰條如何事、

延曆三年、爲本朝朔旦冬至、始被行之、其後以數十度也、近者實德元年被行

旬儀、應仁二年、同相當朔旦冬至、依亂無被行之儀、

一臨時朔旦冬至事、

文永七年庚午、相當此節、經奏聞之處、算術之所至、勘申之趣、尤雖有其謂、保

元有沙汰已被略畢、任先例可被停止之由、被仰下之間、以十月大爲小、以十

文明十一年十月二十四日

七四八

二月小爲大、令造進御曆畢、
延慶元年戊申、相此節宣旨云、

今年十一月朔丙戌、置冬至、而算博士三善遠、衡朝臣勘申、非章部期無中間
會由、任保元々年十一月退朔例、以今月卅日乙酉爲十一月朔、以冬至可置
二日、以十一月卅日甲申可爲晦日、宜下知百官者、

朔旦冬至者、一章十九年間必有此節、於臨時朔旦冬至者、不待章部歲相當
十一月一日、去應仁二年爲章歲、然者當年爲臨時朔旦歟、曆道輩今勘奏哉、
改曆之條先規也、

右注進如件、

文明十一年十月廿一日

左大史小槻雅久上

朔旦冬至改曆事、引勅候之處、亂後當局文書難得之間、所見不詳候、但嘉吉
元年閏九月十二日、內大臣召大外記師世朝臣於里第、今年朔旦冬至、雖非
章運、可被行賀禮哉否事、紀傳明經博士可勘申之由、被宣下之、去八月口宣
職事藏人右少辨資重參里第被申之、左大辨三位爲清卿、清大外記業忠真

人兩人、可進別勅文之由、被宣下之、同十六日朔旦冬至、可被行賀禮哉否事
有仗議、公卿內大臣以下諸卿參入之、諸道勘文四通在之、同廿九日、今月爲
大之處、改曆之間、今月大爲小、十二月小爲大者也、於改曆宣旨者、官方申沙
汰之間、當局不存知候、

十月廿一日

師富上

三條殿

廿四日、丙晴、昨日勅問申詞、今日注之、遣頭中將許、余申詞如此、
朔旦冬至事、去應仁相當章歲歟、然者今年爲臨時朔旦間、任保元以來之舊蹤、
改曆事可被宣下哉、此上事宜時宜矣、

勅問人數、一條禪閣、二條大閣、下官、

十一月一日、壬、當年朔旦冬至事、臨時時間、任先例改曆事被宣下訖、仍去月大爲
小、今月小爲大宣下、上卿中御門黃門消息宣下云々、此事先日有勅問、

二日、癸、朝晴、午剋以後陰、雨灑、雷兩三聲、在通改進曆、

親長卿記

十月廿四日、晴、當番召進元長了、頭中將來、改曆宣下事尋之、
仰所存分了、

文明十一年十月二十四日

七四九

文明十一年十月二十四日

七五〇

廿九日晴、抑來月一日爲冬至、就旬之儀、依難被行、可有改曆宣旨哉、否事、先日
朔旦冬至改曆
被仰付頭中將、實興、仰詞之趣、尋之、副官外記勘例、

朔旦冬至事、旬之儀如平座、猶以難被行、可有改曆宣下否事、可計申云々、
禪閣、二條前關白、關白等尋申、

禪閣申詞

今年正天冬至事、任推步之術、置中氣於朔旦歟、雖然不當章蔀之期、爭被行賀
瑞之禮哉、依是有改曆之宣下、可謂保元々、延慶元等例也、但去應仁二年雖丁
一章之運、依天下擾亂、不及其沙汰者、無力次第也、當年已有中間之朔旦、任先
規被改御曆之條何事有哉、然則以今月卅日壬午、爲十一月朔、被退冬至於二
日、以十一月廿九日辛亥、可爲晦日、之由被宣下者、不可違先例者哉、

二條政嗣
改曆ヲ可
トス

關白

朔旦冬至事、去應仁二年、相當章歲歟、然者今年爲臨時朔旦間、任保元以來之
舊蹤、改曆事可被宣下哉、此上事宜在時宜矣、
家記以下兩局勘文、後法興院政
今度宣下之樣、頭中將相尋之間、如注左仰之、

近衛政家
ノ意見

親長改曆
宣旨案ヲ
實興ニ示

文明十一年十月廿四日宣旨

今年十一月朔癸未置冬至、而非章蔀期、無中間會由、是任保元、延曆例、以今
月卅日壬午爲十一月朔、退冬至於二日、以十一月廿九日辛亥可爲晦日、宣
下知五畿七道并百官者、

藏人頭右近衛權中將藤原實興 奉

此趣歟、但可尋申禪閣之由仰之、仰云、宜下知五畿七道百官、且仰曆博士等令
進御曆者、如此可然之由有仰云々、予所存、已可下知百官之由仰之上者、何別
可仰曆博士哉、不審了、

兼良ノ修
正

〔柳原家記錄〕

百五十七
宗賢卿記

十月廿五日

丁丑黃昏曆博士在通朝臣來、改曆事及

御沙汰之由風聞之間、參內、以民部卿忠富卿尋申之處、爲其分、早以十月卅日
爲十一月一日、以朔旦冬至可爲二日云々、在通云、未無被仰下之旨、先例又不
覺悟之由申處、禁中可被出曆、其月許切續書改可進之由被仰之、聊爾之至也、
保元延慶、嘉吉等、上卿兼日召外記於里第被宣下、
如年號
勘者宣當日於陣有定議事
也、

卅日壬午、今日爲晦日之處、明日一日朔旦冬至之間、爲臨時之條、兼日被仰下改

文明十一年十月二十四日

七五一

曆在通朝臣承之、以今日爲十一月一日、以二日未爲朔旦冬至、但於改曆者、先例雖無子細、今度御沙汰之次第聊爾歟、可尋注之、又改曆先例每度不快也、如何々々、禪閣一條、關白、近衛、以下有勅問、各被申勅答云々、

十一月一日午、本曆爲十月卅日、晚師富朝臣來、語云、今度改曆事、中御門中納言宣胤卿爲上卿被宣下、實與朝臣、右少辨俊名、左大史雅久宿禰官務、成宣

旨、送遣曆博士在通朝臣、先進覽室町殿并宰、又可成遣五畿七道也、又外記局事有上卿下知、傍局、如局務外記成宣旨、同送遣曆儒許事也、而今度師富朝臣

無外記局口入之儀之由、遣狀於頭中將云々、家記紛失、依不得所見也云々、仍外記局下知無

之也、後日先規聊見出之處、外記成宣旨之由分明也、此趣謝申頭羽林云々、

延曆三、保元々、文永七、延慶元、應永、嘉吉元、此年々改曆云々、

抑嘉吉改曆時、故晨照宿禰宣旨案、依無所見、彼一流申沙汰、不成宣旨、今度成

宣旨不審云々、長興宿禰家記、亂中在宇治紛失、不知行方、又晴富宿禰亂中在

敵陣者也、○兩局勘文、並一條兼良等勅答ノコト、後法興院政家記ニ同シキヲ以テ略ス、

朔旦冬至事一通注進候、今度若爲臨時儀者、改曆之段勿論可然也、不可及

平座之沙汰候哉、可得御意候、恐惶謹言、

長興宿禰家記紛失

宣旨ヲ義政義尙等ニ示ス外記宣旨ヲ成ス

十月廿一日

雅久上

大閤勅問之處、官注進尤無豫儀歟、別不及覃（行カ）所存、改曆之儀不可違先例之由、被申之云々、

宣旨案
文明十一年十月廿四日宣旨

今年十一月朔、癸未置冬至、而非章蔀期、無中間會由、是任保元、延慶例、以今

月卅日壬午爲十一月朔、退冬至於二日、以十一月廿九日辛亥可爲晦日、宜

下知五畿七道百官、且仰曆博士等、令改進御曆者、

藏人頭右近衛權中將藤原實興 奉

此宣下上卿事、三公未拜賀、亞相中或未拜賀、或未著陣之間、下中御門中納言

宣胤云々、

〔長興宿禰記〕

中

十月廿四日、丙晴、今日有改曆宣下、來月一日冬至也、當時

其禮難被行之間、任保元、延慶、嘉吉等例被改曆、以今月卅日爲十一月朔、退冬

至於二日、可改曆之由、職事三條頭中將實與朝臣宣下、上卿中御門中納言宣

胤卿也、三公各未拜賀、大納言當時各故障之間、彼卿爲上卿、々々被下知藏人

右少辨俊名、辨被下知官務雅久宿禰、成宣旨於五畿七道曆博士等云々、案文

長興所藏ノ文書ノ中ノ治平ノ紛失スル幕府ニテハ明ヘテハ紛失ス

可尋記保元延慶共當流申沙汰宣旨符之案無所見之間嘉吉元年度傍家不成宣旨之由有其沙汰今度以何符案令下知哉不審當流文書悉今度亂中於宇治平等院寶藏紛失若令分散歟不審兵亂初土御門大宮第同文庫等軍兵放火燒失其以前文庫文書代々記錄數百合渡于宇治寶藏森坊平等院僧也出預狀文亂中盜失之由稱之悉紛失自去年申武家以奉行彼坊僧等所行御糺明未無落居一流奉公時節到來可謂斷絕歟但不成意轉憂記錄等求集局中奉公子孫可勵計略者哉今日宣下案兩局勘例并一條禪閣關白御申詞等寫取給之○下略法興院政家記及ビ親長卿記ニ同シ

十一月一日壬午晴今日雖爲十月晦日依改曆爲朔日也

二日癸未晴陰不定申剋雨下雷鳴頗高聲今日爲冬至節

〔晴富宿禰記〕十月廿二日甲戌晴朔旦冬至臨時相當時改曆例盛俊付頭

中將

廿九日辛巳晴官務自上歸之改曆間以大爲小今日晦日也

十一月一日壬午晴黃鐘朔每端屬吉兆幸甚々々朔旦冬至依改曆以十月卅日爲十一月朔宣旨公方并管領以下進覽至南都雜掌等遣之

卅日辛亥晴土用依改曆宣下今月爲大

〔十輪院內府記〕十月廿五日略○甲辰傳聞依臨時朔旦冬至改曆事被宣下了內

史雅久宿禰先例等勘進云々

凡朔旦冬至事延曆三年始被行旬儀廿ヶ年一度相當朔旦冬至其外之儀改曆至今年五ヶ度云々每度不詳云々廿九日雅久來語了

十一月一日改曆朔珍重々々

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十一○山城御湯殿上日記 十月廿七日せむ

しのとうしせんたのおとくをん下せらるゝよよりこは月之小よなるありのふ御こもとも万いらする

十一月二日乙未晴今日朔旦冬至旬次第借廣光卿本禪閣作則自筆

〔實隆公記〕五後九月廿三日乙未今日朔旦冬至旬次第借廣光卿本禪閣作則自筆

也書寫之

〔大乘院日記目錄〕三十一月八日光月朔旦冬至也去應仁二年不吉例歟

十月大被成小月了仍當月小被成大月之由宣下旨云々

〔大乘院寺社雜事記〕一七十十月晦日以今日可爲

十一月二日、

一自禪閣御書到來、朔旦冬至被改曆宣下、十月ハ小、十一月ハ大、仍今日二日ハ三日也、

二十五日、丁興福寺大乘院及ビ一乘院ヲシテ、藥桶火箸等ヲ進納セシム、

〔大乘院寺社雜事記〕七十 十月廿五日、

一自柚留木法眼方法注進之、禁裏御用藥桶二、火箸、雜紙、各爲兩門跡可尋進之、云々、南曹辨長注文也、廿二日法眼書狀今日到來了、

二十六日、寅義政、麻生全教ニ筑前麻生莊、野面莊及ビ山鹿莊等ヲ安堵セシム、

〔麻生文書〕一 筑前

(義政)
(花押)

筑前國麻生庄、同國野面庄、山鹿庄、感田庄、勢田村二村ニ高津村、小倉村、岩瀬村并麻生中務大輔入道照泉、同上津役跡等事、所返付麻生上總入道全教也、早如元可全領知之狀如件、

文明十一年十月廿六日

全教義政
夫人並内
義尚ニ
書ノ禮
ヲ獻ス

〔親元日記〕

六 文明十三年正月卅日、乙巳

一ト○中略、大内政弘、禮物ヲ幕府ニ獻ズルコト、貴殿ヘ万いる分、

麻生殿より 貳千疋、同 御返報、太刀、助重金覆輪、

一上様ヘ進上分、略○中

麻生上總入道御判御禮、貳千疋、

一御方御所様ヘ万いる分、略○中

麻生 御判御禮、御太刀、同貳千疋、

三月十九日、癸巳晴

一麻生とのへ御返事三通、御太刀、助重金覆輪、雜掌ニ渡了、

石見福屋是兼等、益田兼堯等ニ誓書ヲ遺ル、

〔益田家什書〕七十

今度一家中以參會諸篇申定候、千秋万歳候、然間立御用被立可申候、此儀於以後更不可有相違事、

一庄内事、任御判之旨御知行之上者、自然守護方并本主又者何方よりも、雖被及御弓箭候、自身馳參、立御用可申事、

文明十一年十月二十六日

七五七

文明十一年十月二十九日

七五八

一万一就其方此方之儀、雜說以下出來候者、預御尋、又尋可申事、
一於家中、自然六借敷子細出來候、取分無御等閑申合可致了簡事、
若此條偽申候者、日本國大小神祇、別而伊勢天照大神宮、熊野三所大權現、
大城鎮守八幡大井、賀茂春日、稻荷、祇園、北野、日吉并住吉、當國一宮、二宮御
神本太明神、殊當社八幡大菩薩、春日大歲大明神、惣而可罷蒙諸神祇等御
罰候、仍起請文如件、

文明十一年 亥己十月廿六日

國兼判
是兼判

益田越（兼判）中殿

益田治部少輔殿

益田孫次郎殿

○石見高橋命千代兼堯、貞兼等ニ誓書ヲ遺ルコト、八年九月十五日ノ
條ニ見ユ、

二十九日、己義尙、御製拜觀ヲ請フ、依リテ書シテ之ヲ賜フ、

〔京都御所東山御文庫記錄〕

○甲二十一
山城

御湯殿上日記

十月廿九日、御く

義尙御製
ヲ返上ス

見んしゆとも万いゝ、宰相中將殿より御を尋とも見万いらせられ、たよ
し御申よて、かゝせられて万いらせらるゝ、御ゆめす、大をもし、
十一月六日、宰相中將殿より、御せいとも返万いゝ、

是月、山城高山寺僧徒、石水院ヲ修造セントシテ、資ヲ興福寺ニ募ル、

〔保坂潤治氏所藏文書〕

○後越

高山寺衆僧等申

欲春日權現社壇石水院大破爲修造預奉加事

右當寺者、明惠上人草創之梵砌、春日權現鎮座之靈場也、建仁年中、上人爲拜
見佛跡、企渡天望之處、大明神忝現和光金體、有種々神勅、挽其法衫而不許彼
旅行給、石水院内陣靈像卽是也、御託宣記云、我昔未顯如此靈瑞、後亦復然也
云々、就中或大明神契約云、汝必可詣三笠山也、上人任神託參社之處、移西天佛跡
示之給云々、其時感得二粒佛舍利等靈寶、于今儼然、依之維摩大會以後、就講
師之所望、石水院靈像開帳之儀、每度法式也、又正和度、學侶所望之時、事書案
文備進之、然則貴寺與當寺、山明神之誓約、上人之芳契、其來尙矣、爰應仁以降、亂
裡不加修治、嗚呼權現靈像者、雨露頻侵而垣有衣、石水寶殿者、風月空照而瓦

文明十一年十月是月

七五九

春日大明
神ヲ石水
院ニ祭ル

應仁亂後
石水院修
理成ラズ

義就甲斐
庄某ヲ誅

義就ノ出
陣延引ス

古智家榮
古市澄胤
義就ノ出
陣ヲ待ツ

出陣延引

順尊福住
ヨリ佐川
ニ移ル

文明十一年十一月三日

七六二

一昨日於畠山屋形甲斐殿(庄院)被沙汰了、日來任雅意之由在上、近日又紀州之敵方内通之子細在之故云々、自越智方申遣古市方云々、如此題目ニ當國出陣延引歟、云越智、云古市、出陣之輩于今不歸陣、相待河州左右歟、

廿二日、

一河内國守護與甲斐庄一族色々子細出來、於彼國而一段之大儀也、今度筒井、十市、箸尾以下出張事、福住以下所々可有發向之由、自越智、古市方申合、河内之處、伊勢國司與申合、自兩國山内事可有其沙汰旨、支度談合之處、兩國儀如上件之間、和州發向事自然ニ延引了、是併中川、小田、原、忍、辱山等之佛閣無爲神慮也、難有々々、

十二月卅日、

一筒井自福住移佐川云々、來正月可有合戰歟云々、色々物忝有之、

〔後法興院政家記〕四

十一月四日、酉晴、自南都實圓上洛、彼方物忝之議聊

靜謐云々、但不定云々、

○義就ノ部下市若某、大和ニ入り、順尊ト戰フコト、十月二十三日ノ條ニ見ユ、

四日、乙酉、廷臣ニ命ジテ、土御門内裏修理ノ費ヲ獻ゼシム、

〔十輪院内府記〕

十一月五日、天晴、向二條宰相第朝飯、其後參土御門内裏、見

御修理之體、造内裏御修理料爲諸家可致沙汰之由、昨日自勸修寺大納言示送之、其間之事猶談合、

○幕府内裏修造ノ爲、棟別錢ヲ近畿ニ課シ、段錢ヲ越前ニ課スルコト、本年三月十一日ノ條ニ、内裏修造事始ノコト、四月二十六日ノ條ニ見

ユ、

斯波義敏、其子義良、甲斐八郎等ト共ニ、兵ヲ率キテ越前ニ入り、朝倉孝景ト細呂宜ニ戰フ、

〔大乘院社雜事記〕

一七十月晦日、以今日可爲朔日云々

一松林院申給越前國事、加賀堺ニ甲斐出張、以足輕令合戰、無殊儀、河口庄事無爲、使今日則罷下云々、

十一月廿七日、

一越前國合戰ハ、去朔日豐原寺へ義敏息、甲斐入部、朝倉方法師原自燒了、甲千計入部云々、四日五日比、二宮以下平泉寺ニ入部、同朝倉方法師自燒了、

文明十一年十一月四日

七六三

中院通秀
内裏修理
ノ景況ヲ
視察ス

義敏ノ兵
豐原寺平
泉寺ニ入

孝景ノ兵
豊原寺
火口坪江
河口坪江
兩莊無事
義敏等長
崎二陣ス
朝倉勢越
前ノ通路
ヲ遮斷ス
大雪ノ爲
メ休戦ス

足利義親
ヲ將軍ト
シ其子義
植ヲ越前
守トシテ
スナノト

文明十一年十一月四日

七六四

於細呂宜合戦有之間成野了、自餘郷々ハ河口坪江無大事云々、但一庄在
寶悉以預置豊原寺之處、如此成下之間、不殘一物取散了、百姓等不便、南都
迷惑也、斯波ハ長崎ニ陣取云々、一國中上下路次悉皆自朝倉方止之、以朝
倉之判令出入云々、甲斐方ハ見繼勢一切無之云々、近日大雪之間、不及合
戦、春可有合戦歟云々、比興之出張也云々、

十二月七日、

一新右衛門元次自越前國罷上之由、楠葉入道申之、義敏父子ハ甲斐以下豊
原平泉寺ニ在之云々、

一國中ハ朝倉成敗也、二月以後合戦可有云々、或説、越前三乃加賀令同心而
今出川殿可用將軍也、御息若君ヲハ、則越前國守護武衛ニ可奉成之由、申
合河内伊勢大内以下方云々、一段之大儀可出來也、又如先度ニ兩方ニ可
相分云々、

〔大乘院寺社雜事記〕

七十一
○文明十一年十二月三十日裏文書

○上略、赤松政則播磨ニ下ルコトニ越前道自朝倉きりふさき候、北國へハ
音信候ましく候、あさましく候、我らも北の信をこそ待候へひまあき候、○

略

〔後法興院政家記〕

四
十月廿一日、晴、陰風吹、越前路次一向依無通路、俊

宣朝臣歸洛、國中有合戦云々、自朝倉塞路云々、

○八郎、孝景ト細呂宜ニ戦フコト、五年八月八日ノ條ニ、義良等、孝景ヲ
撃タントシテ、越前ニ赴クコト、本年閏九月三日ノ條ニ、八郎、氏景ヲ越
前金津ニ襲フコト、十二年正月十日ノ條ニ見ユ、

六日、亥、禁中田樂アリ、

〔京都御所東山御文庫記錄〕

甲二十一
○山城 御湯殿上日記 十一月六日、略、中

あよひてんらく事、あうひし、新内、源大納言申さたなり、

○コノ後禁裏竝ニ皇子仁、尊敦親王、田樂ヲ行ハセラル、コト、便宜左
ニ合敘ス、

〔京都御所東山御文庫記錄〕

甲二十一
○山城 御湯殿上日記 十一月十日、てん

らく事、大をもし、御あちやノ、いよ殿申さ、御ひし、こめてたし、
十六日、夜よ入きてんらく事、新大をけ殿、御いま、いり、みん部卿あとなり、
十七日、あよひもてんらくよて、權をもし、ひむろし、御方、二てう殿、御ひし

文明十一年十一月六日

七六五

三條西實
隆酒饌
獻ズ
實隆犬死
ノ穢ニ依
ズ
参候セ

配膳ヲ賜
フノ可否
ヲ勸修寺
教季ニ諮
問セラレ
一條兼良
ラニ諮問
セラル

文明十一年十一月六日

こめてたし

十八日、てんりく事、ぬしみ殿、二宮に御方御さためてたし、
十九日、およひもあり、宮の御うた御さた、新宰相中將も御かむらけの物、御
たる御つゐてよどりてまいらせらるゝ、げんしにゑのした并ふとき、い
たすこてまゐうのあし、やいかくおほしめすよしおせらるゝ、源大納言
より御ひらまいる、

十二月十二日、略、御さたにててんりく事あり、

權典侍花山院兼子ニ、上臈分ノ配膳ヲ賜ハンコトヲ義政ニ諮問セラレ、

〔京都御所東山御文庫記録〕甲二十一 山城 御湯殿上日記 十一月三日、略、中

ひむかしに御方上らぬ御ふんよて御さいせんさせ万いらせらるへき事
いゝと、天そうへたつ縁万いらせらるゝ、まきひあるまきよし被申、
四日、前うへもたつ縁万いらせらるゝ、おあしく御返事あり、
六日、上らぬ御さふらひの事、御たいの御方へ文よてむろまち殿へも御申
あり、めてたによし御申、

○配膳ヲ賜フノ日詳ナラズ、

日宣

参議武者小路縁光ヲ權中納言ニ任ズ、

〔公卿補任〕四十 参議正三位藤縁光 十一月六日任權中納言、

〔宮内省圖書寮所藏文書〕大中納言 参議宣旨

文明十一年十一月六日 宣旨

参議藤原朝臣

宜任權中納言、

藏人左少辨藤原元長 奉

参議正三位藤原朝臣縁光

正三位行權中納言藤原朝臣廣光宣奉勅、件人宜令任權中納言者、

文明十一年十一月六日 掃部頭兼大外記造酒正博士中原師富 奉

〔諸家傳〕六下 武者小路 實世卿男 縁光元種 同十一年十一月六日權中納言、廿九

〔京都御所東山御文庫記録〕甲二十一 山城 御湯殿上日記 文明十二年三月

廿六日、略、新中納言のさいうあり、

七日、戊亥大内政弘、長門賀年郷ノ地ヲ益成行重ニ宛行フ、

文明十一年十一月七日

拜賀

文明十一年十一月七日

七六八

〔萩藩閥録〕

百五十二 益成庄右衛門

大内政弘ノ判

下 益成彦六行重

可令早領知長門國阿武郡賀年郷内五石地仁保加賀守威安跡百事、
右以人所宛行也者、早賀年令在城、可全領知之狀如件、

文明十一年十一月七日

八日、己聖護院道興ヲ護持僧ニ還補ス、

〔後法興院政家記〕

四

十一月八日、己曉來小雨、未刻止、自聖門有書狀、御持

僧事如元可有存知之由被仰出間、祝著云々、

○道興ノ罪ヲ赦スコト、閏九月十七日ノ條ニ見ユ、

大内政弘、周防乘福寺寶洞庵ニ庵領ヲ安堵セシム、

〔長防風土記〕

三 山口 宰判
吉敷 郡五

乘福寺寶洞庵領事、任嘉曆四年二月廿三日、大内政弘等永興寺殿下知之狀、至德三年八
月十五日、大内政弘香積寺殿裁許、永享十一年二月廿五日、大内政弘澄清寺殿證判等之旨、庵務
領掌不可有相違之狀如件、

文明十一年十一月八日

左京大夫多々良朝臣御判

當庵住持

十一日、壬辰和歌御會、

〔京都御所東山御文庫記録〕

甲二十一 山城

御湯殿上日記

十一月十日、むろ

まち殿、さいしやうの中將殿よりおもしろおもしろくまいる、あともあすの御

ゑいさうみせらるゝつるてよ、こもし一つうとさるゝ、

十一日、御けつり御くしあういし、御さむさくけふうさぶらるゝ、

十三日、むかんさんしゆなごよて御ささあり、十一日、御さんさくさい玄

よさせらるゝ、

十四日、むろまち殿の御てん、御申あま、

十五日、昨日、御てん御をみつけれまいる、やうてあきたへ御申いゝ

しあり、

十六日、御さむさく返万いる、れたりの御人まごよて御め尋むくのよ

し申さるゝ、密しみ殿御まいり、

〔十輪院内府記〕

十一月十日、早旦四辻宰相中將和歌談合、不洽心企意見、余

文明十一年十一月十一日

七六九

義政父子 鯉ヲ獻ズ 義政ニ詠 草ヲ覽セシメラル 番衆ヲ召シ和漢聯句ヲ行ハシ 短冊ヲ清書セシメラル 義政ニ點ラセシメラル 四辻季經 中院通秀 和歌ノ秀

コトヲ許
フ秀飛鳥
井雅親ニ
和歌ノ可
仁寺道
永法親王
通秀親和
歌ノコト
ヲ許ハル
姉小路基
綱ノ詠歌

文明十一年十一月十三日

七七〇

詠以姉三位談合飛鳥井大納言入道金玉之由、加慰勸之詞、
十一日、早旦三首詠進付民部卿歌加詠草了、自御室御詠有御談合、

〔卑懷集〕

冬 文明十二年十一月、土御門殿へ還幸ちうくなり侍し比、内裏

よて三首歌講をられし、禁中雪、

かつふるも玉しきりへて雲れ上に歸る行幸此道いろく也

〔卑懷集〕

雜 文明十二年冬、内裏より入く、よ三首歌めはきて、准后へ點

申させし時、述懷、

をろりある身をうへりみてなけりすは、つきあき世を猶やうらそん

十三日、大内政弘、周防興隆寺本堂上棟式ヲ行フ、

〔長防風土記〕

三郡山口宰判御堀村

棟札

南無藥師瑠璃光如來

上棟奉再興水上山興隆寺本堂壹宇 南無釋迦牟尼如來

南無阿彌陀無量壽如來

右意趣者、爲一天泰平、四海靜謐矣、殊者信心大檀越、御武運長久、家門高榮、御子孫繁昌、息災延命、人民快樂、別者當寺安寧、行學繁多、諸人無事之故也、仍所

棟札

大工賀茂
綱家

修理大工
賀茂

勸進僧義
融

金堂造ノ
棟ヲ中堂
造ニ改ム

奉葺替如件、

大檀那左京大夫從四位多々良政弘朝臣

文明十一年己亥十一月十三日、未、執頭、前別當權大僧都法印敬白、

別當權大僧都法印大和尚位乘海

大工

左衛門尉賀茂綱家

條理大工

左衛門少尉賀茂

勸進沙門義融

左衛門少尉兼祐

左衛門少尉藤原近吉

文明十年戊戌二月十日、依被仰出、同三月十日、檜皮之山入、同七月十八日、檜皮
造始、同十月十一日、番匠鍛冶始之、以前者雖爲金堂造之棟、今度改而成中堂
造之棟畢、仍同十一月十四日破風上、同十一年十月十三日造畢、中略、上棟在

文明十一年十一月十三日

七七一

文明十一年十一月十九日

七七四

同續命院

一同國同郡續命院拾貳町

此二日在市野在之

筑後三澤

一所筑後國三澤八拾町

親よて候良喜入道安藝陣番
わけ分ミして大隅守遣之

同津古

一所同國三原郡西郷内津古三十町

良喜及
知行之

一鬼塚土佐守子兵部慰於秋月、滿貞御供仕、立御用候、甲斐々々敷依無子、

親にて候良喜入道重書等讓候、條々子細在之、

一御判之地所々、滿貞、嘉頼、教頼、御判在之

筑前小隈

一所筑前國夜須西郷小隈八町

同見島

一所同國上莊郡見嶋拾貳町

同長嶋

一所同國同郡長嶋五町内

來迎寺免
町除之

同流鏑馬

一所同國同郡流鏑馬免參町

社役
勤之

肥前金丸

一肥前國基肆郡金丸拾貳町

當知
行也

同真木村

一養父郡真木村之内五町

右所々、於相神浦備上覽候之時、所々知行分事、代々任證判之旨、領掌不可有相違之狀如件、

文明十一年十一月十九日

太宰少貳政資 御判

筑紫孫次郎殿

勸修寺教秀、家領山城生田村散在田地ノ下司中澤某ヲシテ、同田地ヲ還付セシメンコトヲ幕府ニ請フ、

〔親元日記別錄〕下

布野州 一勸修寺大納言家雜掌 一十九

家領城州嵯峨生田村散在田地事、寛正六年、爲六拾貫文質券、下司

中澤知行候、可過一倍候上者、可被返付云々、

二十日、辛丑五節、

〔京都御所東山御文庫記錄〕

〇山城 御湯殿上日記 十一月廿日、およひ

はあぢちよて、御所ノ御こうと尋めす、權をもしも御さふらひあり、おもし

しふくなるよしきこしめしてふふ、いつもれおこく御さう月まいる、ふし

み殿およひ返あり、

廿一日、略中きよくら人御をちの御とり万いらる、としみあふかあうち

よつろとさる、日野、去よ大夫三ここくまいらする、

大和報恩院有俊ヲ權僧正ニ任ズ、

文明十一年十一月二十日

七七五

一倍ヲ過

廣橋在敷
五節島ヲ
獻ズ

文明十一年十一月二十日

七七六

〔大乘院寺社雜事記〕 七十 九月晦日、

一權中納言被行向井山了、有俊法印極官事、巨細仰遣之了、

〔大乘院寺社雜事記〕 七十二

○文明十二年三月十七日裏文書

略○上將又極官事、被懸上意、被仰出候、面目之至祝著無極存候、雖然聊思案之事候、其子細中納言殿へ申入候、何様今月中風度令參上、旁可申上候、其時猶被仰出、又可申上之由、可有御披露候、恐々謹言、

後九月一日

有俊

〔大乘院寺社雜事記〕 七十

十二月十日、

一報恩院僧正宣下到來、○中則遣井山

上卿日野中納言

文明十一年十一月廿日

宣旨

法印權大——有俊

宜任權僧正

藏人右少辨藤原俊名 奉

〔大乘院寺社雜事記〕 七十

文明十二年正月廿日、

一報恩院僧正有俊、榼一双兩種持參、見參了、油煙二延給之、僧正事申沙汰勅

許喜申、

二十二日、癸卯義尙、判始、評定始及、乙卯沙汰始ノ儀ヲ行フ、義政夫妻之二臨

△、

〔長興宿禰記〕 中

十一月廿二日、乙卯

晴、今日將軍十六歲

殿義尙卿御判始也、次評定

始御前御沙汰等儀有之、於室町御所伊勢守有之、未剋准后義政并御臺一位

殿渡御室町御所、管領畠山左金吾政長朝臣出仕、裏打直垂、乘棟立、騎馬三人神保

與三、土肥平三郎、同平右衛門尉、各直垂頭人二人、波多野出雲守、二階堂判官、

此外爲評定衆奉行三人、松田丹後守、飯尾美濃守、同大和守、元連今日等各著座、直垂

口、御判始、御硯役伊勢守貞宗、白直垂吉書相副持參、管領進御前被勤所役、准

后於簾中有御覽云々、御判公家様、勝利院殿吉書越中國福滿庄事、爲作飯尾

近江守認之、其儀訖、管領於御前給御劔、次有評定始、著座同前、發言役波多野、

奏事役清式部大夫、元連鬮役松田八郎左衛門尉、各著白直垂執事代布施下野守貞英、

直垂、有文如常云々、次御前御沙汰、著座同前、諸奉行、各直垂致披露、發言松田

丹後守、御免云々今日事訖、管領以下被進太刀、各三腰次於准后如前進上

御太刀、今日參役人外參賀少々有之、後日撰吉日公武參賀、予後日參賀、獻御

文明十一年十一月二十二日

七七七

硯役伊勢守貞宗吉書
持宗義持
足利義持
ノ例ニ倣
ノ公家様
ノ花押用
任連吉書
ナ認ム
發言役波
多野清秀
奏事役清
式部大夫
鬮役松田
長事代布
執事基長
島山政長
進太刀ナ

文明十一年十一月二十二日

太刀各三畢○義持判始ノコト、應永七年

〔後法興院政家記〕

四

十一月廿二日癸晴陰、夜來小雪散是日武家判始云々

七七八

近衛政家
義政父子
參賀ス

太刀ヲ進

廿五日丙陰、未剋小雨灑戍剋南方有火事、早旦參武家兩所、先准后、次參宰相、中將殿御判始、評定始、沙汰始等御禮也、兩所各太刀三腰進之、歸宅後吉良三郎定基朝臣等來、遣使者於管領、賀御判始以下申沙汰之事、遣太刀金卅日亥、辛晴陰、風吹、自管領有使者刀、進謝先日使之儀、

〔柳原家記錄〕

百五十七 宗賢卿記

十一月廿二日癸今日宰相中將殿征夷大將十五歲御判

并評定御沙汰等始也、

〔大乘院寺社雜事記〕

一七十

十月廿五日、

一來月二日、新將軍御判始可有之、○下

十一月二日、

一新將軍御判初事、當月廿七日云々、但畠山政長左衛門督被辭退官領職細川九

郎是又被仰處、内々辭退之間、且如何云々、

一此御判初計よて、天下靜謐無心元者也、

政長管領
職ヲ辭シ
細川政元
亦受ケテ

足利義尚寄進狀 山城蒲大路浪野氏所藏

原寸 縦〇・三三二
横〇・五二八

奉寄

石清水八幡宮

越中國德滿庄寄

右所寄進之狀如件

文明三年三月廿三日

左議大夫右衛門權中將源朝臣長

十九日

一略○中御判初ハ明日日(廿)一必定云々御禮ハ金覆輪四振可入之由申下者也

廿日

一略○中御判初ハ廿二日也云々

廿五日 雨下

一新將軍御判初廿二日辰刻之由被仰出之用脚不足之間入夜畢管領島山

用脚不足
式依儀

足利義尚寄進狀
山城藩大路浪野氏所藏

原寸
縦〇・三三三
横〇・五二八

奉寄

石清水八幡宮

兼中國德滿庄事

右所寄進之狀如件

文明三年六月廿三日

左議大夫右衛門權中將源朝臣長春

一 新將軍御到御日二日其時之命書御出之御脚不足之間入夜畢管領島山
左衛門督政長春行諸人以下出仕了御判初評定初御沙汰初三之候御太

用脚不足
依リ儀
式運ル

近衛政家
一條冬良
松林院兼
親參賀ス

吉書
越中福滿
莊寄進狀

十九日、

一略○中御判初ハ明日日^(行)廿一必定云々御禮ハ金覆輪四振可入之由申下者也、

廿日、

一略○中御判初ハ廿二日也云々、

廿五日、雨下、

一新將軍御判初廿二日辰刻之由被仰出之用脚不足之間入夜畢、管領島山
左衛門督政長奉行頭人以下出仕了、御判初評定初御沙汰初三ヶ條、御太
刀三振ツ、兩御所へ進之云々、

關白殿^(近衛政家)右大將殿^(一條冬良)以下昨日御參賀、松林院得業^(兼親)昨日同參賀云々、昨日辰刻
御判初之由云々、自京都申下説不同也、

〔菊大路文書〕

○四山城

奉寄

石清水八幡宮

越中國德滿庄事

右所寄進之狀如件、

文明十一年十一月二十二日

文明十一年十一月二十二日

文明十一年十一月廿二日

參議兼左近衛權中將源朝臣(花押)

〔古文書〕

○十六 内閣記録課所藏

〔御判始〕

御判

下 出羽國

仰三箇條

一 神事

右、神之爲神、以人之祭祀、人之爲人、以神之加被、因茲守式目、專如在之禮、費限永代、爲不朽之勤行焉、

一 農桑事

右、國者以民爲基、民者以農爲天、各勵池溝堰堤之勉、宜致稻穀紬絹之備矣、

一 乃貢事

右、諸國之濟物、任土之貢賦、早守每年之所當、可致合期之進納焉、以前三箇條所仰如件、以下、

神事

農桑

乃貢

文明十一年十一月廿二日

〔和漢合符〕

十 文明十一、亥、新相公五花判事、十一月廿一日新相判、

〔武家年代記〕

將軍 文明十一、十一、廿、同御判始、同御評定、恩賞沙汰始、

〔蘿蔔集〕

江湖 庚子歲已亥臘月廿三日相公始花押

天下歸綠髮將軍 柳營須五花判

山中舉黑衣宰相 松風傳十里聲

〔親元日記〕

六 文明十三年正月卅日、乙巳、

一大内殿より度々之御禮、與文藏主來臨、禮物先以御私分請取之、略中

一 公方様へ万いる分、略中

御方御所様御判始御禮、御太刀、同、三千疋、

一 上様へ進上分、略中

御方御所様御判始御禮、貳千疋、

一 御方御所様へ万いる分、

御判始御禮、御太刀、金、三千疋、

二月廿九日、甲戌、天晴、

文明十一年十一月二十二日

大内政弘
幕府二禮弘
物ヲ獻シ
判始ヲ賀ス

文明十一年十一月二十二日

一大内殿進上、

御判始御禮三千疋、

同前御方御所様三千疋、

同前上様貳千疋、

以上今日進納、

十一月七日、戊寅天晴

一御方御所様御判始時之御判物、可被御覽旨被仰出之間、兵庫殿より奉て、

御使 蟻 清式部大夫方へ申遣之、使淵田、

○義尙ノ征夷大將軍ニ任ゼラル、コト、五年十二月十九日ノ條ニ見

義尙判始
物ノ時ノ判
トナ見ン

〔参考〕

〔重編應仁記〕八 常德院殿御政務事

文明十一年ノ春、新將軍義熙卿、御判始御評定始有リ、是ヨリ天下ノ政道ヲ被執行、御年纔十五歳、未タ御若冠也ケレ共、御才德イミシフシテ、御慈悲深ク渡ラセ給フニ、理非分明ニテ、御學業怠ラネバ、カ、ル明君出來サセ給フ

義政政務
ヲ義尙ニ
讓ル

事、天下ノ者ノ悦ヒ哉ト、皆人亂世ノ愁眉ヲ開ケリ、公方家義政公ハ、今年諸

國御治世ノ儀、政道皆以新將軍家ニ御與奪有テ、御喜悅不斜、

〔公方兩將記〕上 飛鳥井雅康卿詠歌事附義尙公御政務事

今年公方家御治世ノ儀、新將軍へ御讓リ、御隱居有テ東山殿ト申奉ル、慈照寺ノ院内ニ東求堂ヲ造リ給テ、此所ニ御閑居アリ、累代ノ奇物、和漢ノ名器ヲ集メ給ヒ、茶湯ノ會ヲ催シテ、世間ノ事ヲ知シメサス、樂シミノミニ日ヲ送り明シ暮サセ給ケリ、新將軍十五歳ニテ、天下ノ政務ヲ始メラレ、成敗ヲ執行ハル、理非分明ニシテ、皆人歸服シ奉ル、

義尙、僧疎石窓ノ塔ヲ拜シテ、禪衣ヲ受ク、

〔足利家官位記〕常德院殿 義尙后改義 文明十一年十一月廿二日、御受

衣、夢窓國師拜塔、御法名道治、

〔武家年代記〕中將軍 文明十一年十一月廿八日、受衣、夢窓拜塔、

〔鹿苑僧錄歷代記〕維馨梵桂 十一文明亥、此年、大將軍義尙、拜正覺國師塔而受

衣、孟法名道治、號玉山、後改悅山、

伊勢國司北畠政郷、長野政高ト北伊勢ニ戰ヒ、敗レテ神戸城ニ據ル、

法名道治
道號玉山
後悅山ト
改ム

文明十一年十一月二十二日

〔大乘院寺社雜事記〕

一七〇 十一月十九日

一自京都松林院得業書狀在之、○中勢州事ハ國司方迷惑ニ成下云々、
廿二日、

一伊勢國司與長野於北方合戰、國司打負、引籠神部之城、長野一如今者國司儀不可有正躰云々、澤、秋山不及了簡、同退了、以外事也、

十二月十日、

一東門院僧正來、昨日より候、伊勢國司事無爲儀云々、北方對陣如此間、

○越智家榮、政郷及ビ政高ヲ説キテ、和解セシムルコト、十二年四月十

五日ノ條ニ見ユ、

二十三日、甲辰南禪寺仙館院主景菫關ヲ召シテ、黃山谷ノ詩ヲ講ゼシメラル、

〔京都御所東山御文庫記錄〕

○甲二十一 御湯殿上日記

十一月廿三日、

ふより三こく（皇座）此（皇座）むき、らん（皇座）は申さるゝ、

廿六日、たむきあま、うち寺殿御ちやうもん、御万いり、

廿九日、つうけん寺殿御万いり、なふも詩のむきあり、

黒戸ニテ
講義ス

和漢聯句
邦高親王
御聽講

十二月二日、□むきよて、りのまゝらんを去こう、あち寺殿御まいり、糸うと

うさちそうようは御さふら并めてさきこて、御さう月万いらをらるゝ、

十二年五月十日、○中らんをさきなふよりさんこくのさんきれゝこり申さ

るゝ、くるこよてあり、

十三日、さんこくの御さんきあり、とて、御万らん一をり御さゝあり、

十七日、○中なふもたむきあり、

廿三日、○中さんきあり、ふしと殿御まいり、

八月十四日、○中らんを万いられてさん記あり、

十六日、さん記あり、

十七日、なふもたん記、

廿四日、○中むきあり、

九月七日、○中らんをさむき申さるゝ、

八日、○中らんをさむき、りのち御れんくあり、

十二日、○中なふもたむきあり、○中さん記あり、

廿六日、さん記あり、

文明十一年十一月二十三日

七八六

十月二日、らんとのたむき申さるゝ、つゐては御まうん御さふあり、
五日、らんとのたむき（命）さるゝ、

〔京都御所東山御文庫記録〕

○甲二十二 山城 御湯殿上日記

十三年二月十二

日、さんこくは御さんきらんを申さるゝ、

十六日、詩は御さんきあり、

三月四日、詩は御さんきあり、

廿三日、○中らんとのたむき申さるゝ、

五月八日、らんとのたむき申さるゝ、

九月八日、らんとのたむき申さるゝ、

十七日、らんとのたむき申さるゝ、

廿四日、らんを御さんきあり、

十月六日、○中らんとのたむきあり、

十一日、らんとのたむき申さるゝ、そのうち三四人まで御まうん一をりあり、

十九日、○中らんとのたむき申さるゝ、

十一月三日、らんとのたむき申さるゝ、

〔後法興院政家記〕

四 文明十一年十二月二日、癸晴陰時々雪散○中今日

於禁裏蘭坡講山谷、同和漢御會云々、

〔實隆公記〕

五 文明十二年八月十四日、壬晴○中蘭坡山谷講尺有之、

廿四日、壬晴○中今日又有山谷講尺、

〔實隆公記〕

○前田 十三年二月十二日、丁巳、晴○中又自禁裏有召、今日山

谷講尺蘭坡參入云々、故障之旨同前（風氣相侵之同不參）

〔十輪院内府記〕

文明十三年十月十一日、○中蘭坡講尺山谷、喜耳、御和漢

一折有之、

十五日、○中昨夜被仰云、先度御和漢之内、宮舊織腰舞之句ニ、余對堂荒兩足

蹤、此句蘭坡褒美云々、

○文明十二年、同十三年ニ、蘭坡ヲシテ同ジク黃山谷ノ詩ヲ講ゼシメ

ラル、コト、便宜合致ス、

二十四日、乙越後黒川氏實、所領ヲ孫宮福丸ニ讓ル、尋テ、守護上杉房定、
宮福丸ニ之ヲ安堵セシム、

〔讀史堂古文書〕

○伊佐早謙氏所藏

文明十一年十一月二十四日

七八七

嫡子朝實
早世ス
嫡孫宮福丸

朝實弟等
ハ宮福丸
ノ被官タ
ル事

關高野兩
郷及ビ親
類ノ事

女子領地
年貢ナ課
スベシ

寺家寺領

文書ノ次
第

文明十一年十一月二十四日

七八八

氏實重代相傳所領所々事始子松福丸朝實
七月廿日早世候、然間彼一子宮福丸、氏實爲沙汰、文書等をあいそへ、ゆ
つりあたへ候、他のさまたけなく可有知行者也、

一朝實きやうたい共出候地の事、何も宮福丸爲被官可有知行候、然いか
うもよく、ほうこういたすへく候、萬一無其儀候、所たいの事宮
福丸可爲知行候、ならひこ出家子こ出候地の事、これも宮福ふくわいの
きに候、其時の於田地宮福可爲計候、

一せき高野りやうかう、其外のしんるい、の事、氏實か被官なりし人、鉢具以
別紙申置候也、

一女子出候地の事、相當年貢をとるへく候、百姓諸役等之事、いろいろへか
らす候、一ご過候、如前々田地を、宮福丸ちきやうあるべき也、

一寺家寺領以下所々事、於末代宮福可爲計候、

一大いごくの地の事、氏實子細を申定、はんきやうをすへをき候上、於末
代宮福可爲計候、もし於文言そのきなく候、ほうしよたるへく候、

一就文書次第、以別紙具申置旨候、

一宮福丸、氏實一世の間、めいをそむき候、そのとき、いへかへし、何
の子こも可出候、爲後日候間、條々申置候也、

文明十一年十一月廿四日

氏實(花押)

宮福丸とのへ

房定ノ證

當知行事、任祖父下野入道應田讓與之旨、領掌不可有相違候、恐々謹言、

文明十一年十一月廿八日

房定(花押)

和田宮福丸殿

氏實房定
ニ謝禮ス

遺跡事、孫子宮福丸被申付候由候間、進判形候、仍爲祝儀馬一疋、蘆毛印、鳥目
五百疋給候、祝著候、恐々謹言、

十一月廿八日

房定(花押)

和田下野入道殿

妙榎ノ謝

先度爲宮福丸殿御祝言、鳥目二百疋拜領、恐入候、仍如御意屋形之判形執進

文明十一年十一月二十四日

七八九

文明十一年十一月二十四日

七九〇

候旨并御祝儀之御馬致祕藏候由書札之被申候將又御祝言計太刀一腰令進之候隨而山上方間之事武井方滯留候間年中可有落居候間遂而可令啓候恐々謹言

十二月十五日

(宗照) 妙樹(花押)

謹上 黑川入道殿 御報

宮福丸代
始下シテ
上杉定昌
ニ謝禮ス

爲代始之祝意太刀一腰 光重 馬一疋 鶴毛印 爲眼五百疋給目出候仍太刀一

振進之候恐々謹言

(文明十一年) 七月八日

(上杉) 定昌(花押)

黑川宮福丸

長尾重景
ノ謝狀

爲御代始御祝儀御禮其趣則披露御返事執進候抑御太刀并御馬一疋 黑三
百疋拜領千秋萬歲祝著至候仍太刀一腰令進入候誠奉表御祝意計候隨而
御本所御安堵目出候依之御禮是亦披達同御返事申御尤候猶御懇之條畏
存候如此子細何樣態以使者可申候委曲御代官西式部丞可申達候恐々謹

言

(文明十二年) 七月八日

(長尾) 信濃守重景(花押)

謹上 黑川宮福丸殿

二十七日、申大和兵亂ニ依リテ權ニ春日若宮祭ヲ停ム翌年之ヲ追行ス、
〔大乘院寺社雜事記〕一七十一 十一月三日、

一來廿七日祭禮事可有始行旨願主人方以下自學侶相觸之云々

八日、

一略 中 於祭禮者可有始行云々當年願主吐田ハ檜原之大敵也大西八十市
大敵也一段可執行事大儀者歟宮符衆徒棟梁可爲迷惑者也

十三日、

一寺住衆徒中御門吉田見塔院等依世上儀打捨私宅令移住古市鹿野園等
了祭禮等始行事等在之間近日於白毫寺邊集會在之陣裝束之躰也云々
沙汰衆參向事難澁歟又於極樂坊集會在之云々比興之次第末代至也近
日風儀凡不及力事也

廿二日、雨下

文明十一年十一月二十七日

七九一

願主吐田
大西八十市
敵

衆徒中御
門等占市
ニ移住ス

越智家榮
進官領スル
押領スル
ニ依リ馬
成場殿假屋

文明十一年十一月二十七日

七九二

一馬場殿假屋等作事進官領悉以越智方之押領之間目代方下行無之故番匠共不致其沙汰材木共捨置之云々山城柚未到來分ハ花山材木切用如例云々所詮就條々來廿七日祭禮不定諸頭人迷惑云々不便且神慮如何可恐々々

廿三日

一公文目代申昨日以慶兼專當自別會五師方相觸之諸進方以下無正躰間祭禮并年始心經會以下不可有始行之由云々

一山内并中川止住之敵方或櫟本邊或奈良中往反致雅意越智古市方迷惑也當年願主吐田ハ檜原之敵也願主大西ハ十市之敵也高田ハ沒人高田之敵也何モ神事難參勲事也旁以祭禮不可得旨自兼日古市申云々如案也自學侶神事可故實旨兼日相觸之畏入旨御請雖申之敵方如此相振舞之間不及了簡事歟以兩國之勢可沙汰之由支度之間敵方も且ハ不及力事尤道理也如此先例無之且延引も爲新儀上者願主人雖令不足於神事者可有始行歟寺門成敗且不足也但諸進官以下違亂條ハ非可及申事歟

廿七日

願主不足
ストモ神
事ハ行フ
ベシ

祭禮延引

越智家榮
ノ返答
筒井ヲ亡
ホスカ或
ハ味方敗
ラレニア
祭禮ハ行
ズベカラ

一祭禮事今日儀延引子細相尋御師祐松了敵方近所路次以下以外狼藉數日儀願主人等恐怖故ニ哉寺門之儀モ門戸ヲ閉不及其沙汰故延引來月十七日分也云々

十二月朔日雨下

一祭禮事先日宗藝五師昌懷通祐吉田胤榮古市令下向越智方申合之不可得之子細越智申切之敵方筒井以下令治罰歟然者當御方打負歟二ニ一無之者此神事始行事ハ不可得々々云々總而爲神事始行兼日より伊勢國司河内兩國事取合令申沙汰之處不叶神慮歟兩國公事出來之間無力不及神事始行候定日云々島山義就北島政郷ノ援ヲ得ント

五日雨下

一就祭禮事巨細仰遣筑前守方近日可來云々

七日

一筑前守來祭禮樣巨細仰付之古市兩人可申合云々

廿八日

一山村父子參申付衣見參祭禮始行之間事巨細仰付之先日越智申樣ハ正

文明十一年十一月二十七日

七九三

月十二日以後可有一途云々且如何

〔大乘院寺社雜事記〕三十七 文明十二年五月七日

一祭禮事昨日自越智方令申古市西方來十七日ヲハ以寺門儀可延引旨申之云々旁以祭禮樣無心元者也神慮如何

十三日

一略中祭禮十七日延引廿七日可有之由自越智方申上自河內御下知云々不得其意事也云々

廿日夜雨

祭禮ヲ二
十七日ニ
定ム

一祭禮事廿七日必定兩方越智方大勢遣可出合云々兩方取合西窪城狹川、筒井方實川也云々於實川者大邊ノ間此取合辭退了云々

廿六日

田樂裝束
ヲ給ス
新座田樂
本座田樂

一田樂裝束給之頭屋尾坊權律師政圓地福院擬講兼實也去年分祭禮也去年被定頭人分南角院權律師賴秀尾坊權律師政圓也然而祭禮無故令延引之處賴秀入滅了其闕分兼實勲之仍初ハ新座田樂ハ政圓方也後ハ政圓方ハ成本座了如此今日給裝束了寺門訪錢事去年被渡賴秀分自遺跡

返進之中以裝束等可進之由雖申入之不可叶旨兼實申云々且又助成分外ニ可立用代物旨申故歟

廿七日丁未

行列次第
馬長頭
流鏑馬

一祭禮行列下同烈次第昨夕別會五師進之使者中綱寺務同進之馬長頭興基權大僧都別會宗算權少僧都光守權少僧都覺專大法師實胤ト流鏑馬平田高田葛木上吐田散在大西同河合自餘如例

一別會五師宗算宗藝兩人出仕五人五師內營尊ハ去年之別會也了弘新五師ハ今度觸穢也與弘五師ハ舊冬以來觸穢也仍宗藝俄ニ出仕了就之宗藝申只今出仕上者明年可爲別會之由云々與弘內々申ハ別會職ハ還次第也當年中ハ指合於明年者理運之由申之云々不一決事也五人悉以可令出仕事也別會ハ還次第勿論也

源乘競馬
役ヲ勤ム

一三綱公文目代宣舜通目代裝舜出仕了會所目代源乘去九日伯父圓寂稱輕服俄辭退之捧咭文云々仍裝舜出仕也但競馬役事ハ源乘勲之先例云々自別在所出立之云々

一今朝田樂兩座之笛吹以下烈參專實寺主申次之其儀如例

祭禮ヲ行
フ警戒ノ武
士

十一年分
祭禮

文明十一年十一月二十九日

七九六

一今日十烈ハ日中以前悉以渡之了、仍未初點より流鏑馬在之、四番□□無
爲珍重云々、去年可有祭禮、依恐敵方延引、今日始行、相催一國之軍兵令防
禦無爲、越智高名云々、

〔大乘院日記目錄〕

三 十一月廿七日、若宮祭禮無之、願主方難義之故云々、

希有珍事也、

文明十二年五月廿七日、若宮祭禮去年分始行之、

別會、宗算宗藝、

田頭、政圓權律師、兼實擬講、

馬頭、與基權大、宗算權少、光守權少、覺專大法師、實胤、

〔後法興院政家記〕

四 十一月廿八日、酉夜來小雪、不及埋地、傳聞、南郡若宮
祭禮延引云々、

二十九日、庚戌是ヨリ先、長尾景春、武藏長井城ニ移リ、尋テ、秩父ニ據ル、太
田道灌、長井城ヲ攻メントシテ、是日、下久下ニ陣シ、成田親泰ノ忍城ニ
聲援ス、

〔太田道灌狀〕

前〇肥

長井城攻
ニツキ長
尾忠景ノ
意見

忍城ニ雜
説アリ

太田道灌
ノ意見

一同九月、景春長井城へ罷移、自其秩父引籠候、既御太儀候之處、(長尾)忠景如異見
者、先秩父御退治候者、長井城者自然可破候、於長井城被責諸勢候而者、以
何勢秩父に可有御退治候哉、由被申候、先以無餘儀候歟、雖然道灌如申者、
秩父與長井何可輒候哉、兵法ニハ討易與候間、先可被攻長井候哉、由申候
間、私被差向旨屋形へ被仰候、猶堅被申付候間、向彼城、十一月廿八日、江
戸お罷立、十二月十日、金谷談所へ著陣仕候處、忍城ニ雜説候之由粗申來
候間、不慮越度候而者、彌々可爲難儀旨存、翌日廿九日、下久下へ寄陣、成田
(親秀)下總守付力候之間、彼城無爲候、御不審候者、事次、此申段成田ニ可有御
尋候、〇中

略、(宗書)文明十一年十一月廿八日

道灌判

謹上、山内家人式部丞、高瀨民部少輔殿

〔別府文書〕

河〇駿

長尾景春長井六郎要害へ馳籠由註進可有御心得候、顯定致勢仕候者、同時
相搖、可致忠節候、忍城用心無油斷候様、成田仁可相談候、謹言、

閏九月廿四日

(正別府)
(花押)

文明十一年十一月二十九日

七九七

別府宗幸氏
足利成氏
杉顯定上
共ニ兵ト
出サレム
トナサレム

文明十一年十二月二十九日

別符三河守殿

○道灌成氏ノ依囑ニ由リ、景春ヲ武藏鉢形城ニ攻メテ之ヲ走ラスコト、十年七月十七日ノ條ニ、景春、武藏兒玉ニ兵ヲ出スコト、十二年正月四日ノ條ニ見ユ、

〔参考〕

〔新編武藏風土記稿〕

百九十九 郡圖 總説 埼玉郡之一

長井庄當郡一村、幡羅郡ヨ

長井莊
下久下

リ推及ヘリ、按、平家物語、壽永二年ノ條ニ、當國ノ住人齋藤別當實盛、小松内大臣重盛卿ノ領武藏國長井ニ居住セシヨシ見ユ、コノ頃重盛卿ノ庄園ノ地ヲ別當セシナリ、コレニテモ世ニ長井庄ト云シコト知ルベシ、
〔新編武藏風土記稿〕 忍領 二百二十 下久下 郡之二 下久下村ハ、江戸ヨリノ行程前村ニ同シ、戸ヨリ十五里、當村及ヒ屈戸、江川、下久下ノ三村モト一村ナリシカ、新川堀割ヨリ分村セシト云、民戸四十餘、東ハ江川村、南ハ津田村、新西田、北ハ久下村ナリ、東西十三丁餘、南北ハ二丁許、水利不便ニシテ皆畑ナリ、
略、○下

十二月 壬子 朔 盡

一日、壬子、御祝、

〔京都御所東山御文庫記録〕

甲二十一 山城

御湯殿上日記

十二月一日、御い

わぬごもいづものことし、

二日、癸丑、鴨社社務祐香ヲ罷メ、祐宣ヲ以テ之ニ代フ、

〔親長卿記〕

二十三

當社々務職事辭退申候、仍就次座被仰次之、縣主處、神用不事行之間、日供神事又被半減者、可存知云々、各所存可爲何様候哉、兼又氏人中間被相尋、各載申狀可被申候由、被仰出候由可申候旨候、恐々謹言、

十二月二日、

親繼判

鳴一社御中

祐宣日供
神事半減
ス、タ、ラ、バ、社、務、ト

當社々務職事及數日及闕怠之條、太以不可然、仍被仰付祐宣之處、日供事前社務祐康縣主之時、人下行仍如其時、可申付公人云々、御業事于今不半減之間、如惣次可半減、以此等之儀、先可致沙汰之由被仰出候、同可被下知氏人等

文明十一年十二月一日 二日

七九九

文明十一年十二月二日

給候也、恐々謹言、

十二月三日

鴨一社御中

親繼判

八〇〇

〔京都御所東山御文庫記録〕

〇乙三十三
山城

文明十一年十二月二十二

しもうもれ玄やむの事、一日仰のやう、一しやへふつね候へ、北國のつう
ろも候の、社用もろけ候へ、神供以下又半減せられてありとも、しやむ
しき、汝うちをろれ候の、んするよりも、なされ候へ、きか、申候、ろのうへ禰
宜ろ、さ、の、ろい、しき人も候の、を候、信祐一人申状まいり候、祝ろ、さ、
の、禰宜ろ、さ、の、ことよて候、ろ、さ、覺悟なく候、とも、ろ、ろ、叡慮よて候、へ、
よし申候、あまり亂中日供半減よて、又半減もい、ろ、被存候て、祐宣に、ろ、
く申候、ろ、さ、候、ろ、この、ろ、の、ふん、こて存知仕候、ん、する、さ、り、な、ろ、
ら亂中半ふん、こ、さ、め、られ候て、半分になり候、の、ぬ、事候、ろ、さ、それ、汝御
下知候、ろ、ま、つ、次座の、事よて候へ、とも、ろ、け候へ、存知し候、ん、する、と
祐宣申候、あまり數日社務も候、て、ど、ろ、く、延引も、ろ、ろ、ろ、へ、ろ、ろ、を、候、ろ、と

北國通社
杜絶如ス

祐宣就職
ヲ諾ス

よ、宣下させられ候へ、きやらん、御心候て御ひろ候へ、く候、

勾當内侍殿

ちろあろ

御局へ

〇社務祐躬ヲ罷メ、祐香ヲシテ之ニ代ハラシムルコト、十年九月三日
ノ條ニ見ユ、

三日、^{甲寅}山城三鈷寺住持善空ニ御衣ヲ賜ヒ、般舟三昧院ノ開山住持ト爲
ス、

〔三鈷寺文書〕

〇山城

三鈷寺依爲住持任先例御衣被下畢、如舊例律衣用之、宜著令參内、又伏見般
舟三昧院爲開山住持、宜令入院者、依天氣執達如件、

文明十一年十二月三日

右中辨(花押)

三鈷寺住持善空上人御房

後醍醐院御衣、山鳩色浮文桐竹并綸旨、西山參鈷寺第八世廣惠和尚被下、則
上下之律衣被用、然應仁一亂、令紛失事、叡慮被聞召、從當今如先例御衣并綸

文明十一年十二月三日

八〇一

後醍醐天皇
賜ノ廣惠
ニ及ヒシ
綸旨及ヒ
亂ニ紛失
ス

律衣

後代ノ住持ハ勅許ナシテ得ルベシ

文明十一年十二月三日

旨、小僧善空被下間、任舊記上下律衣、用畢、後代西山住持者、御衣奉勅許伺、可令著用、努々於門中餘寺不可類之者也、

文明十一年十二月廿八日

般舟院住持 善空(花押)

參鈷寺 衆僧中

義政、百韻連歌會ヲ行フ、

〔愚句〕

○後鑑百十九義政將軍記附錄九所載

十二月三日、百韻連歌、霧比籬そゝえまうち

なるといふ句よ、

戀の山よるのこえしとへふてきぬ

いまはうらみりなをまさりぬる

三 茲たりふ万くすうのらふ風ふきて

かりねのひとりありしとひつゝ

ちる花の名残をおもふ春は夜よ

れとけた色も四方にあまねき

八をみしる君うひりり世よみらて

もろ人れちまゝにうゝふ聲を也

月さやうなるつといたのあき

むかふへきりなゝのうらもちうきと

花まつころれみねのまら雲

よるとゝにちきらぬ人をうらみとひ

なまゝの川はあふせまらなみ

うしほ風いつくのうらにくもるらん

あまのとまやをすくるむらさめ

なみゝれひまれ袖をよせとや

いゝつらふとしをふるきの皮ころも

春あさねひなれなちに行暮て

雪な波ふりきあしのまらやま

霧まよふ難波のさといあしゝうと

こや秋ならしむこたゝつの音

けさは河せをくゝすいかたし

みおのりまいとまれ氷とくる日よ

文明十一年十二月三日

よやひそふうた軒のさちをな
袖ふせしむあしをまのふうた中よ
さるりなるさこ一むらじかむむ日よ
々ふりさちひみゆる民の戸
めくみある御代まなひうぬ方あらし
まつうよふきぬあしいらは風
こえまはまらしあらしの山
かくれ家を花ゆへ春のさつねきて
かりりめの手向も神のさけつへし
つゝりは袖もきりふうた野邊

細川政元ノ部下一宮宮内大輔丹波守護代内藤元貞ヲ撃タントシ、政元ヲ擁シテ丹波ニ下ル、

宮内大輔
野遊下
シ政元
擁シテ下

〔長興宿禰記〕

中

十二月三日

甲寅

晴今日細川九郎政元俄令下向丹波國被官人

一宮宮内大輔號野遊同道自路中捕令下向其子細守護代内藤元貞以下彼國人等對一宮一類成敵輩爲退去令造意相具之一家被官人悉不知之仰天母儀

義政及
政元ノ母
驚ク
京都有力
シノ大名無

尼公周章公方御仰天云々後聞一類一宮於國構館令守護傍輩等同意外不寄付云々當時京都大名赤松志波禮部等被下國無人之處亦此事出來一向京中無人不可然事也

〔後法興院政家記〕

四

十二月三日

甲寅

略

中申刻許細河九郎俄逐電云々

被官人所行云々但未知是非之儀云々言語道斷事也一族所從等馳走東西云々

元貞等一
宮等ノ所
領ヲ押領

十二日癸亥降雨及晚止傳聞細河九郎下向丹波云々被官人一宮々内大輔奪所云々亂中丹州知行在所國人守護代等押領間以屋形下知去々年同名親類入申處不及去渡剩悉令誅伐云々依此訴訟企此大儀云々自昨日七里引籠云々依是一族中可取立別人歟之由評定云々

〔大乘院寺社雜事記〕

一七

十二月六日

一細川一家事ニ申事出來一家可滅亡由雜說依之細川讚州成之入道雖興道心一門大事出來之間自紀州先日罷上了近日希有之雜說共在之實否不聞者也

八日

細川成之
紀伊ヨリ
上ル

管領政長
スノミ在京
政長義尙
ヲテ擁シテ
笠置ニ下
ラシメテ
トノ風聞
義成國聞
トテ成敗
風聞

三寶院義
覺ヲシテ
細川家ヲ
嗣ガシメ
ントノ噂
安富内藤
等細川澄
元ヲ擁シ

テ政元ニ
抗ス氏ヲ
細川氏ノ
分政丹波
ニ下リテ
元ヲ伴ヒ
歸ラント
ノ風聞ス
東北院後
圓隠居セ

細川勝元
丹波ノ關
所ヲ宮内
大輔ニ與
フ真一宮
元ノ黨三
人ヲ殺ス

文明十一年十二月三日

八〇六

一去三日、細川九郎俄ニ令在國丹波國了、一宮黨相具、近日分國共任雅意之間、可在國之由、自兼日及其沙汰事也、於于今者、畠山一人在京管領也、可爲如何哉、初終ハ定而奉相具將軍、笠置邊ニ可下向歟、云北六道、云東西、各物忿也、山城道一所無爲也、如雜說者、所々國ハ今出川殿御成敗分也、

十日、

一隨心院殿御狀到來、四日細川九郎、一宮宮内大夫取之下向丹波了、是去年

一宮黨二人其外人濟々、爲内藤之沙汰切腹了、其訴訟云々、隨而細川六郎

可取立之由及其沙汰、一家引分了、京都ニハ畠山管領方五六十人外、男切

無之、珍事、

十二日、自夜前
雨下

一松林院申給、細川事一宮色々訴訟、内藤、秋庭、池田、伊丹、安富、赤松之ウラカ

へ各訴申入之云々、万一不叶者、公方御息三寶院若君、可奉成細川云々、

十七日、

一河内國へ、去十二日自京都注進云々、細川九郎ハ六里奥へ引入、一宮以下

與力衆濟々在之、京都ニハ安富、内藤以下六郎を引立、成細川了、上意又成

下候歟、一家ニ成條必定々々、于希代不思儀之神慮、難有々々、

一或公方有御下向丹波國、召具細川可有御上洛之由、雜說有之、比與之次第

也、不可申承引、如此事傳聞、天下儀不可有正躰之間、東北院僧正俊圓可隱

居之由申云々、世上様存、餘之故歟、

〔大乘院寺社雜事記〕

○七 文明十二年二月十七日裏文書

御書畏存候、隨心院殿御書實說候、昨夕和泉守護方へ下候神人上候、守護方

へ自京注進候、隨心院殿如御書候、一の宮の宮内大夫と申候者、本來國人

候處、定在京之者候、故細川右京大夫之時、丹波ノ關所を自細川一宮よくれ

候を守護代内藤不承引候、一宮方を剩三十人計うち候、結句自其細川方

之年貢無沙汰候間、取細川候、丹波へ下候、一宮うらちよ近邊に野陣に細

川方之者以下

〔大乘院日記目錄〕

三 十二月三日、細川九郎在國丹波國了、一宮々内大夫

訴訟故也、本小笠
原黨也

〔和漢合符〕

十 文明十一、己十二月三日、細川崇明赴丹陽、盖家臣一宮黨劫

崇明也、

文明十一年十二月三日

八〇七

○一宮備後守内藤則繁ニ通ジテ、宮内大輔父子ヲ斬リ、政元京都ニ歸ルコト、十二年三月二十三日ノ條ニ見ユ。

大内政弘、周防興隆寺ヲシテ、同寺領永山前ノ地ヲ、波多野盛秀ニ渡付セシム、

〔興隆寺文書〕四周防

波多野日向守盛秀申、屋敷當山御領永山前田畠貳段事、任申請之旨、可居住之由被仰出、有限於地料錢者可嚴納候、若令無沙汰者、自領主堅固可被加催促候、猶以不及承引者、可有改易彼地者也、然早可被打渡右二段お盛秀之由候也、仍執達如件、

文明十一年十二月三日

(杉武明)
平(花押)
(藤野弘康)
右衛門尉花押

氷上山年行事御中

七日、戊午車駕、日野政資第ヨリ、土御門内裏ニ還幸セラル、

〔京都御所東山御文庫記録〕甲二十一 御湯殿上日記 十一月廿八日、けふは御さう月万いる、日野玄うくむんううりつきて一こん申さふ、をり

盛秀永山ニ居住セシムコトヲ請フ

還幸ニツキ政資酒饌ヲ獻ズ

堯胤法親王御東帶等ヲ獻ズ
近衛政家石帶ヲ獻ズ
仁和寺内永等參内

新内侍局
故障ニ依リ長橋局スノ姪ヲ召

御物ヲ政資第ヨリ土御門ス

夜中還幸供奉ノ輩

御さるもそひてまいる、ぞんしゆのなかめして御ひし〜と五こん万い

る、めてさし、
廿九日、略中(堯胤法親王)ウチ弁殿御まいり、くむんううりつきて御そくさる御ふくともまい

る、めてさし、御いしの御をひは、くむんさくよりまいる、
十二月三日、略中(近衛政家)くむんううりつきて、御むろ、くむんしゆうしは新もんし

もなども御万いり、御さう月まいる、
七日、くむんううりつきてひあるへし、御くそくとも、さう〜とさう〜とあつ

けらる、新内侍よさうりよさうりよて、御おさうくるよつきて、なうりし

れめいをふとめしいさして、いま〜いりさせらる、どりあへをいま〜い

りの花ありて、をり御たるひし〜まいらせらる、めてさし、日野より、つ

ち御うこの御所へは御物わたし、ない〜よと、源大納言、みん部卿、とし

すのあそん、ごさまよと、日野中納言、あの御所よは兵部卿、しけの弁、四つし

は宰相中將、さめちうりあそん、ごさまよは中院、なうくよあそんなどなり、

かよちやうのくしなごありて、夜中なごよくむんううあり、くふのともり

ら、くむんしゆうしは、大納言、ごく大寺大納言、日野中納言、中御うこの中納

言、ごく大寺大納言、日野中納言、中御うこの中納

内侍所渡
御學問所
御小庭出
御中内侍下
稱幸傳奏
甘露寺親
長奉正親
興町三條實親

文明十一年十二月七日

八一〇

言大くら卿新宰相中將(三條實隆)之、もうきん夏(編本)のあそん(天中臣)、どれのりあそん(白川)、まけう
ちあそん左兵衛(万里小路實房)、まけ、右兵衛(野間基)、まけ、そのやう頭中將左少辨右少辨、くら人と
もあそんくあり、南てんよりつねれあそくく、えんううのたよて、つねの
御所へなる、けんしの内侍いつものあとし、さちやう所の御所の御さまて
もさせまふを、大納言のまけとり入万いらせて、けむしれまにまると
とをき万いらせらる、千まう万をゐめてさし、そのち内侍所れを御の
よしふ行申、御かくもん所の御こ庭よてうまうれてしゆ、御なる、無爲に
めてさきよし申、やうてつねの御所へなりて、御さう月三こん万いりて、お
とこさちまて御しやくにてさふ、ろのちくこいしめ万いりて、御なうの
御さう月まいる、いまないし殿新内侍と名つけらる、御さう月れ時よ六
つかさせまふ、まめやうのしめさるきま、えんしの御まこ、まるとも
ち万いらせらる、さくさくあるよし御さともよて、なうのしちうせつ一
さんめてさし、このやとの新内侍、せんきのおそくなりの内侍とおや
せつけらる、あのおひれてんそうかんろし、ふ行三條中將(實隆)なり、なりさま
にけんはいもあり、まうけの御所よあし、さきならひよし田申、

久我通博
參賀
伏見宮邦
高親王太
刀ナ獻セ
義政馬太
義政馬太
太刀ナ賜
近衛政家
折權ヲ獻
參賀兼長
參賀法親
王參賀親
四園寺實
冬平松重
治田向重
安禪寺宮
觀心宮通
乘寺宮大
聖寺宮折
樽ナ折

八日、こんさうの御さう月万いる、あんせん寺殿(元様)、つうけん寺殿よりも万い
る、あう御せぬま、こ、御たいめんあり、ふしみ殿よりく、えんううのめて
ささとて御さちまいる、大ふ御せぬにま、こ、さちやう所よて御さいめん、
九日、中むろま、殿より御むま、御さち万いる、御つう、せく、えんま、えうし
れ、大納言、やうてこの御所よりも御むま、さち万いらせらる、中むろま
ち殿より御まな、二色万いる、あん、殿よりをり五うう御さる、三う万いる、
十日、中むろま、う下、さうさよて御れる、くろとよて御さいめんあり、
十一日、かち、せ、れ、宮御れい、御万いり、さちやう所よて御かちあり、御さち
多いる、のちよつねの御所よて御さう月万いる、さいをんし、ひらまつ、田む
き御れい申さる、御さいめんあり、
十二日、中うん、せう院より大をり五うう万いる、中略、禁中田樂ノコト
條、ふしみ殿い、ま、御せ、せ、御万いり、なきまより、まつろとよて入万い
らる、御しやくなどよて、御ひし、と万いる、めてさし、
十三日、あん、せん寺殿、しんせうし殿、つうけん寺殿、大しやう寺殿、御万いり、
をり御さる、ともみな、万いらせらる、御さう月五こん御ひし、と

文明十一年十二月七日

八一

二尊院善
石唐寶硯
柑

盧山寺
智恩寺
庭田長賢
鷓鴣

雲龍院聖
秀妙光院
參賀
青蓮院尊
應盆花瓶
等

山科言國
薄籠
大獻
強供御

萬松軒等
貴
日野苗子

尊勝院盆
印籠檀紙
大獻

妙心寺宗
深扇杉原
大獻

善應寺佛
陀寺太刀
大獻

還幸御用
具近衛
政治家
徴

文明十一年十二月七日

八一

万いる、御むるも御万いり、一こんのおりふしよて、やうてつねに御所よて
御さいめんあり、こんもおなし、(善空)二そん院御れるよまこ、つくし
よりのやられさる御みやけに、御うなうま、御くまんま、十めんれ御ま、
れいし、うられまつらんなど万いる、しゆさうすもまこ、御さいめんあり、
ろさんし、ちをん寺万いらる、御まきれよて御さいめんはなし、(長賢)庭田入さ
う殿も、下まうよて御つほねまて御れるにまこ、く、る万いらをらる
、ふしみ殿およひ御いてあり、
十五日、(御榮)うんをう院、めやうくまう院御れる申さる、御さいめんあり、
十八日、(尊應)しやうせん院殿、くまううれ御れるよ御万いり、御ほん、御くまひ
ん、御さち、十帖万いる、さちやう所よて御かちあり、御所く、くろ戸よて
御さいめんあり、二の宮れ御うさむろひ万いられて御さう月万いる、ま、
きれりこくらのうま万いらる、御こまく御万いる、御所く、は御つまよ
て万いる、
十九日、(萬松軒等貴)せんをう、くまううの御れるよ御万いり、(日野苗子)三の御あまも御万いり、
御うまらけの物御さる万いる、御さう月三こん御ひし、と万いる、

廿日、(中)そんをう院御まいに万いらる、御やん、るんろ、さんし十帖も
ちて万いる、

廿四日、めうまんし御まいにまこ、御あふき一ほん、まねら十帖万いる、
御さいめんあり、さう院の上らふ御万いり、御うまらけの物御さる万いる、
御さう月三こん万いる、さられひやうるれまけをり三ろ、御さる三ろ万
いらる、まつれ木申つろ、

廿七日、(中)せんおうし、くまううろ、れ御れるよ、御さちもちて万
いる、御さいめんあり、ふつさいしもおなし、

文明十二年正月十日、(中)宰相中將殿、くまううの御れいよ、へちしてし
る御さちまいらる、

〔後法興院政家記〕

四 八月廿五日、(己)小雨如昨日、按察卿爲勅使來相謁、來

十月還幸時御用御笏、(牙)石帶(巡有文)可召進、先規如此云々、余申云、古物悉紛失
之間不所持候、但相尋所持之仁躰、重可申入由申入畢、(中)彼卿還幸方傳奏
事被仰出間、内々先領狀申之由相語之、

九月廿七日、(庚)晴陰、晚景小雨下、自按察卿許申送云、石帶事相構可召進之由

文明十一年十二月七日

八一三

政家ニ還幸次第ヲ撰進セシ

政家ニ還幸次第ヲ撰進セシ

還幸次第進上

用具整ハ引ス還幸延

還御ノ日天皇御進退ノ事ヲ注進セシ

文明十一年十二月七日

八一四

被仰出云々將又來十月還幸必定候御次第可作進之由同被仰云々時顯朝臣就他事罷向之處如此申云々依所勞不參之由示之云々

閏九月三日酉陰時々小雨下奉書狀於二條前關白許遷幸次第等可借給之由申之慶正度造内裏之時遷幸次第借給之西園寺家作進次第也

十八日庚子晴余所持石帶有文遣按察卿許先日可一見由依有其命也四五日可預置云々

十九日辛丑晴余石帶自按察卿許返給可有御用之由被仰出云々

廿八日庚戌晴及子刻雨降曉更風吹未明止行幸次第高檀紙半切ニテ續加之枚裏付按察卿令進上之

十月廿日壬申晴風吹遷幸可爲昨日之由風聞處不事具問廿八日ニ延引云々猶以不審云々

十一月廿六日丁未陰晚景小雨灑今日實門參賀云々還幸來廿九日云々予石帶加修理付按察卿進禁裏

廿八日己酉夜來小雪不及埋地略○中行幸御次第外當日主上御進退事別紙ニ可注進之由昨夕以按察卿被仰出問今日令注進一紙行幸可爲明日之由兼

還幸又延引ス

散狀

禁中修理完成セズ

日治定然而依未下行令延引來月五日云々

十二月三日甲寅晴綾小路黃門入道來數刻雜談令借用行幸次第勸一蓋按察卿來令對面就行幸御次第度々以書狀申入之恐存候(由之)申謝之還幸來五日治

定處自昨日禁中犬死穢出來非直事歟但作事未調云々太略十一日可爲治定歟之由相語之

七日戊午天快晴今夜天皇遷幸土御門内裏每事省略也供奉卿相客散狀相尋奉行職事記之

公卿勸修寺大納言德大寺大納言中御門中納言日野新中納言大藏卿新宰相中將辨元長

左近府資公夏朝臣資氏朝臣右近府言國朝臣

左衛門府以量章清左兵衛府賢房

御後職實興朝臣元長菅原在數卜部兼致菅原長胤抑今度内裏御修理之事清凉殿黑戶對屋一字カナへ殿之外一向不及御修

文明十一年十二月七日

八一五

日野政資
功賞
シノ四品ニ
叙ス

理云々、春興殿御門等如形有假音云々、
八日、未晴陰風吹、小雨灑、頭中將實與朝臣來傳聞、日野侍從政資敘四品、是家
賞云々、

幕府參賀
政家參賀
セズ

九日、申晴陰、時々小雨灑、俊宣朝臣自江州上洛(駈テラシ)、五合柳三合令進上、禁裏還幸
無爲珍重之由令申之、余拜賀之間不及參內、今日武家に有參賀云々、昨日自
傳奏雖相示、俄之儀不合期間、稱所勞不參、還幸事申沙汰珍重之由、以使者賀
遣按察卿許、又政資四品事賀遣之、

甘露寺親
長一條兼
良等トナ
幸ヲ議ス

〔親長卿記〕^十 七月四日、晴、夕立降、今朝自勸修寺大納言許、有可談合事、晝
時分可參云々、即參內、還幸土御門殿事、最折中事可申合禪閣、相共可談合申
云々、當時之儀如此之時出現無益、雖然任芳命令同導勸大、源大等、參禪閣條
申談之、

鳳輦修造

十二日、晴、還幸傳奏事可存知云々、申故障之由了、
十八日、晴、略、中次仰云、鳳輦事、先夜火事之時置一條家門云々、若無置所者、渡
土御門殿可置紫宸殿內歟、予申云、還幸事有其沙汰、傳奏治定候者、御修理事
最前可有沙汰、然者先不可被移他所歟、但可談合勸修寺大納言由申入退出、

親長還幸
傳奏トナ
ル

音信勸大參內之次立寄、仰之趣如予申狀、

八月廿三日、晴、朝間就還幸傳奏事、詣勸大許、

廿四日、雨下、參內、下、還幸傳奏事今日申領狀了、子細載別記、近日炎旱降雨

太、甘雨歟、

九月一日、晴、還幸御服事等、問答內藏頭、在別記、○別記所

十二月五日、雨下、還幸依犬死穢延引、

七日、晴、今日還幸土御門殿也、傳奏予、奉行頭中將、實與朝、在別記、○別記所

十七日、晴、近日愚記、依還幸物忿不書之、還幸事在別記、○別記所

〔親長卿記〕^{三十}

來十月可有還幸土御門殿日次、可被擇申、(由説之)被仰下候也、謹言、

九月、

實與

(土御門有云)
陰陽頭殿

御教書

還幸土御門殿事、頭中將實與朝
臣依所望注之、
來十月可有還幸土御門殿、任何可被致沙汰之狀如件、

文明十一年十二月七日

還幸日次
シム
ヲ勘進セ

還幸御服

文明十一年十二月七日

九月、

左中將判

八一八

四位大外記殿
(中原勝隆)
新四位史殿
(小槻雅久)

來十月可有還幸土御門殿任何可被申沙汰之狀如件、

九月、

左中將判

藏人大內記殿
(原賴在)

來十月可有還幸土御門殿可令供奉給者依天氣言上如件誠恐謹言、

九月、

左中將實興奉

進上 勸修寺大納言殿
(庭田雅行)

源 大納言殿

德大寺大納言殿
(兼光)

入言上、可為步儀候可令存知給候也重誠恐謹言、

來十月可有還幸土御門殿可令供奉給者依天氣上啓如件恐惶謹言、

九月、

左中將、

謹上 中御門中納言殿

新中納言殿

來十月可有還幸土御門殿可令供奉給者依天氣執啓如件、

九月、

左中將、

謹上 侍從宰相殿
(行原政務)

新宰相中將殿
(三條實隆)

來十月可有還幸土御門殿可令參陣給者依天氣執達如件、

九月、

左中將、

五條少納言殿
(爲親)

來十月可有還幸土御門殿可令陣給者依天氣執達如件、

文明十一年十二月七日

八一九

文明十一年十二月七日

九月、

左中將、

八二〇

頭(山科官廳)殿

中將(藤木公室)殿

田向中將殿

〔柳原家記錄〕

宗賢卿記

十二月七日、今夜還幸土御門殿此間御座日野駕

駕與丁ノ
訴訟ニ依
リ延引ス

與丁依訴訟延引召仰之儀、中御門中納言宣胤卿、上卿著公卿座召外記將監人

也、不出向也、權少外記安倍盛俊參之、堂下給行幸日時并幸路注文、內侍

所渡御日時等、外記懷中行路注文、於行幸并內侍所渡御日時等者、取副笏結不

之云退出、吉時曉鐘時分天皇御束駕鳳輦幸土御門殿、供奉公卿以下見散狀

先雜隼人四人、左右二次官人章清、次左衛門佐以量、次左兵衛權佐賢房、此行

以量前、次菅宰相顯長、還任、今次柳原中納言量光卿、不奏慶、先供奉、於次中御

門中納言宣胤卿、次德大寺大納言實淳卿、次勸修寺大納言、次御興、將實隆相

頭中將實興朝臣、左中將公夏朝臣、右中將言國次職掌、實興朝臣、左少辨、元長

朝臣、左少將資氏朝臣、少納言不參、鈴奏為代、次職掌、極藹菅原、在數藏、人將

管原長胤、致行路室町南行、一條東行、洞院東路南行、迄四足御門、有立南階下

御通路

供奉次第

小槻雅久
不參

雜隼人裝束料下行

六位外記
史訪下行

大殿祓

一局務大外記師富朝臣參陣、不及御、訪沙汰、官務雅久宿禰不參、

一日野侍從政資今夜敍四品、不經五位、職事、但彼家不快、歟

一還幸傳奏親長卿、衣冠、參之、

一雜隼人四人、裝束料四百疋被下行之、國役外也、

一六位外記史、御訪三百疋充、各被下行、

一內侍所渡御、左中將公夏朝臣、權少外記盛俊、右大史中原康純等供奉之、天

皇下御之儀、內々在之云々、

一警固解陣事、今度不及沙汰者也、吉書同上、先例每度吉書有之、

一於儲御所、土御門殿、有大殿祓祭、祭歟主參之云々、

還幸

公卿

勸修寺大納言

德大寺大納言

中御門中納言

日野新中納言

大藏卿

新宰相中將

辨

元長

文明十一年十二月七日

八二一

文明十一年十二月七日

八二三

左近府

公夏朝臣歟 資氏朝臣

右近府

言國朝臣

左衛門府

以量 清章

左兵衛府

賢房

御後職事御後字不審

元長 菅原在數 卜部兼致 菅原長胤 實興

反問陰陽頭有宗朝臣衣冠參之可載散狀歟

此外

大外記師富朝臣權少外記安倍盛俊右大史中原康純

官掌、五位史不參

內豎頭川康參之內侍所渡御、御草鞋非外記催

陣官人陣
儀ナキニ
依リ御與
固トナス

御出御所
召仰ノ儀

日時勘文
等外記ニ
下ス

供奉公卿
歩儀

鈴奏ナシ
御與著御
官ノ時神祇
獻ズ

町廣光奏
慶西坊城顯
長奏慶

陣官人今度依無陣儀不催之
版今度不及沙汰

〔長興宿禰記〕

中

十二月七日

午戊晴

今日於土御門殿內裏還幸也、戊刻供奉

公卿以下參集御出御所日野侍從召仰之儀、上卿中御門中納言宣胤卿、上首

勸修寺大納言重服、德大寺亞相未著陣之故也、無陣座之間、於公卿座有召仰

日時勘文幸路注文被下外記、召左少史康純、被仰御與御裝束事、局務外史中廣師

富朝臣、左一史盛俊等參陣、官務雅久宿禰故障不參、不可有先例哉、諸司以下

不具、次第之儀遲々、及曉天寅剋有御出、御路次供奉公卿以下歩儀、雜隼人前

陣行列等如先例、先是御出御所東庭、公卿等列立如例云々、鈴奏少納言不參

之間不及沙汰歟、御綱事被載御次第、但誰人仰哉可尋之、御與到土御門殿西

御門、神祇官祭主獻太麻、樂人奏立樂、先是供奉公卿以下前行入御門、御與寄

南階御與寄修公卿等列立南庭、

一日野中納言廣光卿、還御之後、於土御門殿奏慶任納言大藏卿在長卿於御

出御所、先奏慶後也議堂上了、

一今日御次第殿下御作進之、

文明十一年十二月七日

八二三

困窮ノ公卿諸司等
行ニ御訪下

文明十一年十二月七日

一公卿以下窮困人々諸司等被下行御訪云々

還幸

公卿

勸修寺大納言 德大寺大納言 中御門中納言

日野新中納言 大藏卿 新宰相中將

辨

元長

左近府

公夏朝臣 資氏朝臣

右近府

言國朝臣

左衛門府

以量 章清

左兵衛府

賢房

還幸日時
勘文

御後職事

元長 菅原在數 卜部兼致 菅原長胤 實興

擇申 還幸日時

今日七月戊午 時戌二點

文明十一年十二月七日 陰陽頭安倍朝臣有宗

擇申 内侍所渡御日時

今日七月戊午 時戌二點

文明十一年十二月七日 陰陽頭安倍朝臣有宗

還幸土御門殿路次 出御東門室町南行、一條大路東行、洞院東大路南行、迄

于御所

〔晴富宿禰記〕七月十三日、丁晴、召寄菅大臣之銅細工、鳳輦鳳形等事申付之、

十七日、未晴、銅細工來、御輿鳳形事繪圖持來之、又御金物等御輿可在一條殿、

令參上、可致檢知之由申付了、遣狀於町口判官了、一條殿 祇候

文明十一年十二月七日

内侍所渡
御日時勘
文

還幸路次

鳳輦修造
ノ次第

鳳翬寺勸修寺久小機雅久檢知セントス
傳奏未定知ノ爲メ檢ナ猶豫ス

皇居炎上ノ時一條家ナリ移シ後又土御門御所ニ移ス

十八日、申、壬晴、官務遣使於傳奏勸修寺亞相第、御輿檢知等事申之云々、
廿日、戌、甲霽、官務爲御輿檢知參之、先向傳奏勸修寺大納言卿、教、秀、亭、約諾之間、相
共爲檢知之也、然亞相云、還幸之儀別而可被定傳奏、被仰甘露寺前、權、中、納、言、卿
之處、有訴訟事未一定、其間檢知事可相待歟、還幸亦八月不可事行、可爲十月
歟云々、暫談話於官庭御輿沙汰事等、先規之趣粗語申云々、又自訴事等申談
云々、略、中次向按察亭、還幸傳奏事被仰下、每事此間成敗申様、依人々申請、不
能是非、被打置一方事在之間、每事向後不可有正躰歟間、諸篇任申沙汰、雖誰
人執奏、被盡其理、至公人等事者、云先規、云支證、被任理非者、可隨番勸之旨言
上之、未被仰出御返事云々、次參禁裏、於民部卿忠、富、卿局申承御輿御修理等事、
應永新造假屋事等、綸旨令見之、又條々申承云々、
八月十四日、戌、戊晴、夜雨、自曉屬晴、○中、略、大、內、政、弘、ノ、父、贈、位、ノ、コ、ト、收、ム、鳳、輦、自、皇
居炎上時被置一條殿、被侵雨露之間、被遷置內裏云々、但又可奉入私宅歟、可
有修理間、此次可然歟云々、仍載折紙、官務申遣傳奏、
廿四日、申、戊雨、洒、終日陰、甘露寺前中納言按察親長卿來十月可有還幸土御門殿、可存知之由送
一通職事未定之間、先令申云々、鳳輦御修理等事亦可被注進云々、此卿還幸

傳奏事治定之間被送一通歟、可然事也、

廿五日、酉、己晴、陰、晚雨、官務以盛俊遣按察卿第、還幸傳奏御治定目出之由申之、
昨日條々奏聞、鳳輦事、應永於官家沙汰儀伺申候、先規之間、亦有御注進、可被
沙汰云々、

廿八日、壬、壬雨、降、自晝止、八月中、○中、略、又、盛、俊、遣、按、察、卿、還、幸、傳、奏、御、輿、御、修、理、事
注進無沙汰、如何様事哉云々、

廿九日、丑、癸晴、行事官左史生紀氏益來、御輿修理事等談合之、
九月二日、卯、乙晴、陰、○中、略行事官左史生紀氏益、鳳輦修理事可被仰付之由捧申
狀、

五日、午、戊晴、○中、略氏益以折紙、鳳輦御修理事、以御扶持之儀可被仰付之由懇望、
七日、申、庚雨、降、早旦官務遣盛俊於按察卿第、鳳輦御修理事、氏益望申事有御伺
哉、先規於私行事所致沙汰事、曾無之、況當時猶其私行事所望申旨、不審之次
第申遣之、未能披露云々、

十二日、丑、乙晴、來十月十九日可有還幸土御門殿、任例可也致其沙汰之由、右頭中
將實與朝臣觸之、官務獻請文、還幸奉行事被仰此朝臣故也、還幸之傳奏按察

紀氏益鳳
命修理ヲ
命セテラ
ンコトヲ
請フ

私ノ行事
シハ先例ナ

△ニト東氏
任シ使益
セシ修史ヲ
シ理生ヲ

駕輿丁番御
屋守ノ番
ト建テ
請フ

文明十一年十二月七日

八二八

親長卿奉書到來鳳輦御修理事近日幸移置土御門殿之間於此御所可致沙汰之由可下知行事官之旨被仰之氏益為裝束使史生之旨望申之仍以折紙委細可被仰付之趣言上之遣盛俊於按察卿亭還幸申沙汰之儀任總別之順御訪可有申御沙汰之由申遣之也

十四日卯晴四府駕輿丁等參來之內裏御輿守番屋廿拵之間可祇候門前之由申之官務他出之間予書官務名字折紙可付傳奏勸修寺亞相之由下知之十六日巳晴晚官務歸宅氏益參來持參一獻鳳輦御修理事注進之儀為得御意云々

廿一日戊甲晴史生氏與參之携一獻鳳輦修理注進持參以官務折紙付傳奏按察親長卿之由申付之此注進載氏與名裝束使史生者父氏益也然氏與名不得其意之由切瑳之處氏益故傳奏廣橋中納言有申沙汰敍爵仕候時以氏與不相替可致奉公之由言上了不辨巨細候越度之至候所詮裝束使被仰付氏與被下御下知者畏入候云々不事問此注進載名字之條所存不得其意之由官務再三述所存予云悔先非歎申候上今史生無人也氏與立副父可致奉公之間只今被遣下知者可然之由以青侍清藤令申之間應予命裝束使事下知

鳳輦修理
料ヲ附ス
ニ氏與

△御輿長等
訪ヲ望

費鳳輦修理

氏與畏入之次第述心緒退出了

廿七日辰庚晴裝束使史生氏與來鳳輦御修理用脚勘減事注遣官務官務對面廿八日巳辛晴氏與鳳輦用脚四十貫且請取之二百疋持參之有一獻權大外記康顯來官務對面雜隼人宣旨事申之持參折紙職事御□并度々行幸隼人事

□舊案持參之

閏九月七日丑己晴高大史俊職來為重服母還幸參□事有望申之旨御輿長等御訪事捧折紙

九日卯陰裝束使史生氏與參來還幸御訪事申之云々鳳輦御修理八千疋治定云々

十二日午甲晴氏與參來鳳輦料又二千云々百疋持參之

十三日未乙晴略中還幸等條々云供奉云武家傳奏可闕御事歟廿二日辰甲陰晴不定細雨洒一昨日官務向還幸傳奏按察親長卿第還幸官方二人御訪事折中之儀書載折紙賜之今日以盛俊又駕輿丁申間事申遣傳奏十月十九日未辛晴土御門殿還幸今日延引內裏修理未出來又女中以下御訪不事行之故也

文明十一年十二月七日

八二九

越後上杉
氏關東在
陣依り
雜隼人宣
旨ヲ泉和
ニ改ム

文明十一年十二月七日

八三〇

十一月十二日、巳晴、權大外記康顯來、還幸雜隼人諸國宣旨之内、越後者依關東在陣不致國役云々、仍改越後可爲和泉成賜宣旨、可取替越後宣旨、各宣旨、在布施下野守宅之由、令懇望也。

十二月四日、卯晴、明日還幸延引、可爲來七日之由、頭中將觸。

五日、丙辰、雨降、還幸依皇居犬死之穢、又延引。

七日、前文闕ク、十二月、布施下野松田豐前兩判也、宛所甘露寺家雜掌之由載之、商買不可有相違之趣。

還幸傳奏按察卿甘露寺親長卿奉書等、駕輿丁持來、武家奉書文章猶雖有歎申旨、公儀、嚴重之上者、今夜之儀可參勲之由、堅下知。

還幸及寅剋出御、於中門廊有召仰、上卿中御門中納言宣胤卿、職事頭右中將實興朝臣、自御殿方進出、緣上、下日時、行幸賢所渡、御等二通并行路折紙、上卿召外記、而陣官依不被下御訪不參之間、以六位藏人、可召之由、雖有其沙汰、藏人自緣上召之者、可爲難義、臨期及問答、違亂之條不可然、所詮只請上卿之目、可進歎之由、四品外史等談合之間、就局務與奪權少外記安倍盛俊、史兼外記立檐下、賜日時并折帟等、每事爲略儀、仍不及結文云々、以進退、裝束事、辨。

文
還幸
公卿
勸修寺大納言 實淳卿 德大寺大納言 宣胤卿 中御門中納言 量光卿 日野新中納言
顯長卿 實隆卿 新宰相中將
大藏卿
辨
藏人左少辨 元長
左近府 橋本中將 資氏朝臣 伯中將
右近府 山科中將 言國朝臣
左衛門府 橋大判事 以量 章清
左兵衛府 賢房

文明十一年十二月七日

八三一

御後職事

元長 菅原在數 卜部兼致 菅原長胤 實興

文○闕

還幸之後、次將外記、史官掌歸參、
有渡御、自四足敷筵道、奉入內侍所、當
并大藏省幔等被略之、鈴奏少納言不參、
殿祭御麻等神祇官人參之、立
樂如例、駕輿丁訴訟臨期裁許、官務依不參馳來此所之間、令施行之、

吉書御覽
沙汰二及
バズ

一吉書官藏人方雖為假皇居、暫御逗留者、可被下吉書、況本內裏經亂世十餘年、今
還御何無吉書御覽哉、用意之處、不可及沙汰云々、以外事歟、

駕輿丁訴
訟

一駕輿丁訴訟、右近府葛川打破木商買事、左兵衛府茜商買事、四府米穀中原
師親停止催促事、又於所々止違亂事等、傳奏奉書武家奉書加文書、
駕輿丁
等文書

白川忠富
ノ達亂ヲ
停ム

諸門ノ警
固

一伯民部卿忠富卿、亂來泉涌寺領知行、
代官職藤堂廣橋青侍可進辭狀之由
被仰付、年來之無不法懈怠之由歎申、被押還御、
藤堂左京亮起請文云々、
依之聊延引歟、

一土御門殿四足役所如例管領左衛門督政長、
唐門者二階堂、波多野等役

御輿寄等
修理

御裝束ノ
御訪御輿
修理等用
脚追加

還幸ノ賞

所也、東御門細川讚岐役所在日華門傍、東御門被閉之、北御門近衆巡番也、
今松田勤之云々、

一御輿寄如例修理職作之、出御々所同構之、

一陣座床子座不及修理、今度清涼殿并黒戸有修理、臺舍同修理云々、南殿一
向不能御修理也、南庭東方築地破之間、内々假又築地自去夏構之云々、

一御修理外御裝束御服等、女房御訪、諸司御訪、御輿修理等、用脚六百貫、追加
二百貫云々、

文○闕 不知食巨細御申歟、又還幸本家賞、室町殿御賞、日野侍從賞事等如何、
御沙汰哉之由尋申處、日野侍從政資敍四品、其外不知食之由被仰、
遣狀

於按察親長卿許、淨教寺門弟勅願寺事舉達之故也、此次今度本家賞事相尋
之處、日野侍從政資四品御免候、室町殿御賞不及沙汰、

八日、未晴、還幸今晚寅下剋也、

十二日、亥、雨降、盛俊盃盤申沙汰之、還幸、
御賀酒也、

〔實隆公記〕五 九月十日、亥、晴、
向甘露寺談還幸供奉事等、

十一日、子、晴、頭中將送御教書、

文明十一年十二月七日

八三四

來十月十九日可有還幸土御門殿可令供奉給者依天啓上啓如件

九月十一日

右中將實興

新宰相中將殿

不具故障非一事之間重而可申左右之由返答了

後九月廿二日辰甲早旦退出終日無殊事行幸次第借內藏頭本寫之入夜萬里

小路入來

〔大乘院日記目錄〕三 十月十九日遷行延引了

十二月七日還幸土御門殿自應仁元年八月廿三日至當年十三年行宮

〔大乘院寺社雜事記〕七十 九月廿七日

一土御門殿遷幸十月十九日必定清冷殿長橋計被加修理云々○下略皇子

ノコトニカ、ル十二年十月十三日ノ條ニ收ム

〔大乘院寺社雜事記〕七十

十月十九日辛未土危柳宿木曜三吉大赤

一遷幸土御門內裏云々清冷殿一字被修理之西對屋長橋同修理殿上同修

理黑戶春興殿自元無爲云々南殿以下一切被打捨之四面築地四足以下

諸門一向無之不及建立如形儀計也近所在家等無之東西ハ西山東山ニ

行宮御座
十三年

諸殿舎ノ
狀態

築地四足
門等無シ

御所近傍
ノ狀態

見融南北ハ二十町計見融者也云々假令日來之內野如官廳也

廿九日

一松殿下向夜部宿木津云々京都事條々相語

一遷幸無之諸事不成辨云々來月十六日之由見御書是も無治定云々○

略赤松政則播磨ニ下ルコトニカ、ル十月二十一日ノ條ニ收ム

十一月廿日

一先日松殿人夫下向御書共到來當時公家私宅合廿人爲還幸棟別被懸之

自公家中二百疋分作內裏方了事盡たる風情也云々來廿八九日比可有

還幸歎云々但四足棟門御殿以下作事不成辨云々

十二月十日

一○中還幸八日曉如形有之云々七日夜也

略十二日自夜前

一還幸去月末可有之處犬產事在之同當月二日生犬五疋各死了希有事也

仍五ヶ日穢也七日還幸了中納言說也

〔大乘院寺社雜事記〕七十

文明十二年正月四日

文明十一年十二月七日

八三五

還幸ノ爲
メ棟別錢
チ公家私
宅ニ課ス

文明十一年十二月七日

八三六

一略○中 舊冬七日夜還幸土御門殿、如形被加修理計也、每事有名無實之儀云云、應仁元年ヨリ行宮、至去年經十三ヶ年而還幸、

十二日、

一日野政光敍四位、今度行宮賞云々、

〔雅久宿禰記〕

文明十一年八月四日、早旦菅大臣飭師并塗師一人參之、就還

幸之儀、御躰事可仰付之、以前來菅大臣兄也、以前儀更不存由申之、相違于案

者也、鳳形計トハ不申、於路次只内裏方可被仰□如申□□也、

五日、己霽、後小雨時々（降之）○中鳳形前後御躰失却事治定云々、

七日、卯霽、鳳形并御輿御裝束悉皆、應仁度於彼御躰失却由、氏益書進一通、可

令見白川民部卿以下之故也、

就鳳形失却事、御輿固等申狀一通在之、爲令驗于此方無越度召寄之了、亂始

於行事所失却勿論也、

十二日、丙霽、盛俊遣上所々、御輿被置一條殿（花御所東島山番屋敷、御離退去後令乞請給、被侵雨露

間、來十五日可奉入土御門殿、又可置于官家歟由、傳奏以使者被申之、

十三日、酉霽、晝小雨則止、被預申一條殿鳳輿被侵雨露之間、被尋申一條殿、來

鳳形ノ躰失却

御輿固ノ申狀

一條家第

一條冬良ヲシテ鳳輿ヲ土御

門殿ニ返サシム

十五日、可被奉入舊内裏土御門殿、又可奉入官家歟由、昨日傳奏勸修寺以盛

俊便宜被申送之間、今日折帑一通遣之了、案文在、御輿文書進職業了、（全書）

十四日、戌陰、朝雨一二粒、職業來、昨日折帑付傳奏之處、官家狹少由承之間、其

分歟之旨覺悟處、又可奉入官庭由奉之、一事多樣歟云々、又遣折帑官庭狹少

事者、一昨日盛俊以口才申之、更於此方不存之、非一事多樣旨申遣了、

〔京都帝國大學所藏文書〕

駕輿丁文書（王生文書等第十卷）

御輿固等謹言上、

たつね下され候御輿鳳形等御玄やうそくの事、大嘗會官のちやうよりく

わんかうの時、すなはち御からひつに入申候て、いつものことくわたし申

候、行事官御うけとり候、そのうち□□れの行事御さなく候間、かさり申た

る事なく候、亂のはしめむるまことのさまへ御こし入申時、ほうきやうな

と御玄やうそくの事、さたにをよはす候、仍言上如□（印）

文明十一年七月廿四日

〔皇年代略記〕

後土御門院 文明十一年十二月七日、還幸土御門皇居、（刷儀式）

本朝皇胤紹運錄同シ

八三七

文明十一年十二月七日

八三八

〔如是院年代記〕

御後土

文明十一己亥十二月七日、夜半舊内裏仁御還幸、

〔武家年代記〕

上

（後土御門院）

文明十一己亥十二月七日、自日野侍從政光之亭、還幸本

内裏土御門殿、

〔華頂要略〕

百三十三上

帝王編年紀略

文明十一年十二月七日、還幸土

御門殿本皇居、亂中爲敵陳爲修理還幸遲々、行幸供奉人等刷儀式、但陳中步

儀也、

〔梅花無盡藏〕

一

恭以孟春初吉、乘輿出柳營、再幸舊宸、黃門郎四條閣下作

詩拜其慶、奉同厥韻、第一、二春澤梅心、第三、四梅某漆桶（梅下用之）、以爲逸興、昔淮南幕

府之戲場、而杜牧賦前二句、張祐續後二句、以爲一篇也、蒙亭先生所謂聯句

體歟、蓋舉其例、春澤命梅某漆桶書焉、是時四條閣下自京飯濃、話紫宸還幸

之盛事、

〔晴富宿禰記〕

文明十一年七月十九日裏文書

海内止戈斯日新、樂花禮葉莫如春、乘輿再見紫宸幸、賀有黃門白髮臣、梅心、漆桶、

一昨日柏藏主方へ御書候時分、等持寺□□

出不能尊報候、恐存候、誠近邊回

祿驚目候、禁裏様未落居之御事候、言語道斷候、但此時御修理成候て、還幸可

集九四條
隆量還幸
ヲ賀スル
詩ニ次韻
ス

隆量美濃
ニ赴キ集
九ニ會ス

聖松書狀

一定候歟、然者彌天下太平珍重候、就中小法師御料人之御事、愚僧始終事斟酌千万之儀、以前再三申越候、乍去此□□候、可任尊意候、日之事、可致精撰候、今方之御□□可然、日比尤可然候、唯稱院殿以來、彌聖松貧窮逐次增長、高察之外候間、縱領掌候共、甲斐々々敷合力者不可叶候、定落著可失面目と存計候事、定候者、嗟峨壽寧院ニ老漢子孫一人所望候へ者、就之御掛錫之事、尊命爲如何哉、（可脱）旁猶被面展候、恐々敬白、

星夕前一日

聖松（花押）

（包紙）壬生殿 御中

慈徳軒聖松

○北小路行宮火ク、車駕聖壽寺及ビ日野政資第二行幸セラル、コト、七月二日ノ條ニ見ユ、

八日、（幕府）幕府、中村六良ノ勘料ヲ東寺領田地ニ課スルヲ止ム、

〔東寺百合文書〕

（西寺）○ヶ八之二十

（西寺）下司代勘料事

東寺雜掌申、寺領田地勘料事、背總在廳下知被相懸云々、太不可然、早可被停止催促之由候也、仍執達如件、

文明十一年十二月八日

八三九

文明十一年十二月八日

文明十一年十二月八日

貞秀判
數秀判

八四〇

中村六良殿

周防一宮玉祖社、神用米在所、大内政弘二注進ス、

〔古文書雜錄〕○防長之部

周防國佐波郡大前村

一宮玉祖社御神用米國衛沙在所注文事

合

大前村

一大前村貳拾九町八段六十步

分米五拾九石六斗六升七合内

拾八石自國衛所方人定除分

一字野令 拾壹町四段 分米拾八石五斗三升四合

一湯田保 壹町參段 分米貳石六斗

一黑河保 七段小 分米壹石四斗六升七合

一千代丸 壹町貳石五斗六升七合

宇野令

湯田保

黑河保

千代丸

下松出作

富海保

西仁井令

佐波令

平井

一下松出作 壹町貳石

一富海保 參段 分米六斗

一西仁井令 六町壹段 分米貳石二斗

一佐波令 壹町八反 分米參石六斗

一平井 貳町參反 分米四石六斗三升三合

已上百七石九斗六升八合、當知行分、

文明十一年十二月八日

社官中謹言上

裏書也
此狀之旨令存知了、

同日

左京大夫多々良朝臣(花押)

九日、庚申春日祭、

〔京都御所東山御文庫記錄〕○山城

まつりよて御神事、

十日、御神事夜よ入てとけらるゝ、

十二日、春日まつり此さんしやうまいる、

文明十一年十二月九日

御湯殿上日記

十二月九日、春日

散狀

八四一

上卿勸修
寺經茂

〔晴富宿禰記〕十二月八日、己晴、略○中明日春日祭、盛俊直進發、

十一日、壬晴、盛俊自春日還向、祭上卿勸修寺中納言經茂、外記中原康純、史安倍盛俊也、自社家如亂中、近年少訪沙汰之云々、

十二日、癸雨降、盛俊盃盤申沙汰之、略○中春日祭御□賀酒也、

〔大乘院寺社雜事記〕一七十 十二月十日、

一○中夜前春日祭始行、上卿勸修寺權中納言經茂卿下向、

石清水八幡宮ニ馬ヲ寄進セラル、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十一 御湯殿上日記 十二月九日、略○中

御むま八日さへりる、

十日、略○中八日さへり田中御れいよ御さちもちてまいる、御たいめんあま、

御不豫、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十一 御湯殿上日記 十二月九日、かう

しんよて久しく御まつまりなし、夜ふけて御むしれけおこらせをいしまして、御くまりなごりる、

十三日、甲河野通直、二神四郎左衛門尉ニ、伊豫粟井安岡名等ノ地ヲ安堵

田中生清
御禮ニ祇

御虫氣

友兼名宮
崎分

セシム、

〔二神文書〕自河野家感狀并諸書附一

粟井安岡名同友兼名宮崎分等之事所宛行也、任當知行之旨、不可有相違狀如件、

文明十一年十二月十三日

刑部大輔(河野通直)花押

二神四郎左衛門尉殿

十四日、乙禁中御煤拂、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十一 御湯殿上日記 十二月十四日、御

まゝとたろごあり、御さう月ごし、一此おとくまいる、くまんしゆしれ新

もんしゆ御万いり、御さいめんあり、御さう月ごとりる、(京殿)らんえまさつの

御さうし、さんし十帖えんしやうをらるゝ、ふつさいしよも御さいめんあ

り、大つう院よも御さいめん、御ちや五十まいる、(善空)二そんるんまをり三りう

つうとさるゝ、

幕府、淀河諸關ニ命ジテ、山城離宮八幡宮ノ荏胡麻以下運上船ニ、課役スルコトヲ止ム、

大通院茶
ヲ獻ズ善
二尊院善
賜フ折ヲ

景菴檀紙
等ヲ獻ズ

〔離宮八幡宮文書〕○山城

八幡宮大山崎神人等申、荏胡麻以下運上船事、諸關渡無其煩之處、於河上關々、寄事於左右成違亂云々、太不可然、早任先規、無相違可勘過之由、被仰出候也、仍執達如件、

文明十一年十二月十四日

英基(花押)
元連(花押)

河上

諸關務中

十七日、辰戌皇子、仁勝和歌御會ヲ行ハセラル、

〔京都御所東山御文庫記録〕○甲二山城十一 御湯殿上日記 十二月十七日、宮

の御うさけ御くさい、御どう人なうのし、ひやう部卿、新宰相中將、をう納言、この月のへちして御さるなごみなまいらる、御所さまもなし、万いられてひろう、御さうさうさねらる、なうとしへなし、万いらされて、御ひし、と又三こん万いる、めてさし、そのちまめれ御さう月、つねれ御所よて万いる、又へち□□くろ戸ならします、三こん万いる、とりちうへなど

御製ヲ賜

御ひし、とあり、めてさし、

二十日、未辛大内政弘、僧圓意二、長門正法寺別當職竝ニ寺領ヲ安堵セシム、

〔長防風土記〕二百七十厚狹郡八山吉田宰判野井村

長門國松岳山正法寺別當職事、(任職)權律師長圓申請之旨、去寛正六年十一月十八日、令補治部卿圓意畢者、早守先例、領掌不可有相違之狀如件、彼當日裁許狀事、依有右筆之誤、重而書改者也矣、

文明十一年十二月廿日

左京大夫多々良朝臣 御判

裁許狀ヲ書改ム

長門國厚狹郡松嶽山正法寺、任數通公驗并去明德三年五月廿四日、(大内實也)香積寺殿裁訴、應永十八年卯月廿九日、(大内實也)國清寺殿證判等之旨、云寺家、云寺領、執務不可有相違之狀如件、

文明十一年十二月廿日

左京大夫多々良朝臣 在判

當寺別當

二十三日、戌甲義政、參内歳暮ヲ賀ス、

〔京都御所東山御文庫記録〕○甲二山城十一 御湯殿上日記 十二月廿三日、々

文明十一年十二月二十日、二十三日

文明十一年十二月二十三日

八四六

ふの御さんふる八と花、御ちよくなるなりし、いつもの三こんのちり御ち
らけの物一ものなとよて七こん万いる、四こんめふしみ殿御万いり
あるへきよし申されて御去こう、五こんふしみ殿御しやく、七こんよく
御れ御しやく、内々れおとこふちもめして、五こんの御しやくよりふ、い
つもれしゆ、くむんしゆうし、日のゝま、うとわりなり、御きけんともよ
く御ものりふりともよて、御ひし、とあり、めてふし、又御ちよくる
よても、なりとしはしめさる御おと、て、御さう月万いらせられて、夜入
て御さいまゆつあり、とく大寺大納言ちよくる申、御さるめんあり、

〔親長卿記〕 十 十二月廿三日、晴、今日御參内、禮末御長橋局爲直廬云々、依
故障不參會、

○尼宮、諸門跡、公卿、寺社等、歳暮參賀ノコト、便宜左ニ合致ス、

〔京都御所東山御文庫記録〕

甲二十一 御湯殿上日記

十二月廿六日、あ

んせん寺殿、つうけんし殿御ふた所、大しやうし殿御万いり、御さう月万い
る、くむちやうまやうれん院殿、下すのふよてさいまつれ御を申さるゝ、
八日、(生清)田中、ちをん寺御さいめんあり、めうせんし御を申さるゝ、御さ

る一う、みつらん一をり万いらるゝ、とく大し御を并よしこう、御さいめん
あり、

廿七日、二てうれ大(持通)かう御万いり、御さいめんあり、藤(實通)さいをんし下まうさ
よて御万いり、

廿八日、略中めうやう院れ宮れ御方、さいまつれ御れぬ御万いり、御さう
月万いる、

廿九日、さいまつの御れぬとも申さるゝ、
〔後法興院政家記〕 四 十二月廿七日、戌晴、略中次竹園、次申入禁裏、未拜賀
上小直衣間、不及堂上也、

二十四日、乙亥東福寺塔火ク、
〔大乘院日記目錄〕 三 十二月卅日、去廿四日東福寺塔一基、塔中二所焼失
了、

〔大乘院寺社雜事記〕 二七 十 文明十二年正月廿三日、雨下、
一略 中 舊冬廿四日、東福寺塔一基、塔中二所焼失了、

廿五日、

文明十一年十二月二十四日

八四七

文明十一年十二月二十五日 二十六日

八四八

一隨心院殿より、舊冬東福寺塔、五社宮塔中一炎上了、

二十五日、丙筑前善導寺ヲ勅願寺ト爲ス、

〔善導寺文書〕

前 ○筑

當寺事爲御祈願所、可被致寶祚長久、國家泰平精誠之由、天氣所候也、仍執達如件、

十二月廿五日

左少辨(花押)

善導寺問譽上人御房

〔晴富宿禰記〕

文明十二年二月廿一日、壬晴、舊冬攝州慈雲院勅願寺勅裁被

淨教寺立
譽攝津願
雲院勅願
寺勅裁願
善導寺ニ
書改メテ
コトナシ
フ

下之、同時三个寺望申、雖然此一寺計勅許之處、筑前善導寺僧自去年上洛、今可罷下、輒不可有便宜、以慈雲院勅裁申改善導寺可下遣由、淨教寺懇望之間、申遣甘露寺、今日書改、仍自淨教寺被送使者被悅謝之、仍香衣事每度儀候哉、之由遣狀、去年四月、甘露寺書狀云、淨土宗被成勅願寺繪旨、何上御房と候へ、自著香衣候、不及別勅許云々、以此儀返答了、

二十六日、丑幕府、山城勸修寺ニ加賀郡家莊代官職ヲ直務セシム、

〔勸修寺文書〕

三 ○山城

加賀國郡家庄代官職事、早退ニ松并安富競望、任例爲直務之地、可被全領知之由所被仰下也、仍執達如件、

文明十一年十二月廿六日

美濃守(花押)
下野守(花押)

勸修寺門跡雜掌

二十七日、寅公卿等、幕府ニ參賀ス、

〔後法興院政家記〕

四 十二月廿七日、寅晴、爲歲末禮、參武家兩所、

〔親長卿記〕

十 十二月廿七日、晴、朝間參賀室町殿事、依不具不參、同心之人

々在之、及晚人々令同道元長參賀、

幕府、成就院願阿ノ京都清水寺再建勸進ノ爲メ、九州ニ下ルニ依リ、薩摩守護島津武久ヲシテ、其分國大隅、薩摩及ビ日向ニ助緣セシム、

〔黑岡帶刀所藏文書〕

清水寺建立事、爲勸願阿十令下向九州、可然様可被相觸、分國大隅、薩摩、日向三ヶ國之由所被仰下也、仍執達如件、

文明十一年十二月廿七日

下野(花押)

文明十一年十二月二十七日

八四九

近衛政家
甘露寺親
長裝束不
具依リ
參賀セズ

十斛

文明十一年十二月二十七日

島津陸奥守殿

○武久陸奥守ニ任ゼラル、コト、本月三十日ノ條ニ、願阿、清水寺ヲ再建セントシテ、諸國ニ募緣スルコト、三月是月ノ條ニ見ユ、

大内政弘、僧勝光ニ、長門安養寺住持職ヲ安堵セシム、

〔古證文〕七

長門國豐東郡保木郷安養寺住持職事、任先例、云寺家、云寺領、勝光僧執務、不可有相違之狀如件、

文明十一年十二月廿七日

左京大夫判

是ヨリ先、本郷國泰、同政泰ノ所領、若狹本郷ノ年貢半分ヲ押領ス、仍リテ、政泰、之ヲ幕府ニ訴フ、是日、義尙、國泰ヲシテ、之ヲ政泰ニ還付セシム、

〔古證文〕二

義尙御判計

政泰ノ陳
狀、國泰總郷
庶子割分

本郷與三郎政泰、同名國泰、相論若狹國本郷年貢事、政泰如申者、守祖父永智讓狀之旨、代々知行無相違之處、國泰去年始而總郷之下地同庶子割分女

女寺分領各半
庶子割分
國泰ノ讓
分、年貢半
ハレタル
ハ年貢半
分并立
十人ノ
歸人ノ
ミ

子分寺庵領等少々、各半分押領云々、國泰如陳狀者、帶年貢半分讓狀之間、件庶子割分以下半分宛進退云々、糺決之處、國泰於出帶之證文者、當郷年貢半分并立歸人夫廿五人ノ永智讓與分明也、然者至自餘諸公事物割分之地等者、政泰之總領云進止之地、可領知之段勿論也、次國泰亡父安親時、對政泰父有不儀之子細者、一圓可知行之通出狀柄焉也、所詮無理押妨之上者、任彼雖可加成敗、以寬宥之儀、號爲中分下地并每年定段錢等、有子細而爲今度之過、令與奪歟、怠、所返付政泰也者、早可令領掌之狀如件、

文明十一年十二月廿七日

二十九日、庚辰延曆寺鷄頭院隆舜ニ、感應寺別當職ヲ安堵セシム、

〔歷代殘闕日記〕

八十八 元長卿記
勅裁案

感應寺別當職事、云譜代、云當知行、不可有相違、可被令領掌之由、天氣如此、悉之以狀、

文明十一年十二月廿九日

左少辨判

鷄頭院隆舜僧都御房

○隆舜ヲ感應寺別當ニ補スルコト、十年十二月二十九日ノ條ニ見ユ、

文明十一年十二月二十九日

八五一

幕府、山城淨華院ニ命ジテ、京都正親町ノ地ヲ甘露寺親長ニ還付セシム、

〔親長卿記〕^十 十二月廿九日、晴、予居住敷地^{正親町事}、自淨華院^{去年}掠申給了、當年

歎申入之處、今日被返付了、自愛了、

東西拾參丈四尺

南北拾四丈五尺也、

及晩室町殿、宰相中將殿等參御禮、敷地御禮也、進上太刀、

三十日、^辛年越ノ御祝、義政夫妻等、酒饌ヲ獻ズ、

〔京都御所東山御文庫記錄〕^{甲二十} 御湯殿上日記 十二月卅日、むろ

まち殿よりいつものひふつ十五いろまいる、御たいより五いろまいる、御

としこしの御さか月まいる、御きやうたぬの御くそくどもの御つゝみか

みなとかへらるゝ、^略宮の御方へ宰相中將殿より、御木ちやう御たまて

んそう御つかるにてまいる、いつものことく御所へもわけまいらせらる

ゝ、この御所より宰相中將とのへ御こきいた、をなし御つかるにてまいら

せらるゝ、三ほう院へもをなくまいらせらるゝ、御しうちやくのよし御

申ないゝの人たち御れる申さるゝ、御[□]にて御たいめんあり、女たち

親長敷地
還付ノ謝
禮トシテ
義政父子
進ム太刀

義政夫妻
美物ヲ獻
ズ御鏡臺
具足ノ包紙

義尚若宮
ズニ物ヲ獻
ズ若宮義尚

若宮義尚
ヲ賜フ板

諸所ニ物
ヲ頒チ給

の御くはりともせらるゝ、十一日にあるへきをここたちの御くはりも、せ
うゝせらるゝ、

薩摩守護修理進島津武久ヲ陸奥守ニ任ズ、

〔島津文書〕^{〇ニ} 常陸

上卿中御門中納言

文明十一年十二月卅日 宣旨

修理進藤原武久

宜任陸奥守

藏人左少辨藤原元長奉^〇コノ宣旨ニハ義政ノ袖判ア

〔薩藩舊記〕^{前集二十八} 忠昌公御譜中

就受領之儀、太刀一腰、國光、鷺眼萬疋到來訖、尤神妙、仍太刀一振遣之候也、

〔文政〕^{花押} 九月廿三日

島津陸奥守とのへ

謹上 島津陸奥守とのへ

〔薩摩鹿兒島津家譜〕^坤 十一代忠昌^〇 十二月晦日、陸奥守に任せらる、十二

文明十一年十二月三十日

武久ノ受
領ノ謝恩ニ
對シ義政
太刀ヲ興

文明十一年十二月三十日

八五四

年庚子九月二十三日、幕府、太刀一腰を賜ふ、初め忠昌太刀一腰、鳥目萬匹を
獻して、受領の恩を謝す、故にこの賜ものあり、

〔島津國史〕

十二
國室公

冬十二月晦日

宣旨、公自修理進任陸奥守、據國室
公舊譜

十二年庚子、略中秋九月二十三日、幕府、賜公教書曰、太刀一腰、鷺眼萬匹並至、

嘉乃厚意、因賜太刀一振、同上、公獻幕府太刀鷺眼、以謝
受領之恩、於是幕府以此酬答、

○幕府、武久ヲ既ニ陸奥守トシテ、清水寺再建助縁ノ奉書ヲ與フルコ

ト、本月二十七日ノ條ニ見ユ、又大藤原隆信ヲ河内守ニ任ゼラル、コ

ト、便宜左ニ合敘ス、

〔比牟禮八幡神社文書〕

江○近

上卿日野中納言

文明十一年十二月十一日 宣旨

大藤原隆信

宜任藤兵衛少尉

河内守

藏人右少辨（折城）藤原俊名 奉

伊勢貞宗、義政ニ歳暮ノ美物ヲ進ズ、

〔長井文書〕

狭○若

納申御美物事

合

鶴 一

鯛 拾

鹽引 貳

貝炮 一折

振海鼠 一桶

已上

右所納申如件、

文明十一年十二月卅日

伊勢守代 嵯川新右衛門尉

親元（花押）

是月、伊勢大神宮主典等、宮司大中臣則長ニ依リテ、其爵位ヲ進メラレ
ンコトヲ請フ、

〔大宮司家古文書〕

伊勢○勢

文明十一年十二月是月

八五五

文明十一年十二月是月

八五六

太神宮司解

〔申進申文事〕

言上、可早任先例開榮爵代始賞內司中分新敍輩姓名事、

副進

交名注文

右謹考故實、代始賞時獻注進、被恩敍者、明時之善政、古今通規也、二宮正權禰
宜等榮爵時、司中分同被恩敍條定例也、然者大司分副冠二人、權司小司各一
人宛也、爰權司少司近代雖爲未補、大司年中四度御祭、每月三旬番文神事、并
離宮院連綿神事神役以下、悉以一身令參勤勤行之間、皆以被恩敍之條、古今
通法不可勝計、然早經次第上奏、任先例副冠四人分被宣下之、彌專天下泰平、
國家長久御祈禱矣、仍言上如件、以解、

文明十一年十二月日

權主典

主典

大司正五位下大中臣朝臣

大永六九月日、以此案等注進之、

幕府、梵桂雜ヲ四度相國寺住持ト爲ス、

〔補菴京華後集〕

庚子元旦、文明十二年

伏承、鹿苑老師己亥歲朞月、俄奉大檀越嚴命重任本寺、明年元旦祝聖上堂、
有示衆華偈、謹依尊韻、

左右街中楊柳春、黃鸝三請轉三輪、東京相國青雲上、眞福惠僧傾帝宸、

○梵桂ヲ三度相國寺住持ト爲スコト、十年十一月十五日ノ條ニ見ユ、

文明十一年十二月是月

八五七

是冬、筑前守護代陶弘護、其職ヲ弟右田弘詮ニ讓ル、

〔陶弘護肖像贊〕防○周 泉福院殿前尾州大守建忠孝勳大禪定門肖像

己亥冬、辭筑前事、讓以弟弘詮、略上

○弘護、其職ヲ辭セントシ、大内政弘之ヲ諭止スルコト、十年十月二十日ノ條ニ見ユ、

是歲、正四位下勸解由小路在通ヲ從三位ニ敍ス、

〔公卿補任〕四十 非參議從三位賀在通 勸解由小路 月日敍、父故從二位在盛卿、母

義政父子、山城十念寺ニ奉加ス、

〔十念寺文書〕城○山

十念寺御奉伽帳

慈照院殿

從一位(花押) 三百貫文 文明十一年 亥巳年

常徳院殿 征夷大將軍(花押)

五百貫文 文明十一年 亥巳年

幕府、中御門宣胤ニ、右京職ヲ安堵セシム、

〔宣胤卿記〕 文明十二年正月四日、乙天晴、略○中 太刀一腰百疋、遣飯尾加賀守

清房、舊冬右京職安堵御奉書申沙汰禮也、太刀ハ受領禮也、

陶弘護、筑前國宮崎宮ノ鐘ヲ鑄ル、

〔陶弘護肖像贊〕防○周 泉福院殿前尾州大守建忠孝勳大禪定門肖像

己亥、鑄洪鐘於宮崎宮、以勒其功、略上

文明十一年是歲

八五九

宣胤飯尾
清房ニ安
堵奉書ノ
禮トシテ
太刀及ビ
金ヲ贈ル

大內政弘、宗貞國等、各使ヲ朝鮮ニ遣ス、

〔成宗大王實錄〕

一百

己未^(文明十一年)、大明成化十年^(十五年)、

四月朔丁亥^(十七日)、

日本國大內左京

大內政弘
佛像ヲ遣
ル

宗貞國

政弘長門
安國寺ニ
收ムベキ
大藏經ヲ
求ム

佛像ヲ贈
ルハ財貨
ナルメシ
ガ爲ナリ

兆尹中大夫政弘遣僧瑞興來獻佛像及土宜對馬州太守宗貞國特遣平國忠來獻土宜政弘書契曰先父棄世既逾十餘歲以僕無狀叨蒙家業宜通信於大邦修同系之好然屬多故騷擾罔措今寢將復靖寧是以乃命專价少旌企傾之私僕所管部內長州安國禪寺曾安置毗盧大藏乃貴國所賜也頃寺罹于鬱攸經亦燼灰矣寺僧等欲重得一藏於貴國特蒙薄助別建經院日日轉經且爲貴國祈永祚若得允許何賜加焉^(二十日)丁未金壽童啓曰大內殿所送佛像今若受之則彼人安知殿下之不崇信乎臣恐倭人之獻佛求貨者相繼踵至而弊將難救矣上謂左右曰正如壽童之言然不受而却之生釁必矣但輕其直以與之仍諭以不崇信之意何如僉曰上教允當^(二十六日)壬子傳于戶曹曰大內殿所進佛像回賜正布伍匹

〔成宗大王實錄〕

一百

五月朔丙辰^(廿日)、

壬戌幸景福宮御慶會樓下設功臣仲朔

宴ヲ設ケ
瑞興國忠
等ヲ饗ス
瑞興等ノ
爵ヲ進ム

宴接見大內殿使送僧瑞興及對馬島主特送平國忠等酒半命瑞興等進爵傳曰大內殿向我國鄭重予深嘉之聞京都兵亂已息故今遣通信使海路汝其護

瑞興國忠
等ニ物ヲ
贈ル

政弘へノ
答書及ビ
賜物

大藏經一
部
貞國へノ
答書及ビ
賜物

送瑞興對曰伏聞聖教當報吾主又命平國忠進爵傳曰汝島主報云日本京都兵息故已遣通信使可厚待護送國忠對曰謹當一一傳告仍賜物有差^(二十二日)大內殿政弘使送僧瑞興宗貞國特送平國忠等辭別賜豹皮各一張油席各一張仍命都承旨洪貴達語之曰久留旅館良苦爾等詳言本國事予用嘉之特賜此物瑞興等頓首謝曰濫蒙上德感銘于骨今又受賜感懷無他且通信使想必已到對馬島我等猶可及見當保護送之兵亂已息路次必無虞又那衍近因兵亂往在京都久不返焉今而得還比來托稱那衍使送而來者必他人也非那衍所送之人故請於禮曹傳寫其所賣來書契以往鞠之仍頓首不已其答政弘書曰懸企間今承惠書備諳動履康勝遙慰遙慰所獻禮物謹啓收了將土宜白苧布一十匹黑麻布一十匹人參三十五斤豹皮二張虎皮二張藍斜皮一十張邊兒寢席一十五張清密一十五斗松子一百斤正布二百匹綿布二百匹并給賜大藏經一部就付回使惟照領其答宗貞國書曰今承書札就審體履安穩欣慰所獻禮物謹啓收了將土宜正布一十匹綿布五匹并給賜黑麻布三匹白綿布三匹採花席三張虎皮二張付回使惟領留

〔成宗大王實錄〕

一百

己未^(文明十一年)、大明成化十年^(十五年)、

二月朔戊子^(十三日)、

庚子日本國筑前州冷

平信重

伊集院熙久

泉津平左衛門尉信重對馬州太守宗貞國遣人來獻土宜

〔成宗大王實錄〕

一百

三月朔丁巳

丁卯

日本國薩摩州伊集院寓鎮隅州太守藤熙久對馬州太守宗貞國遣人來獻土宜

源勝

乙酉日本國肥前州下松浦五島宇久守源勝對馬州太守宗貞國宗出羽守貞秀遣人來獻土宜倭護軍皮古波知等二人來朝

宗貞秀

島津國久

〔成宗大王實錄〕

一百

四月朔丁亥

己亥

日本國薩摩州市來太守國久肥前州九沙島主源次郎永氏對馬州太守宗貞國宗彥七貞秀遣人來獻土宜

源永氏

島津持久

〔成宗大王實錄〕

一百

五月朔丙辰

日本國薩摩州島津藤原持久對馬州太守宗貞國古河山城守家次護軍井可文助藤原職家遣人來獻土宜辛酉日本國對馬州太守宗貞國出羽守宗貞秀佐須那代官石見守宗國吉上津郡追浦伯耆守宗茂次國分寺住持僧崇睦遣人來獻土宜

古河家次

宗職家

乙亥日本國一岐州上松浦鹽津留松林院源實次肥前州上松浦鴨打源永寶泉寺住持祐源位對馬州太守宗貞國越中守宗盛弘橘氏立石右京亮國長護軍井可文助藤原職家遣人來獻土宜

宗國吉

宗茂次

國分寺崇睦

鹽津留實次

鴨打永

宗盛弘

立石國長

千葉元胤志佐義波多島納源豐久

日本國肥前州小城千葉介元胤松浦志佐一岐太守源義肥後州八代太守教信上松浦波多島源納平戶寓鎮肥州太守源豐久對馬州太守

眞弓武

志佐源次郎

宗茂勝

觀音寺宗殊

濫川教直

見島貞成

宗貞國等遣人來獻土宜乙酉日本國肥前州上松浦波多島源納松浦志佐一岐太守源義對馬州太守宗貞國遣人來獻土宜

〔成宗大王實錄〕

一百

六月朔丙戌

甲辰

日本國一岐州守護代官眞弓兵部少輔源武肥前州上松浦佐志源次郎播磨州日向大守盛久對馬州太守宗貞國兵部少輔宗茂勝遣人來獻土宜

戊申

日本國西海道肥後州八代太守教信

一岐州上松浦鹽津留觀音寺看主宗殊對馬州太守宗貞國國分寺住持僧崇睦遣人來獻土宜

癸丑日本國關西路九州都元帥源教直長門州三島尉貞成對馬州太守宗貞國遣人來獻土宜

對馬州太守宗貞國遣人來獻土宜

〔成宗大王實錄〕

一百

七月朔乙卯

戊辰

日本國對馬州太守宗貞國筑前州宗像郡知守氏鄉一岐州上松浦鹽津留助次郎源經肥前州上松浦佐志源次郎下松浦五島宇久守源勝松浦志佐一岐太守源義上松浦那久野能登守賴永安藝州小助川美作守平持平等遣人來獻土宜

〔成宗大王實錄〕

一百

八月朔甲申

戊子

日本國對馬州太守宗貞國護軍井可文助藤原宗職家等遣人來獻土宜

壬寅日本國一岐州守護代官眞弓兵部少輔源武對馬州太守宗貞國越中守宗盛弘遣人來獻土宜

乙巳日本國對馬

宗像氏鄉

鹽津留經

那久野賴

永平

小早川持

宗盛弘

州太守宗貞國遣人來獻土宜

〔成宗大王實錄〕

一百

己亥十年大明成化十五年正月朔戊午日本國日向大隅薩摩

三州太守立久薩州伊集院寓鎮隅州太守藤熙久遣人來獻土宜

〔成宗大王實錄〕

一百

二月朔戊子(七日)甲午日本國關西路筑豐肥三州總太守

太宰府都督司馬少卿藤原政尙遣人來獻土宜

〔成宗大王實錄〕

一百

三月朔丁巳(十三日)己巳倭護軍助國次等五人來朝

〔成宗大王實錄〕

一百

五月朔丙辰(六日)辛酉倭護軍早田彥八等四人來獻土宜

壬申(十七日)日本國三河守源弘安遣人來獻土宜

〔成宗大王實錄〕

一百

七月朔乙卯日本國肥前州田平寓鎮彈正少弼弘一

岐州代官牧山十郎源正對馬州守護代官宗助六盛俊宗大膳國幸遣人來獻

土宜(十九日)癸酉日本國肥前州田平寓鎮彈正少弼弘豐州太守大友八郎師能肥前

州下松浦丹後太守源盛遣人來獻土宜

〔成宗大王實錄〕

一百

八月朔甲申(九日)壬辰日本國豐州太守大友親繁肥前州

下松浦三栗野太守源滿一岐州上松浦鹽津留助次郎源經對馬州關處鎮守

秦盛幸等遣人來獻土宜(十八日)壬子日本國關西路筑前州左衛門源國吉日向大隅

島津立久

少貳政尙

早田彥八

源弘安

田平弘

牧山正

宗盛俊

宗國幸

大友師能

松浦盛

大友親繁

三栗野滿

秦盛幸

源吉

同德

盛久

源繁

源教直

遣人來獻土宜

滿城院良

俊

宗家茂

宗茂國

薩摩三州守護代官忠次肥前州山城太守源吉西海道肥前州太守源德對島

州國分寺住持崇睦遣人來獻土宜

〔成宗大王實錄〕

一百

九月朔甲寅(廿一日)日本國幡摩州日向太守盛久鳴島

主源繁對馬州越中守宗盛弘遣人來獻土宜(廿三日)丙寅日本國關西路九州都元帥

源教直遣人來獻土宜

〔成宗大王實錄〕(廿一日) 十月朔癸未倭司正四郎三郎來獻土宜(廿一日) 癸卯日本國

肥前州上松浦鴨打源永筑前太宰滿城院住持良俊遣人來獻土宜

〔成宗大王實錄〕

一百

閏十月朔癸丑(十六日) 戊辰日本國對馬州太守宗貞國遣人

來獻土宜倭僉知平松而羅等四人來朝(二十日) 壬申日本國肥前州下松浦五島宇久

守源勝松浦志佐一岐太守源義筑前州博多城冷泉津藤氏母對馬州太守宗

貞國豐崎守宗盛俊遣人來獻土宜倭護軍宗家茂等三人來朝

〔成宗大王實錄〕(二十一日) 十一月朔壬申(二十一日) 壬寅日本國對馬州太守宗貞國對馬

州宗茂國遣人來獻土宜

〔成宗大王實錄〕(二十二日) 十二月朔壬子(十五日) 丙寅日本國日向大隅薩摩三州太守

立久薩州伊集院寓鎮隅州太守藤熙久對馬州太守宗貞國遣人來獻土宜(二十

伊勢政親

琉球王尙
徳ノ書

博多商船
ニ托シテ
漂流民ヲ
送還ス
大藏經等
ヲ求ム

胡椒鐵子
等ヲ贈ル

琉球へノ
答書

漂流人ノ
送還ヲ謝
ス大藏經等
ヲ贈ル

漂流人球
諸島ノ風
俗ヲ語ル

閩伊島ノ
風俗

文明十一年是歲

申日本國西海路筑前州博多城冷泉津藤氏母遣人來獻土宜(二十三日)甲戌日本國王
懷守納政所伊勢守政親對馬州守護代官宗助六盛俊遣人來獻土宜

○琉球使ヲ朝鮮ニ遣スコト便宜左ニ合敘ス

〔成宗大王實錄〕

一百 己十年大明成化十五年六月朔丙戌(二十二日)丁未琉球國王尙德遣
使來聘其書契曰伏以天開地闢惻隱慈愛揚於四海君聖臣賢流風善政播於

八荒近者霑澤而歡忭遠者聞風而仰慕矣成化十四年夏五月貴國庶民漂流
到卑國南隅邊州者七人彼民航海到我邦者三人其餘四員臥疾滯留于時日
本國博多商船著岸船主新四郎左衛門四郎命彼二人護送還貴國三等同慶
懽呼乞歸也彼船主冒風濤險來朝豈無感遇乎然則寡人所望大藏經一部綿
紬木綿若干匹伏獻方產具于別幅無勝惶懼瞻系之至秋熱尙殘保重不宣進
呈胡椒百斤鐵子五十斤鬱金百斤白檀五十斤香五十斤伏望獻芹之誠勿謂
微陋收納是幸(二十六日)辛亥幸景福宮御慶會樓下宴琉球國使臣上官人新時羅等命
禮曹判書李承召傳于上副官人曰爾國王發還漂流人多謝又喜汝等遠涉滄
海無患而來對曰上教至此感戴無他上官以下賜有差

〔成宗大王實錄〕

一百 七月朔乙卯(二十七日)辛巳琉球國王使臣新時羅等十八人辭

其回答書契曰朝鮮國王姓諱奉復琉球國王殿下承書備審示意兼聆使价之
言得悉動履佳勝欣慰欣慰我邦與貴國滄溟遼隔而貴國信使不絕世修聘禮
今者又委還漂流人物感慰悉深然海路險艱未卽報謝孤負厚意慚恨之至所
諭大藏經曾因諸處求去已盡茲未副命非所靳也不腆土物俱在別幅伏惟照
領白細綿紬一十匹白細苧布一十匹黑細麻布一十匹豹皮心虎皮邊獬皮裏
坐子一事雜彩花席五張人參五十斤清蜜十五斗松子三百斤藍斜皮一十張
油紙一十張白摺扇一百把燒酒三十瓶綿布二百匹綿紬一百匹

〔成宗大王實錄〕

一百 己十年大明成化十五年六月朔丙戌(二十日)乙未濟州漂流人金非(裝下同シ)

衣姜茂李正等三人還自琉球國言所歷諸島風俗甚奇異上令弘文館書其言
以啓其言曰俺等(文明九年)丁酉二月初一日與玄世修金得山李清敏梁成突曹貴奉陪
受進上柑子同騎一船開洋向楸子島忽值東風大起西向漂流自初發至第六
日海水澄碧自第七日至八日行一晝夜渾濁如泔第九日又遭西風向南漂流
海水澄碧第十四日望一小島未及泊岸柁折船毀餘人皆溺死裝載盤纏亦皆
滄失俺等三人騎坐一板漂蕩間適有漁舟二隻各有四人騎坐見我輩收載而
去到島岸島名閩伊是麼(其俗謂島爲是麼)人家環島而居周回可二日程島人男女百

文明十一年是歲

八六七

餘名刈草結廬於海濱，將俺等住止，俺等自發濟州，大風激浪過額，水滿舟中，舳不浸者數板，金非衣，李正操瓠挹水去之，姜茂執櫓，餘皆眩暈而臥，不能炊爨，勺飲不入口者凡十四日，至是島人將稻米粥及蒜本來饋，自其夕始饋稻米飯及濁酒乾海魚，魚名皆不知，留七日，移置人家，輪次饋餉，一里饋訖，輒遞送次里，一月後，分置俺等於三里，亦輪次饋餉，凡饋酒食一日三時，一島人容貌與我國同，一其俗穿耳貫以青小珠，垂二三寸許，又貫珠繞項三四匝，垂一尺許，男女同，老者否，一男女皆徒跣無鞋，一男子絞髮屈而疊之，束以苧繩，作髻於項邊，不著網巾，鬚長過臍，或絞而繞髻數匝，婦人髮亦長，立則及跟，短者及膝，不作髻環，統頭上，橫插木梳於鬢，一無釜鼎匙筯盤盂磁瓦器，埽土作鼎，曝日乾之，熏以藁火，炊飯五、六日輒破裂，一專用稻米，雖有粟不喜種，一飯盛以竹筒，搏而爲丸如拳大，無食案，用小木几各置人前，每食時一婦人主笥，分之人一丸，先置木葉於掌中，以飯塊加葉上而食之，其木葉如蓮葉焉，一丸盡又分一丸，以三丸爲度，能食者不計丸數，隨盡隨給，一無鹽醬，以海水和菜作羹，器用瓠子，或剗木爲之，一酒有濁而無清，漬米於水使女嚼而爲糜，釀之於木桶，不用麴蘖，多飲然後微醉，酌用瓢子，凡飲時人持一瓢，或飲或止，隨量而飲，無酬酢之禮，能飲者又添爵焉，其酒

甚淡，釀後三四日便熟，久則酸，不用菟，一肴用乾魚，或聶切鮮魚爲膾，加蒜菜焉，一或漬米擣於步臼，搏而爲餅，如椶大裹椶葉，以藁束之，烹食之，一其居率作一室，無房與戶牖，前面稍軒舉，後面簷垂地，蓋用茅無瓦，外無藩籬，寢用木床，無衾褥，藉用蒲席，所居室前別立樓庫，以貯所收之禾，一俗無冠帶，暑則或用椶葉作笠狀，如我國僧笠，一無麻木綿，亦不養蠶，唯織苧爲布，作衣如直領而無領及襞，積袖短而濶，染用藍青，中裙用白布三幅，統繫於臀，婦人之服亦同，但內著裳而無中裾，裳亦染青，一家有鼠，畜牛雞貓，不食牛雞肉，死則輒埋之，俺等云，牛雞肉可食不可埋，島人唾而晒之，一山多材木，無雜獸，一飛禽惟鳩與黃雀而已，一昆蟲有龜蛇蟾蛙蚊蠅蝙蝠蜂蝶螳螂蜻蜓蜈蚣蚯蚓螢蟹，一有鐵冶而不造耒耜，用小鍤剔田去草以種粟，水田則十二月間用牛踏播種，正月間移秧不鋤草，二月稻方茂，高一尺許，四月大熟，早稻四月畢刈，晚稻五月方畢刈，刈後根荻復秀，其盛愈於初，七、八月收穫，未穫前人皆謹慎，雖言語亦不厲聲，不蹙口爲嘯，或有捲草葉吹之，以杖擬之而禁，收穫後乃吹小管，其聲甚微細，一所穫稻連稽束之，置於樓庫，以竹枚鑿之，舂以步臼，一刈草及禾用鎌，斫用斧，鑿子，又有小刀無弓矢，斧戟，人持小鎗，於起居不舍，一人死則坐置棺中，置於厓下，不埋之以土，若

厓厂廣則并置五六棺，一其土温燠，冬無霜雪，草木不彫，又無水，島人著單衣，二夏則只著一，男女同，一蔬有蒜，茄子真瓜，蹲鴟生薑，茄子莖高三四尺，一種則傳子孫，結實如初，太老則中斫之，又生芽，蘖結實，一木有烏梅桑竹，一果有青橘小栗，橘四時開花，一無燈燭，夜則束竹爲炬以照之，一家無溷廁，遺矢於野，一織布用箴杼，模樣與我國同，其他機械不同，升數蠶細亦與我國同，一掘地作小井，汲水用瓢罌，一舟有柁棹，無櫓，但順風懸帆而已，一其俗無盜賊，道不拾遺，不相詈罵，喧鬪，撫愛孩兒，雖啼哭不加手焉，一俗無會長，不解文字，俺等與彼言語不通，然久處其地，粗解所言，俺等思念鄉土，常常涕泣，其島人拔新稻莖，比舊稻而示之，東向而吹之，其意蓋謂新稻如舊稻而熟當發還也，凡留六朔，至七月晦候南風，島人十三名將俺等齎糧及酒醪，同騎一船，行一晝夜，半至一島，島名所乃是麼，護送者留八九日還本島去，所乃是麼，狹而長，周回可四五日程，其言語飲食衣服居室土風，大槩與閩伊島同，供饋俺等亦同，一婦人穿鼻兩旁，貫小黑木，狀如鷹焉，足脛繞繫小青珠，其廣數寸許，一用稻與粟，粟居稻三分之一，所收禾積於近居閑地，高俱二丈許，同里人聚積于一處，多者或至四五十餘所，一家有鼠，畜牛雞猫狗，屠牛食之，不食雞肉，一山有豕，島人持槍牽狗獵捕之，熏其毛，剖而

所乃島
風習

捕月老麻
伊島ノ風
習

烹之，獵者獨食，雖至親不與，與人則難獲云，一果有柚子小栗橡栗，一菜有蹲鴟，冬瓜薑蒜茄子瓠，一山多材木，或輸載買賣於他島，又有冬栢樹，高數丈，開花，一有薯蕷，其長尺餘，如人身大，兩女子共戴一本，斧斷之，烹而食之，一飛禽有烏鳩，鷓鴣鷓鴣黃雀，一昆蟲有蚊蠅蟾蛙蚰蝨，其俗烹蝸而食之，有巨蚰，長五六尺，其大如椽，有抱兒女見，蟬以兒足加蟬背而拊之，蟬尾大不能掉，餘同閩伊島，俺等凡留五朔，至十二月晦候南風，島人五名將俺等，同騎一小船，行一晝至一島，名捕月老麻，伊是麼，其地平衍無山，皆沙石之地，周回比所乃島稍小，其言語飲食衣服居室土風，大槩與閩伊島同，供饋俺等亦同，一有黍粟，牟麥，無水田，稻米，貿易於所乃島，一種牟麥，當秋月用牛糞以手掬置於田，用鍤起土覆之，二三月方熟刈畢，後治田種之，凡種粟亦於十月間播種，二三月收穫，訖復種之，七八月又收穫，一飛禽有鳩黃雀鷓，一家有鼠，畜牛雞猫，屠牛而食，不食雞肉，一菜有茄子蹲鴟蒜瓠，一男女穿耳貫小青珠，亦串珠掛項，一無材木，構家皆取於所乃島而爲之，又無果木，一有蚊蠅蝸，其俗烹蝸而食之，餘同閩伊島，俺等留一朔，候南風，島人五名將俺等，騎一小船，行一晝至一島，島名捕刺伊是麼，護送人翌日還本島，其地平衍無山，周回可二日程，人家僅四十餘，其言語衣服飲食居室土風，大

捕刺伊島
風習

款尹島ノ
國習

槩與閩伊島同，供饋俺等亦同。一其俗以青珠、繞繫臂及脛，男女同。一飛禽有鳩、黃雀、鷗。一有黍粟、牟麥、無稻。稻米貿易於所乃島。一家有鼠、畜牛、雞、貓、屠牛而食之。不食雞肉。一菜有茄子、蹲鴟、蒜、瓠。一無材木。又無果木。一昆蟲有蚊、蠅、無龜、蛇、蟾、蛙。餘同閩伊島。留一朔，候南風。島人五名將俺等，同駕小船，行一晝至一島。島名款尹。是麼，護送人翌日還本島。其地平衍無山。周回可一日程。其言語飲食衣服亦與閩伊島同。一有黍粟、麩麥、無稻。稻米貿易於所乃島。一飛禽有鳩、黃雀、鷗。一家有鼠、畜牛、雞、貓、屠牛而食之。不食雞肉。一菜有蒜、蹲鴟。一無果木。材木。一昆蟲有蚊、蠅、蝸。其俗烹蝸而食之。餘同閩伊島。留一朔，候南風。島人八名將俺等，同騎一船，行一晝夜半至一島。島名他羅馬。(多良洲也)是麼，平衍無山。周回可一日程。人居五十餘戶。其言語飲食居室土風，大槩與閩伊島同。一有黍粟、麩麥、無稻。一無材木。或取於所乃島。或取於伊羅夫島。又無果木。一其俗用苧布、染藍、搗而為衣。其色如彩段。一飛禽有鳩、黃雀、鷗。一昆蟲家畜與前島同。一菜有蒜、蹲鴟。留一朔，候南風。島人五名將俺等，同騎小船，行一晝至一島。島名伊羅夫。是麼，護送人翌日還本島。周回可二日程。其言語飲食居室土風，大槩與閩伊島同。其衣服與他羅馬島同。洪饋亦同。一婦人掛水精大珠於頂。(頂也)一有黍粟、麩麥。亦有稻。稻居麩麥十分

他羅馬島ノ
風習

伊羅夫島ノ
風習

覺高島ノ
風習

琉球ノ
貿易

琉球ノ
狀況

之一。一少有山谷。有櫻、桑、竹。亦有材木。一家有鼠、畜牛、雞、貓、屠牛而食之。不食雞肉。釀酒用米麴。一飛禽有鷗、鶯、黃雀、鳩。一昆蟲有蚊、蠅、蝸。烹蝸而食之。無蛇。餘同閩伊島。一菜有蒜、蹲鴟、薑。留一朔，候南風。島人五名將俺等，騎小船，行一晝至一島。島名覺高。是麼，護送人翌日還本島。其地平衍無山。周回五六日程。其言語飲食居室土風，大槩與閩伊島同。衣服與他羅馬島同。供饋俺等亦同。釀酒與伊羅夫島同。有稻、黍、粟、牟麥。一炊飯用鐵鼎。無足似釜。乃貿易於琉球國者也。一婦人掛珠於項。亦與伊羅夫島同。一家有溷廁。一家有鼠。畜牛、雞、貓、狗、屠牛食之。不食雞肉。一飛禽有鳥、鳩、黃雀、鷗、鶯。一昆蟲有龜、蛇、蟾、蛙、蚊、蠅、蝸。烹蝸而食之。餘同閩伊島。一菜有蒜、西瓜、茄子、蹲鴟。一有櫻、桑、竹。山多雜木。其名皆不知。留一朔，候南風。島人十五名將俺等，同騎一船，行二晝夜半至琉球國。海勢洶湧。波濤險惡。島人亦皆病暈。(暈也)國王褒賞護送人。人各賜青紅綿布。厚饋酒食。醉倒終日。其人等以所賜綿布造衣穿著。留一月還本島。國人及通事來問俺等。僑是何國人。俺等答曰：朝鮮人。又問曰：備釣魚漂流至此乎。俺等共議答曰：俱係朝鮮國海南人。輸運進上米向京都。遭風至此。通事將俺等言開寫而去。達于國王。俄而遣數官人。迎致俺等處於一館。距海未五里。以板葢屋。有門戶。窓壁。外有石牆。高二丈。牆有門。

夜則加扁鑄，又有官舍在傍，有守令二人監考二人，別有一庫藏貯財物錢布魚醢，凡出納守令監之，通事云：此猶汝國郡邑之有官廳也，供饋俺等日三時，亦有酒，一家受五日糧米酒醪魚醢於官廳，供饋訖次家又受而輸次，供饋率五六日，守令一見俺等饋酒肴，又教館人常時饋餉豐厚，俺等適見國王之母出遊，乘漆輦四面垂簾，昇者幾二十人，皆著白苧衣，以帛裹首，軍士持長劍佩弓矢，擁衛前後幾百餘人，吹雙角雙太平嘯放火炮，美婦四五人著綵段衣，表著白苧布長衣，俺等出道傍拜謁，駐輦以二鐵瓶盛酒，酌以鬆木器俺等，其味與我國同，有小郎稍後別行，年可十餘歲，貌甚美，髮垂後不辮，著紅綃衣束帶，乘肥馬，執轡者皆著白衣騎馬前導者四五人，扶擁左右者亦甚衆，衛士持長劍者二十餘人，持傘者並馬而行以障日，俺等亦拜謁見小郎，下馬以鐵瓶盛酒饋之，飲訖小郎上馬去，國人云國王薨，嗣君年幼，故母后臨朝，小郎年長則當爲國王，一七月十五日，諸寺剎造幢蓋，或用彩段，或用彩繪，其上作人形及鳥獸之形，送于王宮，居民選男子少壯者，或著黃金假面，吹笛打鼓詣王宮，笛如我國小管，鼓樣亦與我國同，其夜大設雜戲，國王臨觀，故男女往觀者，填街溢巷，馱載財物，詣宮者亦多，一自海岸距王宮十餘里，俺等遙望一殿甚高，間之乃國王所居也，人家或蓋瓦，然板屋

甚多，一男女推髻於頂邊，以帛裹之，庶人皆著白苧衣，婦人推髻於腦後，皆著白苧布衫白苧布裳，或著白苧布長衣，其貴者亦服綵段，有襦襖兒襦裳，其守令用班染繒裹髻，著白細苧布衣，帶紅染帛，出則騎馬，從者數人，一水田陸田相半，而陸田稍多，水田則冬月播種，五月稻皆熟，收穫訖又以牛踏之，更播種，七月移秧，秋冬間又收穫，陸田則用小鍤治之種粟，亦於冬月始播，五月收穫，六月更播種，八月始垂穎向熟，一飯用稻米，又用鹽醬作羹，和以菜，或用肉，一酒有清濁，盛以鐵瓶，酌以銀鍾，味如我國，又有南蠻國酒，色黃，味如燒酒甚猛，列飲數鍾則大醉，一有寺剎，以板爲蓋，內施漆，有佛像皆黃金，居僧髡首，或緇衣，或白衣，其袈裟與我國同，一飯盛漆木器，羹盛小磁器，又有磁碟有筋而無匙，筋則木也，一國中有市，綵段繒帛苧布生苧梳剪刀針菜蔬魚肉鹽醢南蠻國班繒班綿布檀香白經黑緯綿布藤唐青黑白綿布磁器等物，一唐人商販來有因居者，其家皆蓋瓦，制度宏麗，內施丹雘，堂中皆設交倚，其人皆著甘套衣，則如琉球國，見俺等無笠贈甘套，一國人皆徒跣不著鞋，一其通事，必使日本人在國者爲之一，江南人及南蠻國人皆來商販，往來不絕，俺等皆目視南蠻人，推髻其色深黑，殊異常人，其衣服與琉球國同，但不裹帛於首，一有弓矢斧鉞刀劍鏃子鎌鍤甲冑，或用鐵，或用

皮一軍士以鐵裹脛、或用皮著膝、如行纏馬、一其土温煖、與閩伊島同、一有松櫻竹、其餘雜木不知名、一家有鼠、畜馬牛羔、狗豬、狗鷄、鵝鴨、屠馬牛食之、或賣於市、亦食雞、飛禽有烏鵲、黃雀、鷹、燕、鷗、鷓鴣、一菓有梅、桃、柚子、青橘、一菜有蹲鴟、茄子、真瓜、冬瓜、韭、葱、蒜、葵、瓠、芭蕉、一昆虫有蚊、蠅、蟾、蛙、龜、蛇、蝸、蜂、蝶、螳、蝗、蜻、蜓、虻、蟬、蜈、蜘蛛、臭蟲、蚯蚓、螢、亦有似蠡而大者、人好食之、或賣於市、又有蝙蝠、俺等凡留三朔、語通事請還本國、通事達國王、國王答曰、日本人性惡、不可保、欲遣備江南、俺等前此問於通事、知日本近江南遠、故請往日本國、適有日本霸家臺人(傳)新伊四郎等、以商販來到、請于國王曰、我國與朝鮮通好、願率此人保護還歸、國王許之、且曰、在途備加撫恤、領回、仍賜俺等錢一萬五千文、胡椒一百五十斤、青染布、唐綿布各三匹、又賜三朔糧米五百六十斤、鹽醬魚醃、莞席、漆木器、食案等物件、八月初一日、新伊四郎等百餘人、將俺等同駕一大船、行四晝夜、至日本薩摩州登岸、波濤甚惡、僅得而濟、海勢與濟州同、金非衣自捕刺伊島患頭痛、沈綿未瘳、至琉球國轉劇、國王知之、賜南蠻國藥酒、新伊四郎等見之、又以艾灸之、曲加救療、在舟中大小便時、四郎每使其從者扶執、恐其墜落船頭也、及到薩摩州病乃愈、新伊四郎等、將俺等、投舊主人家、住接饋酒飯、自翌日四郎等以琉球國

琉球國王
漂流民ニ
物ヲ與フ

薩摩民
漂流ニ
到ル

所贈糧饌、供饌俺等、日三時、州太守再邀俺等及新伊四郎於其家、饋酒飯及餅、肴皆海魚、其家板屋甚壯麗、常在家行公事、財產豐富、有駿馬數匹、持弓矢、荷長劍者二十餘人、常在門下、留一朔、至九月候南風、新伊四郎等買別船、將俺等同騎、沿岸而行、凡三晝夜、至打家西浦登岸、四郎騎馬率俺等、由陸路、金非衣病起、氣力未充、亦覓馬使騎、餘二人徒步、行二日山谷甚險、至霸家臺、副官人左未時等、押盤纏由海路已先到矣、人家稠密、如我國都城、中有市、亦如我國、四郎等率俺等投其家、饋酒飯、殺饌甚豐、上官副官二人輪次供饋、日三時、大內殿所送主將再邀俺等及四郎、饋酒殺所居瓦屋甚壯麗、庭下侍立者三十餘人、皆佩刀、門外軍士屯廬者不知其數、俺等見主將往攻小二殿、○大內政弘、少貳政資、ヲ攻見、條ニ擁兵而出、軍士持槍劍、小旗者三四萬人、凡四日戰勝而還、斬六級、梟首於竿、或有人柱其齒、以驗其人之貴賤、蓋有爵者染齒故也、新伊四郎等以兵亂未息、恐有逃竄者、潛居海島、出而剽掠、以故留六朔、待兵亂平定、至今年二月、將俺等登舟、行十五里許、至小島、名軾、駕留泊經夜、翌日早朝開洋、初昏至一岐島登岸、人家甚衆、四郎等將俺等、投宿主人家、用所齎糧饌供饋俺等、留三日、又開洋、行一晝、及暮至對馬島、草那浦登岸、四郎等將俺等、投其舊主人家、其主乃四

壹岐ニ到

對馬ニ著

朝鮮鹽浦
二著ス

文明十一年是歲
郎叔父、用所齋糧饌供饋、主人亦饋酒、其地磽瘠無田、民皆艱食、非如所經諸島、
以島主留難行狀、風亦不便、故留連二朔、至四月不記日、候東風、沿岸而行、(志佐)
浦投泊、留二日、風順、又沿岸而行、泊都伊沙只浦、留三日、候東風、早朝開洋、行一
晝、及暮到泊鹽浦、蔚山郡守見俺等著甘套、各給笠子布一匹、俺等製衣穿著上
來、右閩伊島以下凡物產、俺等所見止此、

年未雜載

災異

〔後法興院政家記〕四 六月十一日、丙申晴、亥剋有天變

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十一 〇山城 御湯殿上日記 八月廿日、乙未よひ

どうせいどふ、

〔晴富宿禰記〕 八月廿日、甲辰晴、自巽天亘子天有光物、流星云々、何日哉、定日忘

却之、盛俊見之由語之、

閏九月十五日、丁酉晴、後聞變異、土曜星侵金曜星云々、

〔異本塔寺長帳〕四 九月十八日、萬運星大將軍星現、是ナ三光星ト云、皆吉祥ノ星也、

〔晴富宿禰記〕 正月二日、己未天晴、後聞深夜鞍馬寺大風吹、御堂棟木吹落、參宿

之輩出堂中、言語道斷次第有之、

〔異本塔寺長帳〕四 八月十五日、大風、別ノ關八州大風、

〔大乘院日記目錄〕三 正月一日、夜前春日山鳴動、驚耳云々、

〔大乘院寺社雜事記〕六十 正月朔日、戊午 一夜前、大晦當山鳴動了、希有事也、社頭以下諸人聞之、

文明十一年雜載

流星

土曜星侵
金曜星ヲ
ス
萬運星大
將軍星出
現
大風
鞍馬寺棟
木落ッ

關東大風
春日山鳴
動

〔大乘院寺社雜事記〕八十 六月廿六日、

一 早旦春日山及五六度令鳴動了、驚耳了、近日毎々如此云々、希代勝事也、寺門難義珍事可出來之時、先例如此歟如何、

〔後法興院政家記〕四 八月十一日、未晴、民間有炎旱愁云々、

〔異本塔寺長帳〕四 九月三日ヨリ十日迄大地震、

〔奧州會津四家合考〕十二 附錄 同十一年己亥、興德寺、實相寺、炎上、

〔晴富宿禰記〕 七月廿四日、寅晴、後聞昨日、廿三、北野、一夜松御社傍モチノ木大木、

無風、雨難折倒云々、

〔大乘院日記目錄〕三 五月十四日、東南院四足顛倒了、尊師本坊、

〔大乘院寺社雜事記〕六十 五月十五日、

一 東南院四足昨日顛倒了、藥師堂方本坊也、

神社、

〔晴富宿禰記〕 九月六日、未晴、外宮一禰宜貞香神主闕替、同權禰宜度會朝世

可被補事歎狀、祭主二位秀忠卿執申之、此事自去春申之、傳奏并職事官等禮物大儀、亂中以半分三分一等致沙汰、可爲其分之由、依令申、傳奏不承引、于今

早魁
地震
會津興德寺
實相寺
炎上
北野社
榎折ル

東南院四足門顛覆

補任
外宮權禰宜度會朝世
二補セシ
トス
傳奏職事官等へノ

禮物ハ亂中ノ例ニ據ル
義政夫人ノ命ニ依リ
日野氏ノ禮物ヲ三分一トス

朝世施行
狀ヲ官務ニ請フ

任料千疋

度會朝敦

延引、自武家被定仰之後、任本儀今日次第之儀執申之、藤浪來之、（下略）官務放舉狀、

來十四日室町殿御臺可有御參宮御進發、其以前可被補云々、（義政夫人參宮ノコト、九月

十四日ノ）仍傳奏以本儀三分一之禮可宣下之由、内々有御臺御命云々、

七日、（庚申、雨降、略）中藤浪以書狀送新補禰宜任料、不好之間令清撰、明日重可持

參之由令申之、宣下次第之儀、於職事許被押置歟、依任料不足之故哉、

八日、（酉晴、外宮新補禰宜朝世代參來、夜前職事御教書申出候、今朝先下遣伊

勢候、御施行事無御疑可給之由申之、希代所行不可然、雖然已下遣上者不能

是非施行、非可押置之儀、所詮遣書狀於職事頭左中將宣親朝臣、依返事可書

出由返答、然者賜御書付申職事、則返事可持取云々、仍官務書與狀之處、則持

向之返事到來、夜前子剋下知候、任料半分如亂中致沙汰候由、返報之間書與

施行、任料千疋沙汰之、今五百疋無沙汰也、於于今任本儀可致沙汰之處、究困

之仁牀、自去春、依此儀于今不被宣下、武家御臺可有御參宮之間、其以前別而

被仰出、仍傳奏□禮物以半分治定云々、當方者三分一致沙汰也、

〔兩宮長官次第〕外宮長官次第

朝敦、（宮後）文明十一年執印、長官廿三年、

春日社安居師

〔大乘院寺社雜事記〕

八十 四月十一日

一安居師事、去年師專覺律師復請事、不可有子細之由寺務申云々、長者初任之間、專心得業蒙宣了、仍兩方及相違云々、長者初任之間、新師不能左右事也、

十二日、

一安居師事寺務成敗兩様也、一人ハ復請事自兼日申定云々、一人ハ被成長者宣申云々、重々及相論之間、學侶成敗ニ成下了、既以被成長者宣上者、可爲專心得業之由治、自昨日參籠云々、專覺律師失面目了、

十三日、雨下、

一專覺律師打入于安居坊、退出專心得業畢、雖可令生涯、爲山内無力罷出、居但馬屋邊之由、專心得業披官學侶云々、專心穩便沙汰珍重也、明日成集會可罪科之由申云々、所詮希有事也、自明日安居勤行且如何、爲寺社不吉々々、

十五日、

一自權預祐松方申給、安居自昨日破了、專覺律師ハ閉籠安居坊、專心得業ハ

專心得業安居トナ

專覺專心ヲ逐フ

十四日ヨリ安居ナ

居但馬屋、對兵杖者社頭往反之間、社頭之儀一大事也云々、奇代不思儀事也、

十九日、

一傳聞、今度安居師事、學侶六方色々計略、專覺律師、相宥之、自學侶三十貫分可給之由必定了、仍安居坊退散了、十六日より安居師專心得業罷籠、勲行初之了、今度儀併寺務越度希代不思儀事也、寺社惣別儀如何、且寺僧共儀未代至極事也、

〔大乘院日記目錄〕

三 四月十三日、春日安居師相論出來、自十四日安居無

之、希有事也、依寺務未練成敗也、自十六日修之、

〔後法興院政家記〕

四 四月五日、卯晴、春日社安居師事、專心得業所望間、不

可有子細由、令下知畢、南曹辨未補間、内々年預以書狀申遣別當僧正許、

〔大乘院日記目錄〕

三 十二月廿七日、一切經三口補之、

卅日、一切經一口補之、

〔大乘院寺社雜事記〕

七十 十二月廿七日、

一一切經衆定乘、榮學、兼祐、行專、乘盛、源松、各可補任之由、仰遣惣藏司方了、御

學侶ヨリ專覺ニ三ツテ、實チ三ツテ、安居坊トナシ、退カシム

一切經衆

坊中奉行清尊分よて成奉書了、

卅日、大雪

一秀尊法師補任一切經了、

六所明神祭禮

〔晴富宿禰記〕

九月十三日、丙寅晴、於官務方有一獻、六所太明神祭禮祝著也、東

勝庵來會、源増送神膳、

〔東寺百合文書〕

〇山城之十四上

〔信實卷〕
〔神子請文〕

請申東寺八幡宮放生會御神仕

右子細い、去今兩年八乙女一人不參申、仍御下行物之内被留候、迄りると申共、米い一人四斗あてあるを、くむふんこ御とめの間、むひ事申こよつて、從御下行間、めてよく存候、已後いかあらず人数をこゝれ、る可申候、をし不參之儀者、そのまへを御ひりへあるる候、其時是非不可成候、

一 おさあひ神子を近年まいらせ候事、御せつかんこあほりるといゑとも、せんそゝるによつてまいらせ候あり、としよると申共、地下人神事をたごめさる物あり、

東寺八幡宮神子請文

一 玄きはし神人立るをし可申付候、上衣てふの事も、天下ふいの間、たしあ
と可申候、仍請文狀如件、

文明拾壹年十二月三日

一老(花押)

惣賣(花押)

信濃諏訪社花會頭足

〔守矢氏舊記〕

〇信濃

文明十一年、己亥、花會明年御頭足、

波多政盛
村井清知
和田矩基
平瀬政知
矢島道慶
海野氏幸
十王坊秀慶
富長政信

一 宮頭内田植原〔神子〕御符波多判官大夫迹書候小札ニモ副狀、内書ニモ上書波多殿書、御符禮一貫八百、波多政盛御祝有使、何へも彌三郎村井殿内田植原副狀書候、村井清知一貫八百、使彌三郎村井中内田與知泉知行候、南内田和田筑前守矩基副狀、祝一貫五百、北内田平瀬淡路守政知代官一貫三百、御頭役植原十八貫、内田三ヶ村十八貫、

一 御堂頭佐久矢島入道道慶、御符祝三貫三百三十三文、使三郎、御教書祝同前、寄子九郷有御符上祝一貫、大井矢島入道道慶孫六請取候、頭役五拾貫、

一 儀並青木海野信濃守氏幸知行代官と計書來候、御符禮三貫三百、使四郎殿、

一 前宮長池代官十王坊秀慶、富長政信御符祝三貫三百、使四郎殿、御教書同

前

高梨政高
吉田小法
師丸
安田秀義

須田滿信
中島隆原

五月會頭
足

桑原幸光

中澤家重

長澤幸吉
井上兄弟
相戦フ

一花會加頭和田高梨刑部大輔政高知行代官吉田小法師丸御符祝五貫六
百六十_{六文}神人路錢一貫寄子安田秀義副狀祝一貫八百北大熊鄉大俣沙汰
春阿副狀祝一貫八百使四郎殿御教書同前神鷹神馬頭役三拾貫
一古野加頭古野鄉須田信濃守滿信知行代官中島入道隆原御符祝三貫三
百御教書祝同前使四郎殿頭役二拾貫

文明十一年_{己亥}五月會明年御頭足

一左頭桑原庄桑原對馬守幸光御符祝五貫六百六十_{六文}卷紺二使四郎殿御教
書同頭役外出候頭錢五拾貫

一流鏑馬南高田代官中澤源左衛門尉家重御符祝三貫三百北高田代官三
河守武重美濃守成以廣田與三郎宇木入道御符祝三貫三百三十_{三文}使孫六
御教書祝同前頭役兩鄉四拾貫

一五月會加頭井上代官左馬助康幸長澤助衛門幸吉御符祝五貫六百六十_{六文}
使孫六御教書祝同前此年兄弟弓箭井上十六鄉之御頭役錢三百貫取進
候歟御頭を勤仕申候宮本江七拾貫被進候

鳥羽信家
廣川忠廣

井上政滿

高梨政盛

御射山頭
足
坂西政俊
常葉康國

村上政清
福澤清胤

一五月會加頭大倉御符祝三貫三百鳥羽信家廣川忠廣御教書祝同前頭役
二拾貫

一五月會加頭小柳木井上信濃守政滿御符祝三貫三百三十三文使四郎殿
御教書祝同前頭役二拾貫

一五月會加頭狩田鄉高梨源政盛御符祝五貫六百六十_{六文}使路錢一貫四郎殿
御教書祝同前神鷹神馬頭役四拾貫

文明十一年_{己亥}御射山明年御頭足

一上增飯田鄉坂西伊與守政俊代官常葉之肥前守康國御符祝三貫三百卅
三文卷紺二_よて自先々候_ヲ只一貫三百_よて候_ト肥前被申候_リ此九月
親父常葉入道死去_{○中略九月五日ノ條參看}

一左頭鹽田庄村上兵部少輔政清御知行代官福澤五郎清胤御符祝五貫六
百六十_{六文}使路錢一貫使孫六御教書祝五貫六百六十_{六文}使錢一貫神鷹神
馬神長取候五拾貫

一右頭野澤鄉右馬助康致御符祝三貫三百三十三文使孫六<sub>○中略八月二
日ノ條</sub>
收野澤教書祝同前代官掃部助清綱馬一疋栗毛孫六請取來候

一下増會田小岩井郷一郷ノ御頭勤候條郷四ヶ條不勤仕候海野下野守氏
貞御符祝錢二貫別而路錢出之使四郎殿頭役三拾貫

〔上諏訪神社文書〕○一信濃

當大明神御渡之事十一月十五日夜令凝結湖水同十八日巳剋當社濱自栗
林渡下御天下宮濱小井氏渡江上御候以此旨可有御披露候恐惶謹言

文明十一年十一月十八日 大祝

進上 御奉行所

當大明神重御渡之事同十九日卯剋自當社濱平池渡下御天下宮濱大池渡
江上御候以此旨可有御披露候恐惶謹言

文明十一年十一月十九日 大祝

進上 御奉行所

〔大乘院寺社雜事記〕一七十 十月朔日

一自一乘院殿奉書到來四日社參用牛童并裝束事可雇進云々此外色々借
用物昨日遣之了

一條院大
社
參詣

一乘院大
惑

九日

一一乘院より御文到來今度色々借用禮云々世上ハ一向兩門上下迷惑ま
てありと云々尤由申返事

〔大乘院寺社雜事記〕八十 六月三日小雨

一順宣方楯代貳百疋遣之路次近日六借間相傳秋篠遣之了返事到來畏入
毎々御扶持無是非云々爲參宮下向之間以次社參云々

〔二階堂文書〕伊○紀

阿波國麻殖郡より參詣檀那之事
河村五郎左衛門尉秀家花押

文明十一年己亥八月八日

本宮御師玉木

二階堂彈正左衛門尉殿

〔大乘院寺社雜事記〕七十 正月十五日

一今日春日御田植也田舍人共參詣云々

〔廿一口供僧評定引付〕五山城 正月廿四日

文明十一年雜載

成身院順
宣伊勢神
宮ニ參詣

熊野本宮
檀那

河村秀家

春日社田
植

東寺八幡
宮燈明五
節幣料

稻荷法樂

土宮神明
社棟札
福富光親

宇佐宮新
初日次勤
文

文明十一年雜載

八九〇

一鎮守宮仕申當宮御殿明并朔日并五節御幣料事大炊方沙汰之處難澁云々令披露之處仁自久世奉行可有披露之由衆議了

〔東寺執行日記〕十三 二月廿五日午日稻荷法樂於鎮守アリ

〔廿一口供僧評定引付〕五 山城 三月二日

一去々年天下無爲之刻立願之内鎮守分未果仍來十一日十二日比以吉日可被始行之由治定了

〔尾張志〕海東郡 村里の部 助光村 榎津の東北名古屋の二里半西南にあり助

光といふ人の名田なるへし當村土宮神明社の棟札に奉建立御社一字大檀那助光郷橋家福富宮内左衛門尉光親文明十一己卯閏九月八日と見えたり

〔政所惣檢按益永家職掌證文寫并諸事〕

日時勘文案

造宇佐宮新始日次

今月 午 巳 辰 卯 寅 丑 子

廿三日 未 申 酉 戌 亥

文明十一年 己亥十二月七日

從三位在宗

〔大津島神社文書〕五 〇近江

文明十一年 己亥十一月十日

大島社推鐘之勸進帳事

壺石 阿彌陀寺

三百文 永正十四年己卯中庄御こしなほくり候時三百文かやし申候 中庄

鐘勸進帳事

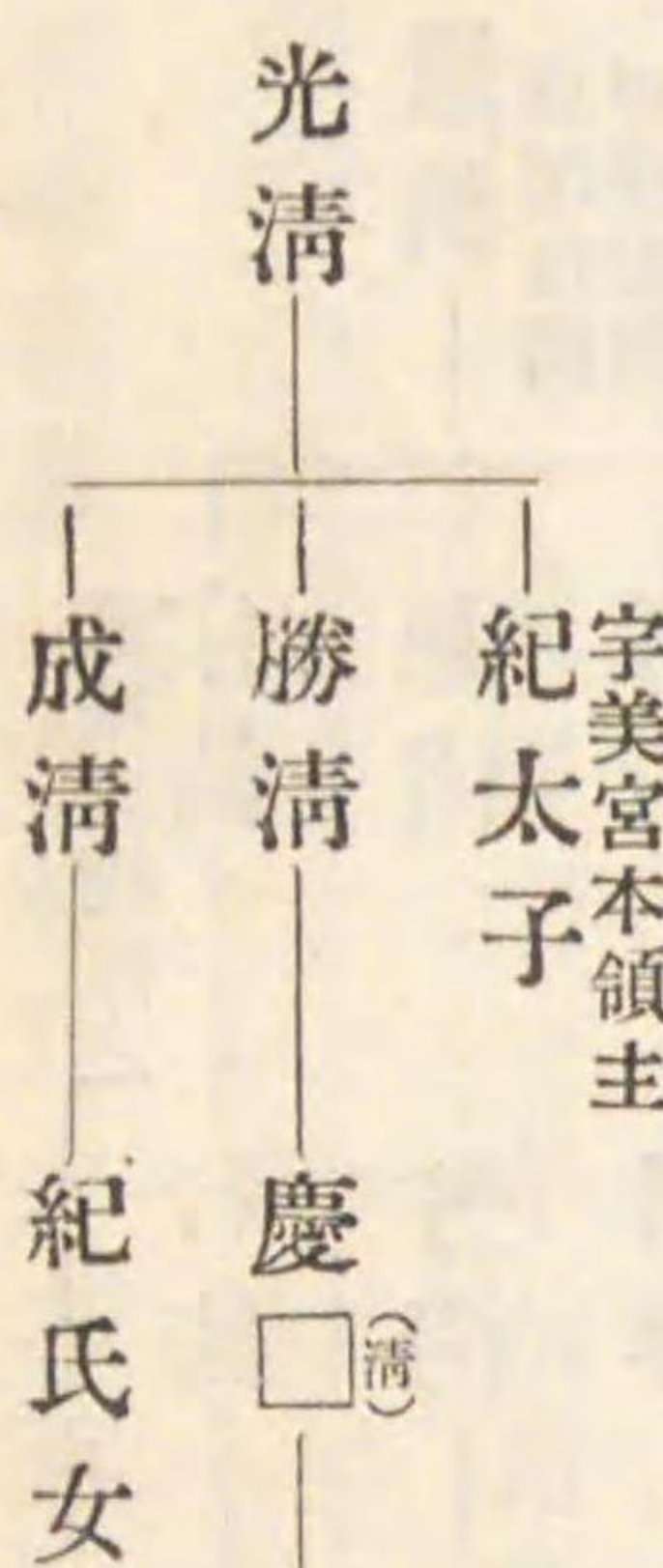
三百文 圓山ヨリ勸進也

〔石清水八幡宮記録〕二十四 〇山城 宮崎宮請文

院應御下文案文宇美宮社務目安國事

目安謹言上

宇美宮相傳次第



文明十一年雜載

八九一

筑前宇美
宮相傳次第

近江大島
社鐘勸進

宮崎宮相傳之		宗清	行清	守清	堯清	陶清	定清	常清
道清	融清	芳清	生清					
以河內國 甲斐庄相 傳宇美宮	房清	房譽	房助	什清	房璠	房舜	房觀	
	房勝	房珍	房精	圓清	房祐	房秀		

一八幡別當道清法印宇美宮相傳事

後鳥羽院御聖代元久二年預安堵同十二月廿三日賜院宣田中殿先祖宗

清者道清嫡弟也我等先祖房清次第也宗清宮崎宮相傳兄弟分也然者道

清院應御下文治承二年六月十二日并建久三年三月日八幡僧俗祠官連

判狀元久二年之院宣相副道清讓狀房清其時土丸賜之同宗清在判加去間代

々對綸旨院宣無相違處也

一永仁四年堯清號宮崎宮神寶調勸賞

當宮領所々押賜先祖房助法眼依訴訟被經御沙汰停止堯清非分濫望任

代々相傳勅裁旨如元所被返付也向後更不可有牢籠旨同五年正月廿一

日綸旨嚴重也

宗清宇美宮相傳

堯清宇美宮領所々押
勅裁ニ依
ル返付セラ

陶清又宇美宮領所

常清又宇美宮領所

東寺八幡宮領戀河山城

一延慶二年爲法華法供料所領長野庄田富庄淡路國枚石庄三箇所堯清掠賜是又被經御沙汰同三年七月廿八日被返付房璠所之院宣明鏡也

一房舜相傳時陶清掠神領等申房舜以證文言上既從道清以來代々對綸旨院宣相傳無相違地也以何故陶清可有悞望歟既道清讓狀宗清在判然間

至于宗清行清守清堯清不達競望此旨申披嘉曆三年十月十七日綸旨明白也

一貞治四年田中常清雖掠當社賜綸旨依相續次第申披同九月廿二日被召還同五年十二月廿九日房觀令頂戴于也了綸旨其後澁河探題御代國清寺殿大寺殿御時亦築山殿御代田中生清兩度雖被申如此支證等依御披見于今無相違今亦起非道訴訟段誠以無謂我々不肖之至雖不足繼先祖依爲八幡御誕生地蒙勅定住社邊司神職守先例神事祭禮于今無怠唯私非費神領惟併天下安全御祈禱也此條々預御披露奉仰上裁者也仍目安言上如件

文明十一年九月日

宇美宮社務房祐

〔東寺百合文書〕

〇山城之二十九

態令啓候上久世庄之内東寺八幡宮領號戀河分之事爲直務無別儀之處只

今御違亂之由候、戀河藤五郎事、革島へ致出入之族雖在之、至所務者、爲百姓直納之上者、各別之段無紛候哉、速被仰付可被止其御綺事、可爲本望候、但又相紛候儀、在之者、承印其上可申分候、東寺御事申次儀之間如此候、御分別所仰候、恐々謹言、

十月十一日

高島甚九郎
長直判

三好次郎五郎殿御宿所

〔香取文書〕

舊物忌家
所藏乙

〔備後卷〕
津宮地さう分

注進 合在 文明十一年亥ちのこの五日、

一坪御手

二坪直跡

三坪同人

四坪 五升九郎□郎

五坪 五升六郎次郎

六坪六郎次郎

七坪御手

八坪御手

九坪九郎次郎

十坪六郎次郎

十一坪九郎次郎

〔香取文書〕

舊大禰家
所藏三

當社領小野織幡兩村之事

香取社津
宮地頭注
進

香取社領
小野織幡
兩村

傳馬

右件織幡在近六郎内一字屋敷田畠、別田貳段指副、同名神七方依有志、子息神九郎方へ爲志、彼地令補處也、但社役嚴蜜、并公方役其外懸總村役等之事者、彼村玄ゆん玄よくゑるへく候、但總領被背大禰宜之儀候者、不可寄彼狀候、神忠專可被屬候、於彼一字内控く田之事、此方可致所務候、此上夫錢已下公事そゐい之事、爲志指置處也、又夫てん馬等之事者、可被屬おとゐ候、仍爲後日狀如件、

文明十一年十二月廿四日

大中臣大禰宜散位胤房(花押)

〔香取文書〕

舊田所家
所藏乙

宛行田所庶子丹藤次郎之跡之事

右件丹藤二郎知行之内二俣大ゐわ副壹段、田所又四郎總領成間、任結所宛行處也、於社役者、任先例可令勤候、但大禰宜之命、背後闇候者、取返し大禰宜知行至へく候、神忠專可存候、仍爲後日如件、

文明十一年十二月廿九日

大禰宜散位胤房(花押)

佛寺、

〔大乘院寺社雜事記〕

七十六 正月朔日、

文明十一年雜載

八九五

補任

田所庶子
丹藤次郎

法印

法眼

一光明院權大僧都敍法印由、宣親得業相語之、
〔地下家傳〕三十二 大乗院門跡 坊官諸大夫侍家傳 繼舜懷舜男 文明十一年月日敍法眼、六

〔大乘院寺社雜事記〕六十 三月廿四日、

一權上座大法師兼乘敍法橋之由申之、

〔大乘院日記目錄〕三 閏九月二日、成舜敍法橋、

〔大乘院寺社雜事記〕七十 閏九月二日、

一上北面成舜宣下敍法橋了、去月十六日宣也、今日到來給之、畏入了、于時勾當也、

〔大乘院日記目錄〕三 閏九月六日、賢秀、通祐各敍法橋、

〔大乘院寺社雜事記〕七十 閏九月六日、

一上北面賢秀、吉田通祐各敍法橋、宣下遣之、去月十六日宣下也、
十一日、

一通祐法橋、一雙一盆持參、昇進畏入□□

〔大乘院寺社雜事記〕七十 十二月十二日、白夜前 雨下

律師

一松南院繪所出雲公實順敍法橋、去二日宣旨仰遣之、當年四十八歲云々、

〔大乘院日記目錄〕三 九月十日、重兼任權律師、

〔大乘院寺社雜事記〕七十 九月十日、雨下

一重兼任權律師、參賀、鈍色五帖四方輿也、

〔大乘院日記目錄〕三 九月十一日、賴秀任權律師、信專、光守、興基各任權少僧都、

僧都、

〔大乘院寺社雜事記〕七十 九月十一日、

一賴秀任權律師、參賀、當年田樂頭役可懃仕云々、今度轉任權少僧都、
興基、光守云々、

〔大乘院日記目錄〕三 九月廿二日、教弘任權律師、

〔大乘院寺社雜事記〕七十 九月廿二日、小雨

一教弘任權律師、參賀、四方輿也、當月三人宣下之内也云々、

〔大乘院日記目錄〕三 十月二日、政圓任權律師、

〔大乘院寺社雜事記〕七十 十月二日、晦日ヨリ 八專也

一政圓任權律師、參賀、鈍色四方輿、

連月昇進
八不可

東寺講堂
預職

同納所職

十二月十二日、自夜前
雨下

一山法輪院公範僧都弟子尊範、去九月任權律師、又十月僧都事申入之、勅許之處、月并昇進不可然之由被仰下、宣下被召返了、尊範直任之法眼事、雖所望申、承辦息外直任不可有之間、先日及御沙汰、九月任律師了云々、

〔廿一口方供僧評定引付〕五
○山城 正月廿四日、

一講堂預職事、乘春并乘泉望申、無人數之間、追而可有沙汰云々、
三月十八日、

一乘春法師猶子千丸、中綱并講堂預競望事、令披露之處、不可叶之由、去年既治定之上者、可爲同篇云々、

一乘春、乘泉講堂預望申事、重而可令披露云々、
二月十四日、

一乘珍申納所職事、可預御免之由、自去年雖申入無御舉用、既七十有餘罷成之間、每事老耄仁、有御免可畏入云々、令披露之處、如此令存知者、可有御悅喜之由、可申含之旨、衆議治定了、
三月二日、

一乘珍申納所職辭退事、不可然者可存知之由、堅可申含云々、
十四日、

一乘珍申納所職辭退事、不可然可令存知之由、衆儀治定了、
四月廿五日、

三綱職

〔大乘院寺社雜事記〕六十 二月十六日、

一長谷寺權上座延賢任料貳貫沙汰之、公方分一貫二百文、

長谷寺權
上座

〔大乘院寺社雜事記〕七十 十月七日、雨下

一長谷寺權上座俊榮補之、任料二百疋、始行披被官人鯛屋子也云々、

五師座

〔大乘院寺社雜事記〕七十 三月十八日、朝雨下

一長谷寺五師座亮勝補任事、任料六貫文也、先日以執行二貫進之、不可叶旨返事、不給補任處重而申、然者可計略、先以可給補任之由執行取申間、可補任旨仰付之了、

澤御堂供
僧職

〔後法興院政家記〕四 二月廿日、丁晴未、大聖院法印來、實相院坊人也、澤御堂供僧職

事、依實相院吹舉、昨日令補任、爲其禮來、彼供僧三口在所也、每度自家門補之、

平等院供
僧
長者宣

文明十一年雜載
補平等院供僧事
三月廿六日、未、癸朝間陰、午剋以後止、○中平等院供僧并澤御堂供僧等補之、長

者宣如此、料紙強紙一枚禮紙加之、
長者宣
平等院

權律師有順

宜補巨倉堂衆、

被仰備、件僧等宜從彼寺役者、

文明十一年三月廿七日

別當刑部卿從四位下守藤原朝臣治光奉

澤御堂供僧職三口也、雖非當職、每度爲家門補之間、以寺方補之、山方又有其

例、油納所事一口之外無之云々、

令旨案

宇治平等院澤御堂供僧職并散在田畠油納所等事、任忠立僧都讓與之旨、
知行不可有相違之由、殿下御氣色所候也、仍執達如件、

文明十一年三月廿七日

刑部卿判

謹上 中納言律師御房

刑部卿判

料紙杉原如例、表書謹上中納言律師御房、刑部卿治光、

十一月七日、戊子、晴、略中 乘雅法印來、去春比令補澤御堂供僧、爲其禮持參樽、

興福寺維
摩會研學
堅義

延曆寺楞
嚴院長吏

隆憲竹林
院主トナ
ル
俊圓得分
ナキニ依
リ主テ
辭ス
竹林院領
攝津河南
莊和池田
莊光明院領
越前長崎
莊東觀智
院相續智

廿四日、巳陰、時々雨下、自左少辨元長許申送云、維摩會研（後脱力）堅義事、大法師了弘
望申間、奏聞之處、勅許間、可遣長者宣之由命之、得其意之由、令返答了、

〔實隆公記〕

五

後九月十八日、庚子、中略○入夜頭中將入來、楞嚴院長吏後闕事、

尊勝院當時申請云々、然者上乘院猶以理運也、便宜之儀可得其意之由、被示
頭中將、

十九日、辛晴、晝間向民部卿許、公躬卿事、橫川長吏後闕事、兩條內々以便宜可
達叡聞之由爲相談也、小時被召御前、下姿雖其恐、當時每度如此候、庭上有御
雜談等、及晚退出、入夜向頭中將許、

〔大乘院寺社雜事記〕

七十

十二月十三日、

一光明院法印爲竹林院々主、先日移住云々、於此間之住所新院者、堂家實專

大爲留守畢、竹林院事、自一乘院及數年被預東北院了、依無得分辭退之、然

間被預隆憲法印云々、竹林院領者、攝州河南庄、常東會當國池田庄、一乘院料所也、當國池田庄、御息也

此兩所得退了、光明院領者、越前國大野郡長崎庄、四條家領也、各如無、

〔東寺百合文書〕

○山城一之二十五

觀智院相續事、以連署可有御申之由、被仰出候也、恐々謹言、

文明十一年雜載

九〇一

五月十四日

年預御房

貞秀(花押)

〔廿一口方供僧評定引付〕

○五山城 五月十四日、

一就觀智院相續仁躰自公方樣御尋事

寺奉行折紙案○案文ハ、上ノ東寺百合文書ニ同シキニ依リ略ス、

當寺觀智院相續仁躰事、童形菊壽丸へ、以此旨可預御披露候、恐々謹言、

五月十四日

融壽判

公遍判

覺永判

教濟判

原永判

宏清判

清和泉守殿

〔大乘院寺社雜事記〕

七十六 正月朔日、戊午、

興福寺年中行事

小供御

節供

齒固

節分

粥

蜂起初

一持佛堂供餅百枚、辨才天供餅等如例也、

一小供御如例、○二日三日ノ條、異事ナシ、

一御節供如例、上首以下白散手長大納言得業兼親、役送親舜、等身衣指貫、予權僧正、於一所行之、○三日節供ノコト、異事ナシ、

四日、

一兩所御齒固送遣拜殿御師萬歲方了、

六日、節分也、

一節分一獻方政所調進之、三疋下行、

一同經事御承仕專祐讀誦之、御布施三百八十餘文下行、

十五日、

一朝飯之次御粥進之、上下各付衣也、每事如例御後見調進之、又粥料一斗、公私分上番ニ下行、

十六日、

一衆徒蜂起初、無爲珍重々々、山村父子參申見參、

三月三日、夕方夕方雨下、

文明十一年雜載

節供

一節供御後見調進如例、手長大納言得業、役送等身衣指貫、

〔大乘院寺社雜事記〕

六十 五月四日、小雨

菖蒲

一仕丁丸菖蒲葺之、二十疋下行、

五日、

節供

一節供、手長大納言得業、

六月廿九日、

六月輪

一輪役清圓役送親舜、

〔大乘院寺社雜事記〕

六十 七月七日、

節供

一節供、手長大納言得業如例、

十四日、

一供水等如例、新宮ニ參詣、

八月朔日、

一古市所進如例、此所進物ハ不八朔日儀、昔より古市此門跡へ八月一日ニ御屋渡在之、其一獻ヲ古市調進了、爲吉例毎年進之、公私之間希有之祝著儀也、仍于今不退轉者也、大筒以下如例也、

八朔贈答

一今日所進物事

麩

瓶子一双 一鉢 麩 一鉢 赤粥 一盆 菓子 土器等

苙

苙十枚代七十疋

白裕布

以上松林院

裕一 白布二反 瓶子一双、色々所進如例、

以上政所法

茶

白布一反 裝舜寺主 茶廿袋 上座法眼 茶十袋 已心寺坊

主 茶十五袋 泰弘寺主 茶十五袋 宣舜維那 茶廿袋

專實寺主 榼一双 一益 訓英 瓶子一、一益 慶英 瓶子一

双兩種 光專律師 筭 東林院僧正 筭 專重 兩種次郎

一今日支配

檀紙

白布一反 壇十帖 律師頭 白布一反 并代三十疋 中紙二束 侍方

白布一反 律師 茶二十袋 訓英 同十袋 慶英 同卅袋 東林

一代物下行專重注進越

三百代 白石 三百代 中紙 百五十代 壇紙 百文 河原 百十文 所供御 百 土

器

合九百六十文

〔大乘院寺社雜事記〕

七十 九月九日、朝雨下、

一節供兩所分御後見講進如例也、手長大納言得業、

〔大乘院寺社雜事記〕

七十 十月十一日、

一亥子御後見調進之、兩所分如例也、○二十三日ノ條異事ナシ、

〔大乘院日記目錄〕

三 正月十三日、寺門心經會如例、

〔大乘院寺社雜事記〕

六十 正月八日、

一心經會廻請持參進奉了、

十三日、雪下、

始行

一心經會始行、幡二流出之、題名僧良祐、專重、各付衣白五帖、中間二人、香直垂也、出仕三綱泰弘、宴貞、

竹三ツ、内山釜口召之、一昨日昨日ニ到來、兼日成奉書、

雜具事

杉原十三枚ツ、二、心經用總而一帖下行之、厚紙一帖、私御幣用、五度入小々、炭

亥子
興福寺心
經會

廻請

始行

同仁王會

同涅槃會

同佛生會

廻請

一荷、御油、御後見所進分色々在之、繪所經師方兼日仰之、經師指合出來之間、爲私沙汰、他方者ニ申付之云々、御力者、御童子、座法師等悉以參上、每事奉行并沙汰人所行也、作手以下相催之、御米注進狀ニ任下行之、七斗七升三合、各幡二流分也、今日幡七本立之云々、
一仁王會號所講、東御塔號院、分於東室修之、當年御所出分、坪江給主ニ相當者也、去年ハ河口庄給之役也、坪江上郷分五百文、以菊市法師送東室邊了、所々講衆之請取到來、佛供燈明方ハ、彼塔料所納所より出之、專親寬圓、沙汰也、下郷分ハ一貫二百、

二月十四日、雨下、

一明日涅槃會佛供、大内庄万石米一斗六升下行之了、納所因幡寺主方、

〔大乘院日記目錄〕

三 四月八日、佛生會、

〔大乘院寺社雜事記〕

六十 四月三日、雨下、

一佛生會廻請持來、正權則申出云々、

八日、

一佛生會出仕、泰弘行香役也、

〔大乘院寺社雜事記〕

六十 五月十四日、

一昨日於慈恩院、良家小會合、大吉田庄新唯識會米間事云々、慈恩院僧正、同得業、光明院法印、宴貞寺主、松林院僧正也、

六月十八日

一新唯識會始行、證義東院權僧正也、修南院僧正辭退之所也云々、

〔大乘院日記目錄〕

三 七月廿九日、法花會得請經舜、三十政成、關出高專、一分、

八月十二日、法花會得請俊憲、裝盛參賀、各鈍色五帖也、去年十二月廿二日、同得請輩定英、經尊、自今日加行始之、之由申之、同參賀、鈍色五帖也、去年得請之時、參申上者、重而參上、慇懃事也、

閏九月晦日、法花會始行之、

十月三日、第四日也、一乘院豎義、精義、光明院法印、權大豎問、淳懷、兼親、光慶各得業也、但兼親ハ闕請、非成業、融算、勲二問、新例歟、御共從僧二人、中童子二人、大童子一人、世上物忿之間、白晝御出仕也、

新唯識會

始行

同法華會

得請

始行

第四日

九日、御悅申車也、御共同前、各乘馬、但大童子參向、

〔大乘院寺社雜事記〕

六十 七月廿九日、

一法花會得請經舜、三十政成、關出高專、一分、參賀、各鈍色五帖見參了、

八月十二日、

一法花會得請、俊憲、裝盛參賀、各鈍色五帖、去年十二月廿二日、同得請躰、定英、經尊重而今日參申、加行始之禮云々、各以鈍色五帖也、重而參賀、慇懃者也、去月廿九日、三口加行始之、今日又四人合七口也、一乘院禪師共ニ八口歟、

珍重々々、

〔大乘院寺社雜事記〕

七十 九月五日、

一禪師御方加行社參樣如例、於大湯屋門專觀拜見、御大童子一人、御前從僧二人、或付衣之時も在之不同也云々指貫、西座一人、付衣、御童子、力者、當宮唐笠持在之云々、

閏九月六日、

一一乘院禪師義名賢聖被付之云々、

廿一日、

一一乘院殿御文到來、禪師御房法花會加行、一昨日より被初之由承者也、珍

加行

重之由返事申了、

廿八日、

一法花會廻請持來、兩通權官僧正加判沙汰之云々、學侶色々可押留之由、雖及其沙汰、不叶子細在之歟、又一乘院御計略□□先以珍重事也、内々用意事□□あり候らん、此大業之廻請、不日數替而可有始行條も末代至也、無力、

卅日、

一法花會始之、

堅精次第、〇以下

〔大乘院寺社雜事記〕

一七十

十月朔日、

一法花會自昨日始行、堅者定英、榮盛、今日堅者經舜、昨日助成事申入之、可計略之由、仰付訓英了、二百疋分也、

二日、晦日ヨリ
入專也、

一法花會堅者高專、

三日、

一法華會堅者一乘院禪師、精義光明院法印權大僧都隆憲、一同舜懷得業、二

同兼親擬得業、三同光慶擬得業、但兼親在京ノ間、闕請融算院供目代以上
非成業也

御出仕申刻、

四日、雨下、

一法花會堅者政盛、

五日、

一法花會堅者經尊、

六日、

一法花會堅者俊憲、

七日、雨下、

一（教之）乘院悅申、去四日物忝之間延引、今日可有其沙汰之由治定之處、雨下之間被延引了、

一乘院
悦申

八日、

一一乘院悦申在之、從僧二人、中童子二人、大童子一人、御童子力者牛飼二人、大童子馬俄ニ相違ノ間、自西御門令參向了、還御ハ御車後ニ步行、於南大

門御沓役用也、自南大門入堂云々、御車ハ廻西御門了、牛飼二人中百疋被
下行、畏申者也、木津牛不參之間、佐保田名主被仰出之、二頭進之云々、

十二月八日、

同方廣會

一方廣會始之、

〔大乘院寺社雜事記〕

六十 六月十四日、

一東大寺祇園會在之、押上郷與中御門郷、車先前相論故、雖令用意、舞車一向
不押之、今小路郷山計押出、風流如例、事出來見物衆兩三人被殺了、負手數
輩在之云々、俄古市等馳上、先以無爲子細歟、引退了、先年車先前相論事兩
郷在之、爲寺門成敗、探ニテ中御門一番ニ押之、當年又可爲探之由押上申
入之、中御門ハ以先年之探行未治定上者、不可取之云々、六方此間色々雖
及評定、無及成敗之間、今日兩郷風流止之畢云々、山押次第ハ、轉害、今小路
中御門、押上、如此各年沙汰也、如山次第ハ、車事無是非由、中御門申、寬正五
年ニ以探行未事相定之、祇園以前ニ札打之了、其後押上打破了云々、

〔東寺執行日記〕

十三 六月十八日、蓮花會行之、

五斗七升、八斗ノ四分一、文明十年ノ引足、仍且十八人各二前、中綱七人加
六斗ナル、又此内三升減分引之、淨琳、敬俊、

東大寺祇園會
舞車ノ事ニ依リ争
風流ニ依リ争
古市澄嵐
警戒ス

東寺蓮花會

乘俊、敬實、敬音、乘泉、定俊、夏衆五人豐後、下野、奉行、和泉、出雲、常陸、(後アラン)兩入、下部四人、鐘突二人、
法師、一水汲一人、

〔大乘院寺社雜事記〕

六十 六月十八日、

一長谷寺蓮花會也、兩定使在寺之由申、

〔大乘院日記目錄〕

三 二月一日、仁王講大頭、大乘院前大僧正、

〔大乘院寺社雜事記〕

六十 二月朔日、雨下、

一講座仁王講大頭予勲之、尊師兼實擬講、請僧三口、權僧正同出之、百部經支
配樣大僧正三人各三口、僧正一人三口、權僧正七人各三口、法印六人各三
口、權少僧(無別)二人各三口、權律師十三人各三口、又權律師二人各二口、合一百
口也、此内權律師任英、今朝入滅之間俄ニ三口不足也、仍大僧正一牘、東北
院ニ、自堂内四口札送之、未權律師二人ニ各三口札送之、(采力)○每月朔日、講堂
仁王講異事ナシ、

〔大乘院寺社雜事記〕

七十 九月朔日、

一講堂仁王講大頭權別當權僧正、導師長勝房擬講、三十疋下行、讀師法用三
人、各雜紙一束宛、

〔大乘院寺社雜事記〕

七十 十二月十七日、

長谷寺蓮華會
仁王講

仁王講理
趣分

五重門

五段舍利
講

舍利講

夏中舍利
講

結願

東寺舍利
講
捧物不足
依り初二
季ノ初ニ
行フ
勅願三十
講始行

文明十一年雜載

九一四

一節分也、仁王講十座、理趣分六卷轉讀之、心經以下御承仕明恩沙汰如例、

〔大乘院寺社雜事記〕七十 九月十六日、

一五重門廿一卷仁王講十座予行之、門仁王講異事ナシ、

〔大乘院寺社雜事記〕七十 正月十四日、

一五段舍利講予行之、○每月十四日、五段

十五日、

一舍利講導師權別當僧正、○每月十五日、舍利講異事ナシ、

〔大乘院寺社雜事記〕八十 四月八日、

一夏中恒例舍利講等初之、

〔大乘院寺社雜事記〕九十 七月八日、

一夏中舍利講大辨經等結願無爲、珍重々々、連歌同願之、

〔廿一口供僧評定引付〕○山城 正月廿七日、

一每月舍利講可有興行歟之由令披露之處、捧物不定之間、四季之初、正月、七月、四月、

月晦日計可被行云々、

〔大乘院日記目錄〕三 二月廿三日、勅願三十講始、

三十講論
匠

十二月十九日、三十講論匠朝乘、興經、賴盛、英善、淳專、淨弘、

〔大乘院寺社雜事記〕七十 正月十一日、

一勅願三十講、自來晦日可始行之由仰、僧名奉行兼親得業可申、

廿六日、

一自學侶書狀到來、勅願御講、來月十八日ニ可延引之由云々、則延引旨仰綱

所了、

二月十七日、

一御神樂必定之間、勅願三十講、來月ニ可延引之由仰綱所了、又自學侶可有

始行之由書狀到來、且如何、二條殿御下向以下旁以取亂也、可延引之由仰

遣納所了、於供料者、先以可(行カ)可曳之歟否之由、同内々仰合之、

廿三日、

一勅願三十講始之、談義東院權僧正、淨法院權僧正、初座講師光明院法印、綱

所契舜威儀師、舜乘從儀師、供料納所訓英法師、山道大般若供料可有下行

云々、今日奉行兼乘出仕、私ニ相撲云々、

廿五日、

相撲

文明十一年雜載

九一五